

クラシック音楽文化 受容の変遷

外来演奏家によるコンサート史への一考察

皆川 弘至

The Aspects in the Reception of “Classical Music” Culture: A Survey Concerning the History of Concerts by Visiting Performers

MINAGAWA Hiroshi

Abstract

In the slightly more than 200 years from 1790 until the present day, research documents covering the history of performances of foreign musicians who have visited Japan are virtually non-existent. In particular, as shown in the reference material at the end of this document, records of the Pre-Meiji Era (before 1868), the Meiji Era (1868-1912), and the Taisho Era (1912-1926) barely remain, and furthermore are currently out of print and unobtainable.

In light of the above, in this document, newspaper articles, printed publications, contemporary performance programs, etc. relating to the performances of visiting foreign musicians have been extensively read, organized, analyzed, and consolidated, and have in addition been classified into six categories: (1) Pre-Meiji Era; (2) Meiji Era; (3) Taisho Era; (4) Showa Era (pre-World War); (5) Showa Era (post-war); and (6) Heisei Era through the present.

In addition, from among the points which come into focus as a result of taking a broad overview of the main currents therein, and in particular drawing from the performances in Japan of 14 eminent orchestras, an examination of admission prices is provided from the perspective of arts management, in correlation with "Transitions in Year-on-Year Differences in University Graduate Starting Salaries" from a survey by the Ministry of Health, Labor, and Welfare, and with "General Consumer Price Index" and "General Consumer Price Index Excluding Rent of Homeowners (for entire country)" from surveys by the Ministry of General Affairs.

Key Word : Visiting Performer, Concert, Orchestra

[要約]

1790年から今日に至る凡そ200年余の間に、我が国を訪れた外国人音楽家の公演歴を包括した調査資料は無いに等しい。特に、明治時代以前(1868年以前)、明治時代(1868 - 1912)、大正時代(1912 - 1926)の記録は、本稿巻末の参考資料に示した通り、わずかに記録として残されている程度であり、現在は絶版で入手不可能でもある。

そこで本稿では、外来クラシック演奏家公演に限定し、新聞記事、刊行物、当時の公演プログラム等を渉猟し、調査・整理・分析・統合を加え、明治時代以前 明治時代 大正時代 昭和時代 <第2次世界大戦前> 昭和時代 <戦後> 平成元年から現在の6つに分類した。

その主脈を時系列的に概観することにより浮き彫りとなる諸点の中から、特に世界的に著名なオーケストラ14団体の来日公演に絞り、入場料金の推移を、厚生労働省調査による「大卒者初任給額及び対前年増減率の推移」及び総務省調査による「消費者物価総合指数」、「持家の帰属家賃を除く消費者物価総合指数（全国）」と対比し、更にアート・マネジメントの視点から考察を加えた。

キーワード：外来演奏家、コンサート、オーケストラ

はじめに

外来演奏家公演は東京・大阪等の首都圏を中心に年を追うごとに増加し、今やわが国（特に東京）は、演奏家にとってニューヨークやロンドン、パリ等と並ぶ重要な演奏会開催都市として位置づけられている。このことは、筆者のプロデューサー、ジャーナリスト経験から得た指揮者 Herbert von Karajan ヘルベルト・フォン・カラヤン、Leonard Bernstein レナード・バーンスタイン、ピアニスト Wilhelm Kempff ウィルヘルム・ケンプ、Jörg Demus イェルク・デムス、ヴァイオリニスト Henryk Szeryng、等、多くの演奏家の言説からも明らかである。

本稿では要約に記述した通り、日本に於ける海外演奏家公演の青史を6時代に分類した。また、演奏表現の諸領域を接続させて検討を加える為、ピアノ、声楽、ヴァイオリン、弦楽四重奏、管楽器ソロ、室内管弦楽団等アンサンブル、オーケストラ、声楽ソロ、合唱、オペラのジャンルに分類した。その上で、その変遷を辿ることによってクラシック音楽受容の実態を明らかにし、延いては外来演奏家公演のジャンル動向から音楽ファンの趣向を、また、典型的な来日演奏公演であるオーケストラを中心にした入場料の推移の定性調査からコンサート入場料金の趨勢を導き出した。更に大学生、一般人を対象に入場料金にたいする調査を実施し、生活水準と入場料金との連関について考察を加えた。

尚、本論の調査に際し、筆者が聴取・採集した1957年以後の史料も援用し、一覧では視聴した公演をゴシック体で示し、インタビューし謁見した外来演奏家にアンダーラインを、録音プロデュースしたものには を附記し、本稿の検証における基点の一つとした。

また、明治時代以前、明治時代、大正時代、昭和 期、の各々図1、図2、図3、図4には調査で判明した範囲内で会場、マネージメントを附記し、後段の論述で触れる関係上、社会事象・その他を記載したが、昭和 期の図5ではマネージメントのみに留め、1957年以

後は図示を省略し一覧に留めた。且つ、歴史的価値を有する大正時代から昭和 期初期までの公演プログラムを入手可能な限り掲載した。(筆者が視聴した公演プログラム・資料は全て保有するが、その量が膨大に渡るため、稿を改めて発表する予定である)

* 本稿の一覧では、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞及び日本経済新聞に記事掲載されたものと、レコード協会加盟レコード会社から CD リリースされた演奏家を中心に収録した。

1 . 西洋音楽の流入

わが国には古来、雅楽などの独自の音楽文化があり、明治維新を経て新時代を迎えた明治 3 年には太政官に雅楽局が設置され、京都御所の楽人たちを呼び寄せて練習を行う等、活発な音楽活動がなされていた。然しながら、わらべ歌等の俗楽は学校教育には馴染まず、雅楽も一般人には親しまれていなかった実情に鑑み、後に御用掛に起用された伊澤修二の “ 音楽教育が心身に有益である ” との熱心な上申と、1872 年 (明治 5 年) に小学校教科のひとつとして設置された 「 唱歌 」 の具体的実施を目的に目賀田種太郎などの協力も得て、1879 年 (明治 12 年 10 月) に当時の文部省は音楽取調掛を設置するに至ったことは周知の通りである。米国に留学し、ブリッジウォーター師範学校及びハーバード大学で教育事情を研究し、更に音楽をメーソン (Lothar whiting Mason 1828 - 1896) に師事し、音楽教育について研鑽を積んだ伊澤修二は、1884 年 (明治 17 年 2 月) 文部卿大木喬任に提出した 「 音楽取調成績申報要略 」 で、1) 東西二洋の音楽を折衷して新曲を作る 2) 将来国楽を興すべき人物の養成 3) 諸学校への音楽の実施、を提案し、この方針・内容が実施されるに至った。

従ってこれを契機に、教育音楽を中心として西欧音楽文化の受容が始まったといえるだろう。

1 . 1 . 明治時代以前の西洋音楽移入

下記図 1 の通り、明治時代以前は主として軍楽隊やキリスト教の賛美歌を中心として移入された。未だプロフェッショナルな職業音楽家は来日していなかったが、万延 1 年に来日した、白人が顔を黒く塗り、歌い興じるエチオピアン (クリスティ) ・ ミンストレルズや、文久 3 年に来日した Signor Robbio、Miss Bailey、Marquis Chisholm、Sipp の楽団による演奏会は、現在の海外演奏家コンサート、オペラ公演隆盛への萌芽と言えよう。

尚、1820 年 (文政 3 年) には長崎の出島で、日本最古の西洋オペラ・オペレッタ上演と考えられる音楽劇がオランダ商館員によって上演されている。

図 1

年号	事象	国籍	ジャンル	会場マネージメント	社会事象 その他
1790 寛政 2 年 ~	ファン・デン・ベルヒ	オランダ	ドイツの歌を	大年寄伊藤空之允盛永	寛政の改革 ロシア船。根室に

						来航 (1792)
1804	文化1年 9月7日	ブチャーチン一行の軍楽隊	ロシア	軍楽隊		間宮林蔵、樺太探検 (1808)
1820	文政3年	オランダ商館員	オランダ	エジディオ・デュニ (1708-1775) : 音楽劇	長崎・出島・カピタン屋敷	
1826	文政9年	シーボルト (長崎で医者)	オランダ	小型ピアノを江戸へ。オルゴールで西洋音楽を紹介	諏訪神社祭礼	異国船打払令 (1825) 天保改革 (1841 ~ 43)
1853	嘉永6年	ペリーが率いたサスケエハナ号 (ブキャナン艦長) ミシシッピ号 	アメリカ	ブラスバンド 鼓笛隊 「クリステイ・ミンストレルズ」 (黒人歌流し)	浦賀	ペリー来航
1854	嘉永7年 3月17日	ペリーが率いたサスケエハナ号、ミシシッピ号ポーハタン号	アメリカ	ブラスバンド 鼓笛隊	浦賀 函館	日米和親条約
1855	嘉永8年	スクナー船で来訪したアメリカ市民とロシア下士官	アメリカ ロシア	音楽会を開催したが不明	下田の寺院	日米通商条約 (1858)
1860	万延1年	ポーハタン号	アメリカ	ブラスバンド、鼓笛隊 「エチオピアン (クリステイ)・ミンストレルズ」	横浜	桜田門の変
1863	文久3年	イギリス・ユーリアラス号軍楽隊	イギリス	軍楽隊	横浜	
	文久3年 8月	Signor Robbio シニョール・ロビオ Miss Bailey ベイリー Marquis Chisholm マーキス・チホーム Sipp シップ	オーストラリア	ロビオのヴァイオリンを含む楽団	不明 一説では横浜各地	
1865	慶応1年 9月16日	フランス海軍ゲリエール号	フランス	軍楽隊	ゲリエール号上 (兵庫沖)	
1866	慶応2年 2月5日	イギリス軍楽隊と日本軍楽隊の合同演奏	イギリス	軍楽隊	横浜	

	春	J.B.Noortdhoek Hegt ノールトフーク・ヘフト	オランダ	音楽と芝居	横浜・居留地 68 番	
1867	慶応3年 12月20日	イギリス・オーシャン号軍楽 隊（アメリカ海軍将兵12名の 埋葬で）	イギリス	軍楽隊	神戸・墓地	
1868	慶応4年 4月4日～	イギリス陸軍 軍楽隊長 John William Fenton ウィリア ム・フェントン / お雇い外国 人	イギリス	軍楽隊	横浜各地	明治維新
	5月23日	イギリス海軍ロドニー号軍楽 隊（女王の誕生を祝って）	イギリス	軍楽隊	ロドニー号上 （大阪港）	ウィーン国立歌劇 場開場（1869年）

以下の **一覧** では、原則として来日順に記載し、1790年から1925年の来日演奏家につ
いては、現在では知名度が低いことから、特にジャンルが識別出来るように下記の符号を付
記した。

P = ピアノ **V** = ヴァイオリン **弦** = その他弦ソロ **管** = 管楽器ソロ **Vo** = 声楽
E = 弦楽四重奏団等・アンサンブル **B** = ブラスバンド **C** = 指揮 **O** = オーケストラ
Op = オペラ **Ch** = コーラス **他** = その他

一 覧

- 1790 寛政2年 **Vo** ファン・デン・ベルヒ（オランダ人がドイツ・リートを）
- 1804 文化1年 **B** プチャーチン一行の軍楽隊
- 1820 文政3年 **Op** オランダ商館員
- 1826 文政9年 **他** シーボルトが小型ピアノ、オルゴールで西洋音楽を紹介
- 1853 嘉永6年 **B** ペリーが率いたサスケハナ号（ブキャナン艦長）、ミシシッピ号の軍楽隊と鼓
笛隊が「クリスティ・ミンストレルズ」（黒人歌流し）を。
- 1854 嘉永7年 **B** ペリーが率いたサスケハナ号、ミシシッピ号、ポーハタン号の軍楽隊と鼓
笛隊
- 1855 嘉永8年 **E** スクーナー船で来訪したアメリカ市民とロシア士官が下田の寺院で音楽会開催。
- 1860 万延1年 **B** **他** ポーハタン号のブラスバンドと鼓笛隊が「エチオピアン（クリスティ）ミン
ストレルズ」
- 1863 文久3年 **B** イギリス・ユーリアラス号軍楽隊、オーストラリアの楽団（Signor Robbio シニ
ョール・ロビオ、Miss Bailey ベイリー Marquis Chisholm マークス・チホーム、Sipp
シップ）
- 1865 慶応1年 **B** フランス海軍ゲリエール号軍楽隊
- 1866 慶応2年 **B** イギリス軍楽隊と日本軍楽隊の合同演奏、J.B.Noortdhoek Hegt ノールトフーク・
ヘフトが横浜居留地で音楽と芝居を上演。
- 1867 慶応3年 **B** イギリス・オーシャン号軍楽隊軍楽隊（アメリカ海軍将兵12名の埋葬で）
- 1868 慶応4年 **B** イギリス陸軍軍楽隊長 John William Fenton ジョン・ウィリアム・フェントン
 / お雇い外国人、イギリス海軍ロドニー号軍楽隊（女王の誕生を祝って）

1.2. 明治時代の西洋音楽移入

明治時代を検証すると、明治以前が軍楽隊一辺倒だったことに対し、歌手や、楽器演奏に幅が広がったことが顕著な特徴としてあげられるが、特筆すべきは、明治12年にイギリスから来日した「ヴァーノン歌劇団」であろう。毎年と言って良いほどに大掛かりな海外オペラ・ハウスの引越し公演が開催される現在と異なり、当時の交通事情や文化的インフラストラクチャーを鑑みるなら、規模はともかく歌劇団として編成し、遠国の日本で公演を行ったことは驚嘆に値する。

また特記事項として、東京音楽学校（現・東京藝術大学）に奉職した所謂お雇い外国人教師や、音楽取調掛の設置が、後の洋楽界に良くも悪しくも、少なからず影響を与えることになったことが挙げられる。お雇い外国人は、幕末・明治前期に、幕府や政府、学校、企業などに指導者や教師として雇用された外国人のことで、日本の近代化に大きく貢献した。代表的な例として日本の唱歌教育制度の生みの親とも言うべきアメリカ人教師 Luther Whiting Mason（1818-1896）ルーサー・ホワイティング・メーソンがあげられる。

尚、明治・鹿鳴館時代の主たる演奏会場は、東京鹿鳴館、横浜パブリック・ホール（後の横浜ゲーテ座）、神戸体育館劇場、長崎パブリック・ホールであった。

図 2

年号	演奏家	国籍	ジャンル	会場	社会事象 その他
1870	明治3年 9月7日 イギリス第10連隊第1大隊軍 楽隊（薩摩楽隊と合同）	イギリス	軍楽隊	横浜・山手公園 （現・山下公園）	廃藩置県（1871） 学制公布（1872） 横浜毎日新聞創刊
1875	明治8年 10月2日 Maria Palmieri マリア・バルミエリ	イタリア	歌手（S）	蓬来社	
	10月5日 9日 マダム・バルミエリ	イタリア	歌手（S）	工学寮	
	11月10日 Dar'ya Mikhailovna Leonova レオノワ	ロシア	歌手（A）		
1879	明治12年 11月29日 ヴァーノン歌劇団 フロトー「マルタ」 オフエンバック「ジェロル スティン女大公殿下」	イギリス	歌劇団	新富座 横浜ゲーテ座	10月音楽取調掛 設置 朝日新聞創刊
1880	明治13年 7月24日 J.C.H.Iburg イビュール	上海	ヴァイオリ ン	蘭国公使	
1881	明治14年 3月 Melchiorre Vera メルチオーレ・ヴェラ Matilde Milani Vera ヴェラ夫人	上海	ヴァイオリ ン 声楽	ゲーテ座 訓盲院	小学校唱歌集刊行
	4月9日 Royal Compagnie Italienne （Vela） イタリア王立座	イタリア	ヴァイオリ ン 歌手	訓盲院	
1882	明治15年 ウィクトリユーズ号楽隊	イギリス	楽隊	横浜公園	自由民権運動最盛

	8月31日					
1885	明治18年 6月8日	モーレルのメンバー	フランス	ヴァイオリン 他	文部省新築館	
	8月9日				鹿鳴館	
	不明	Luisa Marchetti ルイザ・マルケッティ	イタリア	声楽	東京・横浜・長崎	
	8月	Mascotte Opera Company マスコット歌劇団 G.B.Fentum フェンタム	イギリス	オペラ 指揮	神戸・横浜	
	11月11日	エミリー・メルヴィル歌劇団	イギリス	オペラ	横浜パブリックホール	
1886	明治19年 8月10日	Edouard Remenyi エドアルド・レメニ Guillaume Sauvlet ギョーム・ソ・ヴレー	ハンガリー オランダ	ヴァイオリン ピアノ & 指揮	宮中	日本初の民間音楽 会開催
1888	明治21年 2月23日	ヴァンス嬢	?	オルガン	帝国大学英語会	文部省「楽典初歩」
	11月1日	Mme, Kravtsoff=Krasoff (S) クラヴツォフ	ロシア	歌手	横浜パブリック ホール	
	11月10日	Mlle, Helene Vitvitsky (P)		ピアノ	学習院講堂	
1889	明治22年 6月19日	Amy Sherwin アミー・シェルウィン	イギリス	歌手	東京・明治会堂	大日本帝国憲法 発布 歌舞伎座落成
1890	明治23年 3月11日	Adolf Terschak (1832 - 1901) アドルフ・テルシャック	ハンガリー	フルート	鹿鳴館	初期浪漫主義文学 日本初の音楽誌 「音楽雑誌」発刊
	8月3日	アドルフ・テルシャック ディトリッヒ、シュレーレル	ハンガリー	フルート他	宮中	
1891	明治24年 3月13日	アメリカ戦艦軍楽隊	アメリカ	軍楽隊	築地会堂	カーネギーホール 開場
	10月23日	Friedenthal フリ・デンタール	ドイツ	ピアノ	帝国ホテル	
	12月24日	Rudolf E.Dittrich (1861-1919)			鹿鳴館	
1893	明治26年 4月1日	ルドルフ・ディトリッヒ	オーストリア	ヴァイオリン	東京音楽学校 奏楽堂(校友会)	
	4月15日				(校友会)	
	5月	ディトリッヒ フォン・ケーベル ラムゼゲル	オーストリア	ヴァイオリン ピアノ ヴィオラ	鹿鳴館	
	6月15日	ルドルフ・ディトリッヒ			鹿鳴館 (大日本音楽会)	
	7月 18、21日	Costi Domtschoff コスティ・ドムチョフ	ロシア	ヴァイオリン	横浜パブリック ホール	
	11月24日	フランツ・エッケルト ブラッチャリーニ Antoine Katski	ドイツ イタリア	指揮 歌手 ピアノ	東京音楽学校	
	1894	明治27年 6月21日	カッツキー	ポーランド		
	5月5日	フォン・ケーベル ディートリッヒ ラムゼゲル ケスレル	オーストリア	ピアノ ヴァイオリン ヴィオラ	鹿鳴館	

		ヘルプ夫人		ピアノ 独唱		
	6月16日	ルドルフ・ディートリッヒ フォン・ケーベル ブロクサム嬢		ヴァイオリン ピアノ 独唱	鹿鳴館	
	11月10日	ブラッチャリーニ	イタリア	声楽	東京音楽学校	
1895	明治28年 1月24日	オヴィード・ミュザン	ベルギー	ヴァイオリン	神田・キリスト 教徒青年会会堂	日清戦争
		アミル・ルイス・ミュザン		ソプラノ		
	1月27日	エドワルド・シャルフ		ピアノ	帝国ホテル	
1896	明治29年 1月24日	オヴィード・ミュザン	ベルギー	ヴァイオリン	青年会会堂	
	5月18日	Sydney H.Morse シドニー・モース	イギリス	歌手	横浜パブリック ホール	
	9月23日				東京音楽学校 奏楽堂(同窓会)	
	10月14日			横浜パブリック ホール		
1897	明治30年 9月26日	シドネーエッジモールス	不明	アンサンブル	東京音楽学校	社会主義思想発生
1898	明治31年 10月28日	モリソン夫人 シャープ氏		声楽	横浜パブリック ホール	
1899	明治32年 7月7日	Costi Domtschoff コスティ・ドムチョフ	ロシア	ヴァイオリン	皇居	
1901	明治34年 3月17日	Raphael von Koeber (1848- 1923) ケーベル博士、ユンケル	ロシア	ピアノ	築地・ホテル	
	7月25日	ブライトシュク・マルカルト マルカルト	ドイツ	ハーブ ヴァイオリン	横浜山手公会堂	
	11月2日	Gentile ジェンマイル Mastropasqua マストロパスク ワ		ピアノ ソプラノ	東京音楽学校 (東京青年会)	
1902	明治35年					日英同盟 自然主義文学機運
1903	明治36年 5月9日	米国軍艦軍楽隊	アメリカ	ブラスバンド	横浜山手公会堂	
	5月18日	Olga Khroostcheff オルガ・クロースチェフ	ロシア	ピアノ	横浜山手公会堂	
1904	明治37年 3月5日	アウグスト・ユンケル (東京音楽学校教師) ハイドリッヒ	ドイツ	ヴィオラ ピアノ	東京音楽学校	日露戦争
1905	明治38年 7月8日	Wilherm Dubravcich ウィルヘルム・ドヴオラヴィ ッチ		指揮・ヴァ イオリン	明治音楽会	日露戦争 日韓条約
	7月15日				東京音楽学校	
	9月4～9日	パントマインオペラ	イギリス	オペラ	山手町パブリック ホール	
	10月23日	イギリス艦隊音楽隊	イギリス	軍楽隊	日比谷音楽堂	
	11月25日	オルガ・クロースチェフ	ロシア	ピアノ	横浜等で3回	
1906	明治39年 10月7日	Professor Griffith グリフィス 教授		フルート	横浜パブリック ホール	
1907	明治40年	マーキンス		ヴァイオリ	横浜、青年会館	日露条約

	1月21日、 22日、24日	カウエン夫人 ハント嬢		ン 声楽 ピアノ	神田、青年会館 帝国ホテル 名古屋、大阪	日本初の蓄音機・ 平円盤製造
	2月8日					
	3月	オペラ、パッドマン	ドイツ	歌手	山下町グランド ホテル投宿	
	3月12日	アンナ・ハウエル	ドイツ	不明	青年会館	
	5月7日	Friedenthal	ドイツ	ピアノ	袋町・青年会館	
	5月21日 24日	フリ - デンタール			横浜パブリック ホール	
	3月12日	シェーファル	ドイツ	ヴァイオリ ン	東京キリスト教 青年会館	
		ハイドリッヒ教授		ピアノ		
		サレンジャー		チェロ		
	7月7日	ラピンスキー ミハイロワ オスラン	ロシア	声楽 声楽 ピアノ	メトロポールホ テル	
	9月16日	バンドマン歌劇		ミュージカ ル	神田、青年会館	
	10月27日	ユンケル、ケーベル	ドイツ	ヴィオラ	奏楽堂	
1908	明治41年 5月13日	Nicolai Figner (1857-1918) ニコライ・フィグネル	ロシア	テノール	横浜オリエンタ ル・パレスホテ ル	退廃思想
1909	明治42年 1月25日～	ドイツ合唱団 ハイドリッヒ	ドイツ	合唱 ピアノ	有楽座(数寄屋 橋)	
	3月28日	Heinrich Werkmeister (1883- 1936) ウェルクマイスター	ドイツ	チェロ	東京音楽学校	
	4月14日 27日	ジョルジュ・ヴィギエチ	フランス	ヴァイオリ ン	有楽座 帝国ホテル	
	4月	レオポルト・プレミスラヴ	オランダ	ヴァイオリ ン	東京音楽学校	
	4月25日	Bruno (Hanka) Petzoldt (1862- 1937) ブルーノ・ベッツオールド夫人	ドイツ	ピアノ	東京音楽学校	
	4月26日 28日 10月2日	ハーバート・ウィザース	イギリス	チェロ	有楽座 青年会館	
	5月24日	Kaminsky Brun 夫人	ロシア	声楽	帝国ホテル	
	5月	ルドルフ・ロイテル	ドイツ	ピアノ	東京音楽学校	
	11月24日	(東京音楽学校教師)			有楽座	
	9月	ハンカ・ベツオールド		ピアノ	奏楽堂	
	10月9日	キザアス エルゼイ夫人	?	チェロ ピアノ	?	
1910	明治43年 2月19日 12月16日 12月9日 12月21日	Catherine Todorowitzh カテリーネ・トドロヴィッチ Capellmann カペルマン Madame Roedel	ロシア オースト リア	ピアノ ヴァイオリ ン ピアノ	帝国ホテル 明治音楽会 滞在ホテル? オーストリア大 使館	韓国併合 初のレコード・コ ンサート(東京音 楽学校)
1911	明治44年 1月30日 2月11日	レーデル夫人			精養軒	条約改正

1月	Emma Calve (1858-1942) エンマ・カルヴェ	フランス	オペラ歌手	(松本楽器)
3月4日	ビネウィッチ ローチク トドロウィッチ夫人 ニッコー	フランス	ヴァイオリン ヴァイオリン ピアノ チェロ	華族会館
8月10日	Veyhar ヴェイアー	アメリカ	PhonoFiddle 一弦楽器	横浜グランドホテル
8月16日				帝国ホテル
10月9日	ハーバート・ウィザース 他	イギリス	チェロ	青年会館
12月6日	Adolfo Sarcoli (1867-1936) アドルフォ・サルコーリ	イタリア	テノール	東京フィルハーモニー会 帝国劇場
12月15日~				
1912 明治45年 2月7日	August Junker (1870-1944) アウグスト・ユンケル	ドイツ	ヴァイオリン	横浜ゲーテ座
	Heinrich Werkmeister (1883-1936) ヴェルク・マイスター			築地、精養軒ホテル
3月15日	ロイテル Adolfo Sarcoli (1867-1936) サルコーリ	イタリア	声楽	テル
2月25日	ハンカ・ベツオールド		ピアノ	東京女子高等師範学校講堂
3月5日				帝国ホテル
5月5日	ユンケル、 ロイテル	ドイツ	ヴァイオリン ピアノ	歌舞伎座
5月31日	ドイツ合唱団	ドイツ	合唱	青年会館
6月4日	スラウヤンスカ合唱団	ロシア	合唱	有楽座

一 覧

- 1870 明治3年 [B] イギリス第10連隊第1大隊軍楽隊(薩摩楽隊と合同)
- 1875 明治8年 [Vo] Maria Palmieri マリア・パルミエリ、Dar'ya Mikhailovna Leonova レオノーワ
- 1879 明治12年 [Op] ヴァーノン歌劇団
- 1880 明治13年 [Vo] Iburg イビュール
- 1881 明治14年 [V] [Op] Royal Compagnie Italienne (Vela) イタリア王立座 [V] Melchiorre Vera メルチオーレ・ヴェラ
[Vo] Matilde Milani Vera ヴェラ夫人
- 1882 明治15年 [B] ウィクトリューズ号楽隊
- 1885 明治18年 [V] [他] モーレルのメンバー、[Vo] Luisa Marchetti ルイザ・マルケッティ、[Op] Mascotte Opera Company マスコット歌劇団、[C] G.B.Fentum フェンタム、[Op] エミリー・メルヴィル歌劇団
- 1886 明治19年 [V] Edouard Remenyi エドアルド・レメニ [P] [C] Guillaume Sauvlet ギョーム・ソグレー
- 1888 明治21年 [他] ヴァンス嬢、Mme, Kravtsoff=Krasoff (S)クラヴツォフ、Mlle, Helene Vitvitsky (P)
- 1889 明治22年 [Vo] Amy Sherwin アミー・シェルウィン

1890 明治 23 年	[管] <i>Adolf Terschak (1832-1901)</i> アドルフ・テルシャック、ディトリッヒ、シューレル
1891 明治 24 年	[P] <i>Friedenthal</i> フリ - デンタール、[V] <i>Rudolf E. Dittrich (1861-1919)</i> ルドルフ・ディトリッヒ
1893 明治 26 年	[V] ディトリッヒ、[P] フォン・ケーベル、[弦] ラムゼゲル、[V] <i>Costi Domtschoff</i> コステイ・ドムチョフ、[C] フランツ・エッケルト、[Vo] ブラッチャリーニ
1894 明治 27 年	[P] <i>Antoine Katski</i> カッツキー [Vo] ブラッチャリーニ
1895 明治 28 年	[V] オヴィード・ミュザン、[Vo] アミル・ルイス・ミュザン、[P] エドワルド・シャルフ
1896 明治 29 年	[V] オヴィード・ミュザン、[Vo] <i>Sydney H. Morse</i> シドニー・モース
1897 明治 30 年	[不明] シドニーエッジモールズ一行
1898 明治 31 年	[Vo] モリソン夫人、シャープ氏
1899 明治 32 年	[V] <i>Costi Domtschoff</i> コステイ・ドムチョフ
1901 明治 34 年	[P] <i>Raphael von Koeber (1848-1923)</i> ケーベル博士、[他] ブライトシュク・マルカルト、[V] マルカルト [P] <i>Gentile</i> ジェンタイル、[Vo] <i>Mastropasqua</i> マストロパスクワ
1903 明治 36 年	[B] 米国軍艦音楽隊、[P] <i>Olga Khroostsheff</i> オルガ・クロースチェフ
1904 明治 37 年	[弦] アウグスト・ユンケル (東京音楽学校教師) [P] ハイドリッヒ
1905 明治 38 年	[C] [V] <i>Wilhelm Dubravcich</i> ウィルヘルム・ドヴォラヴィッチ、[Op] パントマインオペラ [B] イギリス艦隊音楽隊 [P] オルガ・クロースチェフ
1906 明治 39 年	[管] <i>Professor Griffith</i> グリフィス教授
1907 明治 40 年	[V] マーキンス、[Vo] カウエン夫人 [Vo] オペラ、パッドマン、[不明] アンナ・ハウエル、[P] <i>Friedenthal</i> フリ - デンタール、[V] シェーフアル、[P] ハイドリッヒ教授、[弦] サレンジャー、[Vo] ラピンスキー、[Vo] ミハイロワ、[P] オスラン、[弦] ユンケル
1908 明治 41 年	[Vo] <i>Nicolai Figner (1857-1918)</i> ニコライ・フィグネル
1909 明治 42 年	[Ch] ドイツ合唱団、[P] ハイドリッヒ、[弦] <i>Heinrich Werkmeister (1883-1936)</i> ウェルクマイスター、[V] ジョルジュ・ヴィギエチ、[V] レオポルド・プレミスラヴ、 <i>Bruno (Hanka)</i> [P] <i>Petzoldt (1862-1937)</i> ブルーノ・ペッツオールド夫人、[弦] ハーバート・ウィザーズ、[Vo] <i>Kaminsky</i> 、[Vo] <i>Brun</i> 夫人、[P] ルドルフ・ロイテル (東京音楽学校教師) [P] ハンカ・ペッツオールド、[弦] キザース、[P] エルゼイ夫人
1910 明治 43 年	[P] <i>Catherine Todorowitsh</i> カテリーネ・トドロヴィッチ、[V] <i>Capellmann & Madame Roedel</i> カベルマン & レーデル夫妻
1911 明治 44 年	[Vo] <i>Emma Calve (1858-1942)</i> エンマ・カルヴェ、[V] ビネウィッチ、[弦] <i>Veyhar</i> ヴェイアー、[弦] ハーバート・ウィザーズ、[Vo] <i>Adolfo Sarcoli (1867-1936)</i> アドルフォ・サルコーリ、[P] ハンカ・ペッツオールド、[V] ユンケル、[P] ロイテル、[Ch] ドイツ合唱団、[Ch] スラウヤンスカ合唱団

1. 3. 大正時代の西洋音楽移入

大正時代に入ると外来演奏家公演も本格的な様相を呈しはじめ、現在の外来演奏家公演の基盤はこの期に確立されたと考えられる。作曲家 *Sergey Prokofiev* や、20 世紀を代表する名ヴァイオリニスト *Mischa Elman*、*Efrem Zimbalist*、*Alexander Moguilewsky*、*Fritz Kreisler*、*Jascha Heifetz* が相次いで来日し、わが国の音楽史にその名を留めた。

一方、この時代の特徴の一つとして、ロシア声楽団スラヴィンスカヤ、レニングラード歌劇団、ロシア歌劇団と、ロシアの演奏家が多く日本を訪れたことが挙げられ、更に、A.

Carpi が主催した地方巡業専門のオペラ・カンパニー、「カーピ伊太利大歌劇団」が 1923 年（大正 12 年）、1925 年（同 14 年）と公演を行った（昭和時代に入っても昭和 2 年、4 年、5 年と継続して来日、東京では帝劇、大阪では宝塚歌劇場、中ノ島公会堂、その他に京都、神戸で公演した）ことが、日本のオペラ運動に拍車をかけ、大正ロマンの華とも言うべき浅草オペラ全盛を嚮導し、その前駆となったと言えよう。

尚、浅草オペラは、アメリカ、イギリスでバレエを修得した渡欧中の舞踊手高木（旧姓永井）徳子が、第 1 次大戦の為ロシアとの契約が成らず、大正 3 年に帰国し、大正 5 年 5 月 27 日、高木一座として浅草のキネマ倶楽部でミュージカルを演じて幕を開けたのが始まりで、大正 14 年 10 月に牛込会館に於ける「アイダ」等の公演によって終息を迎えるまでの間、金竜館を始め、浅草オペラは各地で開催された。尾上松之助、原信子、戸山英二郎（藤原義江）、田谷力三といった浅草オペラのスター達は、この時代を駆け抜けた寵児としてもはやされ、ペラゴロといわれた浅草オペラ・ファンを生み出した。

そして、昭和時代に花開く NHK 招聘によるイタリア・オペラ、日生劇場主催によるドイツ・オペラ、ミラノ・スカラ座の引越し公演等を始めとするオペラブームの萌芽がここに見られ、こうした潮流は、現在に至るまで日本人大衆の心底に教養・娯楽享受欲求として脈々と息づき、現在のオペラ熱は正しくその顕現化に他ならない。


図 3

1912	大正元年 12月11日	ユンケル ハンカ・ベツオールド ヴェルク・マイスター		ヴァイオリン ピアノ チェロ	帝国劇場	
1913	大正2年 10月23日	Madame de Silva シルバ夫人 Harry W. Brown	ルーマニア アメリカ	メゾ・ソプラノ ピアノ	帝国ホテル	
	11月9日	ハンカ・ベツオールド クローン		ピアノ ヴァイオリン	奏楽堂	
	11月29日	ドーラ・フォン・メーレンド ルフ、ベツオールド夫人	ドイツ	ヴァイオリン ピアノ	帝国ホテル	
1914	大正3年					対独宣戦(第一次世界大戦)
1915	大正4年 5月 15~17日	ロシア声楽団スラヴィンスカ ヤー行37名	ロシア	合唱・声楽	帝国ホテル	白樺理想主義文学
1916	大正5年 1月22日	ベルソン		ヴァイオリン		
	2月17日	ハンカ・ベツオールド		ピアノ	東京音楽学校	
	3月7日	ザレスカ		ピアノ	神田青年会館	
	10月	ローシー		喜歌劇	赤坂・ロイヤル館	
1917	大正6年から、帝国劇場の指揮者ローシーが、活動写真館であった万歳館（赤坂見附）をロイヤル館と改め、オペラコミックを定期的に公演した。					
1918	大正7年	コロンボ	イタリア	ヴァイオリ	東京音楽学校	浅草オペラ全盛

	2月14日	フェレッチ Paul Scholz (1889-1944) シヨルツ	イタリア ドイツ	ン バリトン ピアノ		
	5月18日	ボグミル・シコーラ キャスリン・キャンブル	ロシア	チェロ ピアノ	東京音楽学校奏 楽堂	
	6月 2、8、9日	ミヒヤエル・シャビロ		ヴァイオリ ン	帝国劇場	
	6月 21、22日	マリア・カリンスカヤ レオ・ボトルスキー	ロシア	ソプラノ ピアノ	神田青年会館	
	6月	アレクサンダー・スクラレフ スキー	ロシア	ピアノ	東京音楽学校 (非公開)	
	7月6、7日	Sergey Prokofiev (1891-1953) セルゲイ・プロコフィエフ	ロシア	ピアノ・ 作曲	帝国劇場	
	9月 26～30日	アレキサンダー・クメルニツ キ ウラディミール・シロイド コンスタンティン・バカレイ ニコフ	ロシア	ピアノ ヴァイオリ ン チェロ		デモクラシー思想
1919	大正8年 5月18日	ゲラルド・ザルスマン キャンブル	オランダ	バリトン ピアノ	東京音楽学校奏 楽堂(非公開)	
	6月7日					
	6月10日	ピアストロ ミロイチ イーゼマン	ロシア	ヴァイオリ ン ピアノ ソプラノ	神田青年会館	
	9月1～15日	レニングラード歌劇団 演目:「アイーダ」「ファウス ト」「カルメン」「ボリス・ゴ ドノフ」	ロシア	オペラ	帝国劇場 (12、10、7、3、 1円)	
	9月29日	ピアストロ ショーア	ロシア	ヴァイオリ ン ピアノ	神田青年会館	
	10月5日	パウル・シヨルツ		ピアノ	東京音楽学校奏 楽堂(洋楽研究 会)	
	10月 17～19日	チェルカスキー公爵夫人 ゲゼクス セリワノフ	ロシア	声楽	帝国劇場	
	11月	ヘンリー・アイクハイム		ヴァイオリ ン	慶応義塾講堂 (慶応ワグネル ソサエティ)	
1920	大正9年 5月15日	ボグミル・シコーラ	ロシア	チェロ	東京音楽学校奏 楽堂(徳川頼貞)	初のメーデー
	5月				慶応義塾講堂 (慶応ワグネル ソサエティ)	
	11月 23、24日	ボグミル・シコーラ ヒルベルク夫人	ロシア	チェロ ピアノ	南葵楽堂	
1921	大正10年 2月 16～19日	Mischa Elman (1891-1967) ミツシャ・エルマン アーサー・レッサー	ロシア アメリカ	ヴァイオリ ン ピアノ	帝国劇場 (朝日新聞社)	プロレタリア文学 論

						
	4月23日	イワン・ドネプロフ シュクリテッキー・セエロヴ ニコライ・アレキサンドルフ	ロシア	バリトン ソプラノ バス	丸の内・保険協 会 (日本作曲家協 会)	
	5月 16～20日	シューマン・ハインク ジョージ・モーガン カスリン・ホフマン		コントラル ト バリトン ピアノ	帝国劇場 (朝日新聞社)	
	9月 21～29日	ロシア歌劇団 演目：「カルメン」「ロミオと ジュリエット」「ボエーム」 「道化師」	ロシア	オペラ	帝国劇場	
1922	大正11年 1月29日	フランス海軍モンカルム号軍 楽隊	フランス	ブラスバン ド	日比谷公園奏楽 堂	
	2月19日	リブコウスカ スクラレフスキー	ロシア	ソプラノ ピアノ	帝国劇場 (朝日新聞社)	
	5月1、2、5 日、19～21 日	Efrem Zimbalist (1889- ?) エフテム・ジンバリスト グレゴリー・アッシュマン	ロシア アメリカ	ヴァイオリ ン ピアノ		
	5月21日	Aldo Franchetti (三浦環音楽会)	イタリア	ピアノ	南葵楽堂	
	5月24日	ルビニ		ソプラノ	土橋際常盤会	
	6月4日	パウル・ショルツ		ピアノ	東京音楽学校	
	7月22、23 日	ピアストロ		ヴァイオリ ン	帝国劇場	
	9月 10～29日	アンナ・バヴァロア	ロシア	バレエ	帝国劇場	
	10月14～ 17日	キャスリン・パウロウ セオドル・フリント		ヴァイオリ ン ピアノ	帝国劇場	
	11月 1～5日	レオポルド・ゴドウスキー	アメリカ	ピアノ		
	11月2日	ロンコニー	イタリア	バリトン	神田青年会館	
	12月2、3日	グスタフ・クローン	ドイツ	指揮	東京音楽学校	
1923	大正12年 1月26日～ 2月4日	イタリア歌劇<カービオペ ラ> 演目：「アイーダ」「リゴレッ ト」「トスカ」「ランメルム アのルチア」「カヴァレリア・ ルスティカーナ」「道化師」 「仮面舞踏会」「ファウスト」 「ノルマ」「ボエーム」「トロバ トーレ」「セビアの理髪師」 「蝶々夫人」	イタリア	オペラ	帝国劇場	関東大震災

	3月10日	ウィリー・ベルメステル Willy Bardas ウィリー・バルダス	オーストリア	ヴァイオリン ピアノ	
	4月8日	Joseph Hollman ヨゼフ・ホルマン ウィリー・バルダス		チェロ ピアノ	帝国ホテル
	4月18、19、21日	レオポルド・ゴドウスキー	アメリカ	ピアノ	有楽座 (白十字会後援会)
	4月28日	ヨゼフ・ホルマン		チェロ	南葵楽堂
	5月1～5、18～20日	Fritz Kreisler (1875-1962) フリッツ・クライスラー ミハエル・ラハイゼン	オーストリア	ヴァイオリン ピアノ	帝国劇場
	5月23日	ヨランダ	アメリカ	ピアノ	帝国ホテル
	5月26日	ヨゼフ・ホルマン ウィリー・バルダス		チェロ ピアノ	南葵楽堂
	6月16日	メイ・ムウクレ		チェロ	帝国ホテル
	6月18日	ピアストロ		ヴァイオリン	南葵楽堂 (音楽援助会)
	7月5日				帝国ホテル (ピアストロ後援会)
	10月21日	ヨゼフ・ラスカ (宝塚交響楽団)	オーストリア	指揮	宝塚歌劇小劇場
	11月9～11日	Jascha Heifetz (1901-?) ヤッシャ・ハイフェッツ イシダー・アクロン	ロシア アメリカ	ヴァイオリン ピアノ	帝国ホテル
1924	大正13年3月16日	ナタリー・ボシコ		ヴァイオリン	丸の内・報知講堂
	4月18～23日	ミエチスラフ・ミュンツ		ピアノ	帝国ホテル
	5月4日	ナタリー・ボシコ ウィリー・バルダス		ヴァイオリン ピアノ	丸の内・報知講堂
	7月2、5、6日	モジュヒン クレオ・カリニ	ロシア	バス ピアノ	
	12月1～5日	エフレム・ジンバリスト エミール・ベイ	ロシア	ヴァイオリン	帝国劇場
1925	大正14年3月1～16日	イタリア歌劇団 <カービオペラ> 演目：「トロバトーレ」「ファウスト」「椿姫」「アイーダ」 「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」「リゴレット」 「蝶々夫人」「セビリアの理髪師」 「カルメン」「ボエーム」 「エルナニ」「トスカ」「ジョコンダ」	イタリア	ピアノ オペラ	普通選挙法成立 JOAK ラジオ放送開始
	5月28、29日	エドワード・ジョンソン エルマ・ゾラー	アメリカ	テノール ピアノ	歌舞伎座
	6月19、20日	セルゲイ・ストゥピン	ロシア	チェロ	築地・同志会館
	11月	レヴィツキ		ピアノ	帝国劇場

	26 ~ 30 日				
1926	大正 15 年 2 月 10 ~ 29 日	イタリア歌劇団 <カーピオペラ> 演目：「リゴレット」「椿姫」 「アイダ」「ファウスト」「カ ルメン」「ボエーム」「トロバ トーレ」「道化師」「カヴァレ リア・ルスティカーナ」「ルチ ア」「セビリアの理髪師」 「蝶々夫人」「オテロ」「ミニヨ ン」「トスカ」	イタリア	オペラ	
	4 月 11、12、 14、28 日	チャールス・ラウトルップ Leonid Kochanski (1893- ?) レオニード・コハンスキー	デンマー ク ポーラン ド フラ ンス	ピアノ	帝国ホテル
	5 月 2 ~ 10 日	ジョン・マコーマック エドウィン・シュナイダー		バリトン ピアノ	帝国劇場
	6 月 16 日	ストッピン		チェロ	国民講堂
	9 月 24、25 日	ロシア歌劇団 演目：「ボリス・ゴドノフ」 「エフゲニ・オネーギン」	ロシア	オペラ	帝国劇場
	11 月 19 日	ヨゼフ・ケーニツヒ (新交響楽団)	ドイツ	ヴァイオリ ン	日本青年館
	11 月 26 ~ 28 日	Alexander Moguilewsky (1885- 1953) アレキサンダー・モギレフス キー 	ロシア	ヴァイオリ ン	帝国劇場

一 覧

- 1912 明治 45 年・大正元年 August Junker (1870-1944) アウグスト・ユンケル、 Heinrich Werkmeister (1883-1936) ヴェルクマイスター、ロイテル、 Adolfo Sarcoli (1867-1936) サルコーリ、 ハンカ・ベツォルド
- 1913 大正 2 年 Madame de Silva シルバ夫人、 Harry W. Brown、 ハンカ・ベツォルド、 クローン、 ドーラ・フォン・メーレンドルフ、 ベツォルド夫人
- 1915 大正 4 年 ロシア声楽団スラヴィンスカヤ一行 37 名
- 1916 大正 5 年 ベルソン、 ハンカ・ベツォルド、 ザレスカ、 ローシー
- 1918 大正 7 年 コロンボ、 フェレッツィ、 Paul Scholz (1889-1944) ショルツ、 ボグミル・シコーラ、 キャスリン・キャンブル、 ミヒヤエル・シャピロ、 マリア・カリンスカヤ、 レオ・ポトルスキー、 アレクサンダー・スクラレフスキー、 Sergey Prokofiev (1891-1953) セルゲイ・プロコフィエフ、 アレクサンダー・クメルニツキ、 ウラディミール・シロイド、 コンスタンティン・バカレ

イニコフ

- 1919 大正 8 年 [Vo] ゲラルド・ザルスマン、[P] キャンブル、[V] ピアストロ、[P] ミロイッチ、[Vo] イーゼマン、[Op] レニングラード歌劇団（演目：「アイーダ」「ファウスト」「カルメン」「ボリス・ゴドノフ」）、[V] ピアストロ、[P] ショーア、[P] パウル・ショルツ、[Vo] チェルカスキー公爵夫人、ゲゼクス、セリワノフ、[V] ヘンリー・アイクハイム
- 1920 大正 9 年 [弦] ボグミル・シコーラ、[P] ヒルベルク夫人
- 1921 大正 10 年 [V] *Mischa Elman (1891-1967)* ミツシャ・エルマン、[P] アーサー・レッサー、[Vo] イワン・ドネブロフ、[Vo] シュクリテッキー・セエロヴ、[Vo] ニコライ・アレキサンドルフ、[Vo] シューマン・ハインク、[Vo] ジョージ・モーガン、[P] カスリン・ホフマン、[Op] ロシア歌劇団（演目：「カルメン」「ロミオとジュリエット」「ボエーム」「道化師」）
- 1922 大正 11 年 [B] フランス海軍モンカルム号軍楽隊、[Vo] リブコウスカ、[P] スクラレフスキー、[V] *Efrem Zimbalist (1889-?)* エフレム・ジンバリスト、[P] *Aldo Franchetti* アルド・フランケッティ、[P] グレゴリー・アッシュマン、[Vo] ルビニ、[P] パウル・ショルツ、[V] ピアストロ、[他] アンナ・パヴァロア、[V] キャスリン・パウロウ、[P] セオドル・フリント、[P] レオポルド・ゴドウスキー、[Vo] ロンコニー [C] グスタフ・クローン
- 1923 大正 12 年 [Op] イタリア歌劇<カーピ・オペラ>（演目：「アイーダ」「リゴレット」「トスカ」「ランメルムーアのルチア」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」「仮面舞踏会」「ファウスト」「ノルマ」「ボエーム」「トロバトーレ」「セビリアの理髪師」「蝶々夫人」）、[V] ウィリー・ベルメステル、[P] *Willy Bardas* ウィリー・バルダス、[弦] *Joseph Hollman* ヨゼフ・ホルマン、[P] ウィリー・バルダス、[P] レオポルド・ゴドウスキー、[弦] ヨゼフ・ホルマン、[V] *Fritz Kreisler (1875-1962)* フリッツ・クライスラー、[P] ミヒャエル・ラハイゼン、[P] ヨランダ、[弦] メイ・ムウクレ、[V] ピアストロ、[C] ヨゼフ・ラスカ（宝塚交響楽団）、[V] *Jascha Heifetz (1901-?)* ヤッシャ・ハイフェッツ、[P] イシダー・アクロン
- 1924 大正 13 年 [V] ナタリー・ボシコ、[P] ミエチスラフ・ミュンツ、[Vo] モジュヒン、[P] クレオ・カリニ、[V] エフレム・ジンバリスト、[P] エミール・ベイ
- 1925 大正 14 年 [Op] イタリア歌劇団<カーピ・オペラ>（演目：「トロバトーレ」「ファウスト」「椿姫」「アイーダ」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」「リゴレット」「蝶々夫人」「セビリアの理髪師」「カルメン」「ボエーム」「エルナニ」「トスカ」「ジョコンダ」）、[Vo] エドワード・ジョンソン、[P] エルマ・ゾラー、[弦] セルゲイ・ストゥピン、[P] レヴィツキ

1.4. 昭和 期（太平洋戦争以前）の外来演奏家公演

本稿では、昭和時代を、昭和 期（太平洋戦争以前）、昭和 期（戦後）の二つに分けて分析した。

昭和に入ると新交響楽団（現・NHK 交響楽団）、日響、中央交響楽団（現・東京フィル）等のオーケストラが続々と産声をあげ、日本で交響楽活動が始まる。そこへ多くの一流外来指揮者・演奏家が共演することになる。明治・大正時代が日本に於ける洋楽黎明期とするなら、昭和を迎えていよいよ揺籃期に突入したと言えるだろう。後段で述べる外来、日本を問

わずオーケストラ全盛への胎動は正にここに始まったのである。

また、この期に（この期以前の一部にも見られるが）来日した海外演奏家の最大の功績としては、後に日本洋楽界の礎を築いた多くの日本人音楽家に多大な影響を与えたに留まらず、直接的に指導し、育てあげたことが挙げられる。その詳細の記述については別の機会に譲り、本論では省略するが、昭和 期、平成期の外来演奏家の果たす勲と明らかに色合いを異にしている。

図 4

1927	昭和 2 年 2 月 27 日	Josef König (1875-1932) ヨゼフ・ケーニッヒ（新交響 楽団・現N響） ハンカ・ペツオールド  新響第 1 回定期演奏会	ロシア	指揮 ピアノ	日本青年館	金融恐慌
	3 月 10 ~ 29 日	イタリア歌劇団 <カービオペラ> 演目：「椿姫」「トロバトーレ」 「リゴレット」「夢遊病の女」 「マノン・レスコウ」「カヴァ レリア・ルススティカーナ」「道 化師」「ルチア」「トスカ」「セ ビリアの理髪師」「アイダ」 「カルメン」「蝶々夫人」「ボエ ーム」「ホフマン物語」「仮面 舞踏会」「ジョコンダ」 	イタリア	オペラ	帝国劇場	

				
				
4月26日～ 5月3日	ロシア歌劇団 演目：「ホフマン物語」「カル メン」「ホヴァンシチアーナ」 「ファウスト」「サムソンとデ リラ」「ボリス・ゴドノフ」 「ラクメ」「サドコ」	ロシア	オペラ	
4月28日	ヨゼフ・ケーニッヒ（新交響 楽団） コハンスキー ネットケ・シーヴェ	ドイツ	指揮 ピアノ 声楽	日本青年館
6月7～9日	Michael Erdenko ミハエル・エルデンコ 	ロシア	ヴァイオリ ン	
6月12日	エマヌエル・メッテル（新交 響楽団）	ロシア	指揮	
6月 26～28日	プリンダー パヴァロウスキー		ヴァイオリ ン ピアノ	帝国劇場
9月25日	マキシム・シャピロ		ピアノ	日本青年館
9月 26～30日	Benno Moiseiwitch ベンノ・モイセヴィッチ		ピアノ	帝国劇場

						
	9月	エルデンコ	ロシア	ヴァイオリン	日本青年館	
	10月8日	ナオオム・布林デル(新交響楽団)		ピアノ		
	10月1、2日	スピールマン		チェロ		
	11月11日	ヨゼフ・ケーニッヒ(新交響楽団) コハンスキー	ロシア	指揮 ピアノ		
	11月 26 ~ 30日	E.Zimbalist エフレム・ジンバリスト ルイズ・グリンワルド 	ロシア	ヴァイオリン ピアノ	帝国劇場	
1928	昭和3年 1月15日	パウル・コヴァロフ(新交響楽団)		声楽	日本青年館	日比谷公会堂 開館
	1月22日	ネトケ・レーヴェ(新交響楽団)		声楽		3・15事件 思想弾圧
	2月8日	パウリ・コワリョフ	ポーランド	ピアノ		
	2月12日	ユージン・クレイン(新交響楽団)		指揮		
	2月26日	ヨゼフ・ケーニッヒ(新交響楽団)	ロシア	指揮		
	4月8日	N.ニコルスキー(新交響楽団)		ピアノ		
	4月22日	パウル・ショルツ		ピアノ		
	4月	トーリア・ポッパ ニコルスキー		ヴァイオリン ピアノ		
	5月 26 ~ 30日 6月1、2日	Jacques Thibaud (1880-1953) ジャック・ティボー	フランス	ヴァイオリン	日比谷公会堂 (毎日新聞社)	

					
	9月30日	マキシム・シャピロ（新交響楽団）	ロシア	ピアノ	日本青年館
	10月11日、 26～30日	マキシム・シャピロ セシリア・ハンセン ボリス・ザカロフ	ロシア ロシア	ピアノ ヴァイオリン ピアノ	帝国ホテル 帝国劇場
	11月11日	ローゼンスタット（新交響楽団）		ピアノ	日本青年館
	11月25日	ヨゼフ・ケーニッヒ（新交響楽団）	ロシア	指揮	
	11月 28、29日	Benno Moiseiwitch ベンノ・モイセヴィッチ	ロシア	ピアノ	帝国劇場
	11月25日	コンスタンチン・シャピロ （新交響楽団）	ロシア	指揮	日本青年館
	12月19日	ネトケ・レーヴェ（新交響楽団） アンネ・ダンネール パーシー・バカナン A.ヘヒナー		ソプラノ アルト テノール バス	
1929	昭和4年 1月12日	ヨゼフ・ケーニッヒ（新交響楽団）	ロシア	指揮	日本青年館
	2月10日	レオニード・コハンスキー （新交響楽団）		ピアノ	
	2月14日	ネトケ・レーヴェ		ソプラノ	赤坂・三会堂
	3月10日	ヨゼフ・ケーニッヒ（新交響楽団）	ロシア	ヴァイオリン	日本青年館
	3月21日 3月	ヨゼフ・ケーニッヒ（新交響楽団）	ロシア	指揮	
	16～30日	イタリア歌劇団 ＜カービオペラ＞ 演目：「トロバトーレ」「トスカ」「リゴレット」「アイーダ」「椿姫」「カルメン」「ボエーム」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」「セビリアの理髪師」「ルチア」「ホフマン物語」「ジョコンダ」「マノン」「仮面舞踏会」「夢遊病の女」	イタリア	オペラ	帝国劇場



				
4月9、10日	ニコライ・シフェルブラッド マキシム・シャピロ	ロシア	ヴァイオリン ピアノ	日本青年館 (新交響楽団)
4月26、28、 30日	Amelita Galli-Curci アメリタ・ガリクルチ ホーマー・サミュエル ルイーゼ・アルベルギーニ 		ソプラノ ピアノ フルート	帝国劇場
4月28日	Nicola Schiferblatt (1887-1936) ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	ヴァイオリン	日本青年館
5月19日	ネトケ・レーヴェ(新交響楽団)		ソプラノ	
5月 26、27日	Jan Kubelik (1880-1940) ヤン・クーベリック フランチェスコ・ティアッテ イ 	チェコ	ヴァイオリン ピアノ	帝国劇場
8月3日	ボリス・ラス	ロシア	ヴァイオリ	日比谷公会堂

				ン	(ジャパン・ミュージック・ビューロー)
	10月27日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	日本青年館
	26、27日	Andres Segovia (1893-?) アンドレ・セゴヴィア 	スペイン	ギター	帝国劇場
	11月6日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	ヴァイオリン	日本青年館
	23、26日	ミゲル・フレタ	ロシア	テノール	帝国劇場
	29日	Leo Sirota (1855-1965) レオ・シロタ	ロシア	ピアノ	日比谷公会堂 (東京市)
	12月8日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	日本青年館
	18日	マキシム・シャピロ(新交響楽団)	ロシア	ピアノ	
1930	昭和5年 1月15日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	26日	リディア・シャピロ(新交響楽団)	ロシア	ピアノ	
	29日	レオ・シロタ(日響)	ロシア	ピアノ	日比谷公会堂
	2月5日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)		指揮	日本青年館
	2月16日	レオ・シロタ(日響)		ピアノ	日比谷公会堂 (日本交響楽協会)
	4月 3、5、6日	ロベルト・シュミット	ドイツ	ピアノ	帝国劇場
	4月23日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	ヴァイオリン	日本青年館
	4月30日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	5月11日	ネトケ・レーヴェ(新交響楽団)		ソプラノ	
	5月21日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) ネトケ・レーヴェ	ロシア	指揮 ソプラノ	
	6月1日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	9月24日	ヘンリー・ハドリー		指揮	日比谷公会堂
	9月26～30日	エフレム・ジンバリスト ハリー・カウフマン		ヴァイオリン ピアノ	帝国劇場
	9月28日	マキシム・シャピロ(新交響楽団)	ロシア	ピアノ	日本青年館
10月5日	ヘンリー・ハドリー(新交響楽団)		指揮	日比谷公会堂	

	10月15日	ラウトルupp (新交響楽団)		指揮	日本青年館
	10月22日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) エフレム・ジンバリスト 	ロシア	指揮 ヴァイオリン	
	11月12日	エマヌエル・メッテル (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	11月23日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	12月3日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	12月14日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) トドロヴィッチ	ロシア	指揮 ピアノ	
1931	昭和6年 1月18日	クレイン (新交響楽団)		指揮	
	1月28日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) ウェルク・マイスター	ロシア	指揮 チェロ	
	2月8日	クララ・バット シセリー・ムーレー		声楽 ピアノ	帝国劇場
	2月22日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	日本青年館
	3月8日	レオ・シロタ (新交響楽団)	ロシア	ピアノ	
	3月23日	アンリ・ジルマルシェク	フランス	ピアノ	華族会館
	4月22日	Leonid Kreutzer (1884-1953) クロイツァー (新交響楽団) 	ロシア ドイツ	ピアノ	日本青年館
	4月29日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア イタリア	指揮 ソプラノ	日本青年館
	4月26、27、 28、30日	テウッティ・ダルモンテ エンゾ・ド・ムーロ・ロマン ト フランチェスコ・エルシー アンニベール・ビゼエ		テノール フルート ピアノ	帝国劇場

満州事変
大衆文学


					
5月 26 ~ 30日	Joseph Szigeti (1892-1973) ヨゼフ・シゲティ ニキタ・マガロフ (1912-1992)	ハンガリー ロシア	ヴァイオリン ピアノ	東京劇場	
4日	レオニード・クロイツァー		ピアノ	日比谷公会堂	
9月 26 ~ 29日	Jascha Heifetz (1901-?) ヤッシャ・ハイフェッツ イシドール・アクロン	ロシア アメリカ	ヴァイオリン ピアノ	東京劇場 (朝日新聞社)	
					
9月30日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	日本青年館	
10月19日	アンリ・ジルマルシェック		ピアノ	朝日講堂	
10月21日	アルフレッド・ホフマン パウル・ショルツ	ドイツ	ヴァイオリン ピアノ	日本青年館	
10月 28、29日	ヤッシャ・ハイフェッツ イシドール・アクロン		ヴァイオリン ピアノ	東京劇場	
11月21日	アルフレッド・ホフマン パウル・ショルツ	ドイツ	ヴァイオリン ピアノ	日本青年館	
11月25日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮		
12月5日	Klaus Pringsheim (1883-1972) クラウス・プリングスハイム (東京音楽学校管弦楽団)	ドイツ	指揮	日比谷公会堂	
12月6日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	ヴァイオリン		
12月16日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) マキシム・シャピロ	ロシア	ヴァイオリン ピアノ		
12月17日	ネトケ・レーヴェ		ソプラノ		
1932	昭和7年				
	1月19日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	ヴァイオリン	上海事変 5・15事件 音楽コンクール開始
	1月31日	クラウス・プリングスハイム (新交響楽団)	ドイツ	指揮	
	2月21日	レオ・シロタ(新交響楽団)	ロシア	ピアノ	
	3月2日	A.モギレフスキー(新交響楽団)	ロシア	ヴァイオリン	
	3月13日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	

	4月17日	A.モグリフスキー(新交響楽団)	ロシア	指揮	
	4月19日	アレクサンダー・プライロフスキー(ピアノ)		ピアノ	
	4月27日	ネトケ・レーヴェ(新交響楽団)		ソプラノ	日比谷公会堂
	5月8日	ポーラック(新交響楽団)		ヴァイオリン	日本青年館
	5月25日	クラウス・プリングスハイム(新交響楽団)	ドイツ	指揮	
	5月31日	ルネ・シュメ 		ヴァイオリン	日比谷公会堂
	6月5日	ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団)	ロシア	指揮	日本青年館
	9月26~30日	エフレム・ジンパリスト シオドル・ザイデンベルグ		ヴァイオリン ピアノ	
	10月12日	ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団) エフレム・ジンパリスト	ロシア	指揮 ヴァイオリン	東京劇場 日本青年館 日比谷公会堂
	11月9日	ベンノ・モイセヴィッチ(新交響楽団)		ピアノ	
	11月23日	クラウス・プリングスハイム(新交響楽団)	ドイツ	指揮	
	11月25日	ヨゼフ・シゲティ ニキタ・マガロフ 		ヴァイオリン ピアノ	日比谷公会堂 (朝日新聞社)
	12月1日	ヨゼフ・シゲティ(新交響楽団)		ヴァイオリン	日比谷公会堂
	12月21日	ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団) マキシム・シャピロ	ロシア	指揮 ピアノ	
1933	昭和8年 2月22日	ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団) マリア・トール	ロシア	ヴァイオリン 声楽	国際連盟脱退
	2月13日	サンカルロ大歌劇団	イタリア	オペラ	
	3月12日	ベンノ・モイセヴィッチ		ピアノ	
	3月15、16日				

	3月17日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	日比谷公会堂
	4月19日	ベンノ・モイセヴィッチ(新交響楽団)		ピアノ	
	4月26日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	5月10日	レオ・シロタ(新交響楽団)	ロシア	ピアノ	
	6月19日	A.モギレフスキー	ロシア	ヴァイオリン	
	7月26日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	10月 2～6日	イグナツ・フリードマン		ピアノ	帝国劇場
	10月17日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) イグナツ・フリードマン	ロシア	指揮 ピアノ	日比谷公会堂
	11月8日	ロベルト・ボラック(新交響楽団)		指揮	
	11月22日	マリオ・パッチ(新交響楽団)	イタリア	指揮	
	12月21日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
1934	昭和9年 1月20日	Ignaz Friedman イグナツ・フリードマン 		ピアノ	丸の内蚕糸会館
	1月24日	コンラッド・リブレヒト マキシム・シャピロ		ヴァイオリン ピアノ	日本青年館
	1月26日	エマヌエル・メッテル(新交響楽団)	ロシア	指揮	
	2月25日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) プリボティコ	ロシア	指揮 チェロ	日比谷公会堂
	4月5日	アルトゥール・ルビンシュタイン	ポーランド	ピアノ	
	4月17日	クロイツァー(新交響楽団)		ピアノ	
	4月26日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団)	ロシア	指揮	
	5月16日	クロイツァー(新交響楽団)		指揮	
	6月16日	クラウス・プリングスハイム 新交響楽団		指揮	
	9月30日	シュレータ(新交響楽団)		ソプラノ	
	10月4、5、 6、8、9日	Emanuel Feuermann (1902-1942) エマヌエル・フォイアマン フリッキ・キッチンガー	オーストリア アメリカ	チェロ ピアノ	九段軍人会館

						
	10月10日	ジョン・ゴス ポール・ローゼンスタン		バリトン ピアノ	日本青年館	
	10月17日	エマヌエル・フォアマン (新交響楽団)		チェロ	日比谷公会堂	
	10月25日	マリア・トール (新交響楽団)		ソプラノ		
	11月21日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) A.モギレフスキー	ロシア	指揮 ヴァイオリン		
1935	昭和10年 2月13日	チェレブニン		ピアノ・作曲	テープレコーダー	
	3月23日	リリー・クラウス シモン・ゴールドベルグ		ピアノ ヴァイオリン		
	4月2、5、9、 10、11日	Artur Rubinstein (1887-?) アルトゥール・ルビンシュタ イン 	ポーランド アメリカ	ピアノ		
	4月22日	アルトゥール・ルビンシュタ イン (新交響楽団)	ポーランド	ピアノ		
	4月30日	レオ・トシコフ (新交響楽団)		ヴァイオリン		
	5月8日	エフレム・ジンバリスト		ヴァイオリン		
	5月15日	ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) ジャンヌ	ロシア	指揮 ソプラノ		
	5月24日	エフレム・ジンバリスト		ヴァイオリン		
	5月8、9、10、 13、14日	エフレム・ジンバリスト		ヴァイオリン		
	6月5日	マリア・トール (新交響楽団<フィデリオ>)		ソプラノ		
	6月10日	アメリタ・ガリクルチ		ソプラノ		
	6月12日	ホーマー・サミュエル レイモンド・ウィリアム		ピアノ フルート		軍人会館
	9月23、25、 26、30日	Shura Cherkassky シューラ・チェルカスキー		ピアノ		日比谷公会堂

						
	9月27日	クラウス・プリングスハイム (新交響楽団)	ドイツ	指揮		
	10月28、30、 31日 11月1日	モーリス・マーシャル		ヴァイオリン	軍人会館	
	11月6日	ロベルト・ボラック マリア・トール		指揮 ソプラノ	日比谷公会堂	
	12月4日	A.モギレフスキー(新交響楽 団) トゥリア・ヴェデリニコフ	ロシア	指揮 ピアノ		
1936	昭和11年 1月22日	ガエタノ・コメリ(新交響楽 団)	イタリア	指揮	2・26事件	
	1月27日 2月 1、4、6日	フョードル・シャリアピン	ロシア	バス		
	3月11日	クラウス・プリングスハイム (新交響楽団) レオ・トシコフ	ドイツ	指揮 ヴァイオリ ン		
	3月23、25、 26、27、30日	シモン・ゴールドベルグ クラウス		ヴァイオリ ン ピアノ		
	4月13、22 日	ウィリヘルム・ケンブ	ドイツ	ピアノ		
	4月23、24、 27、30日 5月1日	エマヌエル・フォアマン ヴォルフガング・レブナー		チェロ ピアノ		
	5月6日	ヘルベルト・ワルター(新交 響楽団)	オースト リア	指揮		
	5月10日	フョードル・シャリアピン	ロシア	バス		
	5月24日	ウィリー・フライ(新交響楽 団)	オースト リア	ヴァイオリ ン		
	5月26、29、 30日 6月1、2日	ジャック・ティボー		ヴァイオリ ン		日比谷公会堂 (毎日新聞社)
	6月3日	ヴォルフガング・レブナー (新交響楽団) エマヌエル・フォアマン		指揮 チェロ		日比谷公会堂
	9月30日	Josef Rosenstock (1895-1985) ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団)	ポーラン ド アメリカ	指揮		日比谷公会堂
	10月8、9、 12、13、14 日、 11月4日	ピアティゴルスキー		チェロ		軍人会館

	10月28日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団) チェレブニン		指揮 ピアノ	日比谷公会堂	
	11月11日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団)		指揮・ピアノ		
	11月25日 12月16日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団)		指揮		
1937	昭和12年 1月20日					蘆溝橋事件(日中戦争)
	1月21、22、 26、27、29 日	Mischa Elman (1891-1967) ミッシャ・エルマン 	ロシア アメリカ	ヴァイオリン		
	2月23、24、 26、27、28 日	モーリス・マーシャル		ヴァイオリン	日本青年館	
	2月17日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団)		指揮	日比谷公会堂	
	3月24日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団) ウィリー・フライ	オースト リア	指揮 ヴァイオリン		
	4月21日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団)		指揮		
	5月5日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団) マリア・トゥール		指揮 ソプラノ		
	5月15、17、 18、19、20 日	ミロウィッチ ピアストロ シュスター		ピアノ ヴァイオリン チェロ		
	5月26日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団)		指揮		
	5月31日	フェリックス・ワインガルト ナー(新交響楽団)		指揮		
	7月3日	ヴィノグラドフ		ピアノ	軍人会館	
	8月26日	ルドルフ・フェッチ (宝塚交響楽団)		指揮	西宮球場	
	11月10日	ヨゼフ・ローゼンストック (新交響楽団) レオ・シロタ		指揮 ピアノ	日比谷公会堂	
	11月24日 12月15日	ヨゼフ・ローゼンストック(新 交響楽団)		指揮 指揮・ピアノ		
				指揮		
1938	昭和13年 1月19日 2月16日			指揮		戦争文学

	3月23日、 4月20日					
	5月4日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団） ウィリー・フライ	オーストリア	指揮 ヴァイオリン		
	5月25日 6月15日 9月28日 10月12日 11月9日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団） 		指揮		
	12月6日	レオニード・クロイツァー		ピアノ		
	12月14日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団） ウィリー・フライ	オーストリア	指揮 ヴァイオリン		
1939	昭和14年 1月25日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団） ロマン・ドクソン		指揮 チェロ		第二次世界大戦
	2月15、22日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団）		指揮		
	3月19、20、 21日	セルゲイ・シュワイコフスキー指揮 ハルビン交響楽団		オーケストラ		
	3月22日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団）		指揮		
	4月18日	ウィリー・フライ	オーストリア	ヴァイオリン	日本青年館	
	4月19日、5 月10日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団）		指揮	日比谷公会堂	
	5月17日	ロマン・ドクソン		チェロ	日本青年館	
	5月15、17、 18、19、20 日	ミロウィッチ ピアストロ シュスター		ピアノ ヴァイオリン チェロ	日比谷公会堂	
	5月24、31 日 9月28日、 10月5日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団）		指揮		
	10月18日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団） ロマン・ドクソン		指揮 チェロ		
	11月8、22 日 12月4日	ヨゼフ・ローゼンストック（新交響楽団）		指揮		
1940	昭和15年 1月29日 2月22日	Manfred Gurlitt (1890-1972) マンフレッド・グルリット （中央交響楽団・現東フィル）	ドイツ	指揮	歌舞伎座	日独伊三国軍事同盟

						
	3月27日、 4月10日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮	日比谷公会堂	
	4月18日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団）	ドイツ	指揮		
	4月24日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団） レオ・シロタ		指揮 ピアノ		
	5月9日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮		
	5月14日	ウィリー・フライ	オースト リア	ヴァイオリ ン	日本青年館	
	5月17日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団） A.モギレフスキー	ドイツ	指揮 ヴァイオリ ン	日比谷公会堂	
	5月22日、6 月5日、9月 25、26日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮		
	10月9日	ロマン・デュクソン		チェロ	明治生命講堂	
	10月 16、17日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮	日比谷公会堂	
	10月23日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団） ロマン・デュクソン	ドイツ	指揮 チェロ		
	11月18日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団）	ドイツ	指揮		
	11月 20、21日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮		
	12月 11、12日					
1941	昭和16年 1月9日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団）	ドイツ	指揮	日ソ中立条約 太平洋戦争	
	1月 22、23日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮		
	1月25日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団）	ドイツ	指揮		
	2月 19、20日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮		
	2月22日、 3月24日	マンフレッド・グルリット （中央交響楽団）	ドイツ	指揮		
	3月 26、27日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団） ウィリー・フライ	オースト リア	指揮 ヴァイオリ ン		
	4月 16、17日	ヨゼフ・ローゼンストック（新 交響楽団）		指揮		

	4月23日	マンフレッド・グルリット (中央交響楽団)	ドイツ	指揮		
	5月7、8日、 6月4、5日	ヨゼフ・ローゼンストック(新 交響楽団)		指揮		
	6月21日	マンフレッド・グルリット (中央交響楽団)	ドイツ	指揮		
	6月23、24 日、9月24、 25日、 10月19、20 日	ヨゼフ・ローゼンストック(新 交響楽団)		指揮		
	9月12日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	11月11、12 日、12月3、 4日	ヨゼフ・ローゼンストック(新 交響楽団)		指揮		
	12月12日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
1942	昭和17年 1月16日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団) レオ・シロタ	ドイツ	指揮 ピアノ		新響：日本交響楽 団に改称
	1月 28、29日	ヨゼフ・ローゼンストック(新 交響楽団)		指揮		
	1月31日 2月14日	アウグスト・ユンケル (松竹交響楽団)		指揮	共立講堂 日比谷公会堂	
	2月14日、 2月21日、 3月7日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	3月 11、12日	ヘルムート・フェルマー(新 交響楽団)	ドイツ	指揮		
	3月21日	アウグスト・ユンケル (松竹交響楽団)		指揮		
	4月2日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団) レオ・シロタ	ドイツ	指揮 ピアノ		
	5月6、7日	ロマン・デュクソン (日本交響楽団<新響>)		チェロ		
	5月26日、 6月19日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	7月17日	アウグスト・ユンケル (松竹交響楽団)		指揮		
	9月17日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	9月 23、24日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
	10月7日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	11月 11、12日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
	11月18日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団) レオ・シロタ	ドイツ	指揮 ピアノ		
	11月	マンフレッド・グルリット	ドイツ	指揮	歌舞伎座	

	23 ~ 26 日	(東京交響楽団) <藤原歌劇団 公演 = ローエン格林>				
	12 月 9、10 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮	日比谷公会堂	
	12 月 12 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
1943	昭和 18 年 1 月 14 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮	日比谷公会堂	
	1 月 20 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
	1 月 26 日、 2 月 9 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	2 月 26 日	ヨゼフ・ローゼンストック (大東亜交響楽団)		指揮	歌舞伎座	
	3 月 15 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮	日比谷公会堂	
	3 月 17、18 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
	4 月 14 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	4 月 21、22 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
	5 月 7 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団) ウィリー・フライ	ドイツ オースト リア	指揮 ヴァイオリ ン		
	6 月 2、3 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
	6 月 13 日	マンフレッド・グルリット (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	9 月 29 日	ヘルムート・フェルマー (東京交響楽団)	ドイツ	指揮		
	11 月 17、18 日 12 月 15、16 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		
1944	昭和 19 年 1 月 26、27 日、2 月 16、 17 日					
	11 月 14、15、 17 日	フェルマー (日本交響楽団)		指揮		
1945	昭和 20 年 9 月 14、15 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団)		指揮		広島・長崎原爆被 爆 ボツダム宣言受託
	11 月 16、17 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団) レオ・シロタ		指揮 ピアノ		
	12 月 17、18 日	ヨゼフ・ローゼンストック (日本交響楽団) ウィリー・フライ	オースト リア	指揮 ヴァイオリ ン		

- 1926 大正 15 年・昭和元年 イタリア歌劇団<カーピ・オペラ> (演目: 「リゴレット」「椿姫」「アイーダ」「ファウスト」「カルメン」「ボエーム」「トロバトーレ」「道化師」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「ルチア」「セビリアの理髪師」「蝶々夫人」「オテロ」「ミニヨン」「トスカ」) チャールス・ラウトルupp、Leonid Kochanski (1893-?)レオニード・コハンスキー、ジョン・マコーマック、エドウィン・シュナイダー、ストッピン、ロシア歌劇団 (演目: 「ボリス・ゴドノフ」「エフゲニ・オネーギン」) Josef König (1875-1932)ヨゼフ・ケーニツヒ (新交響楽団) Alexander Moguilewsky (1885-1953)アレキサンダー・モギレフスキー
- 1927 昭和 2 年 ハンカ・ベツオールド、イタリア歌劇団<カーピ・オペラ> (演目: 「椿姫」「トロバトーレ」「リゴレット」「夢遊病の女」「マノン・レスコウ」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」「ルチア」「トスカ」「セビリアの理髪師」「アイーダ」「カルメン」「蝶々夫人」「ボエーム」「ホフマン物語」「仮面舞踏会」「ジョコンダ」) ロシア歌劇団 (演目: 「ホフマン物語」「カルメン」「ホヴァンシチアーナ」「ファウスト」「サムソンとデリラ」「ボリス・ゴドノフ」「ラクメ」「サドコ」) コハンスキー、ネトケ・レーヴェ、Michael Erdenko ミヒャエル・エルデンコ、エマヌエル・メッテル (新交響楽団) プリンダー、パヴァロウスキー、マキシム・シャピロ、Benno Moiseiwitch ベンノ・モイセヴィッチ、エルデンコ、ナオオム・プリンデル (新交響楽団) スピールマン、コハンスキー、E.Zimbalist エフレム・ジンバリスト、ルイズ・グリンワルド
- 1928 昭和 3 年 パウル・コヴァロフ (新交響楽団) ネットケ・レーヴェ (新交響楽団) パウリ・コワリョフ、ユージン・クレイン (新交響楽団) ヨゼフ・ケーニツヒ (新交響楽団) N.ニコルスキー (新交響楽団) パウル・ショルツ、トーリア・ポッパ、ニコルスキー、Jacques Thibaud (1880-1953)ジャック・ティボー、マキシム・シャピロ (新交響楽団) セシリア・ハンセン、ボリス・ザカロフ、ローゼンスタット (新交響楽団) ベンノ・モイセヴィッチ、コンスタンチン・シャピロ (新交響楽団) ネットケ・レーヴェ (新交響楽団) アンネ・ダンネール、パーシー・パカナン、A.ヘヒナー、
- 1929 昭和 4 年 ヨゼフ・ケーニツヒ (新交響楽団) レオニード・コハンスキー (新交響楽団) ネットケ・レーヴェ、イタリア歌劇団<カーピ・オペラ> (演目: 「トロバトーレ」「トスカ」「リゴレット」「アイーダ」「椿姫」「カルメン」「ボエーム」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「道化師」「セビリアの理髪師」「ルチア」「ホフマン物語」「ジョコンダ」「マノン」「仮面舞踏会」「夢遊病の女」) Nicola Schiferblatt (1887-1936)ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) マキシム・シャピロ、Amelita Galli-Curci アメリタ・ガリクルチ、ホーマー・サミュエル、ルイーダ・アルベルギーニ、ネットケ・レーヴェ (新交響楽団) Jan Kubelik (1880-1940)ヤン・クーベリック、フランチェスコ・ティアッティ、ボリス・ラス、Andres Segovia (1893-?)アンドレ・セゴヴィア、ミゲル・フレタ、Leo Sirota (1855-1965)レオ・シロタ、マキシム・シャピロ (新交響楽団)
- 1930 昭和 5 年 ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) リディア・シャピロ (新交響楽団) レオ・シロタ (日響) ロベルト・シュミット、ヘンリー・ハドリー、エフレム・ジンバリスト、ハリー・カウフマン、ラウトルupp (新交響楽団) エフレム・ジンバリスト、エマヌエル・メッテル (新交響楽団) トドロヴィッチ、
- 1931 昭和 6 年 ニコラ・シフェルブラッド (新交響楽団) クレイン (新交響楽団)、クララ・バット、

シセリー・ムーレー、レオ・シロタ(新交響楽団)、アンリ・ジルマルシェック、Leonid Kreutzer (1884-1953)クロイツァー(新交響楽団)、アンリ・ジルマルシェック、アルフレッド・ホフマン、パウル・ショルツ、ヤツシャ・ハイフェッツ、イシドール・アクロン、Klaus Pringsheim (1883-1972)クラウス・プリングスハイム(東京音楽学校校)、マキシム・シャピロ、ネトケ・レーヴェ

1932 昭和7年

ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団)、レオ・シロタ(新交響楽団)、A.モギレフスキー(新交響楽団)、アレクサンダー・ブライロフスキー、ネトケ・レーヴェ(新交響楽団)、ポーラック(新交響楽団)、クラウス・プリングスハイム(新交響楽団)、ルネ・シュメ、エフレム・ジンバリスト、シオドル・ザイデンベルグ、ベンノ・モイセヴィッチ(新交響楽団)、ヨゼフ・シゲティ、ニキタ・マガロフ、マキシム・シャピロ、

1933 昭和8年

ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団)、マリア・トール、サンカルロ大歌劇団、ベンノ・モイセヴィッチ、レオ・シロタ、A.モギレフスキー、Ignaz Friedman イグナツ・フリードマン、ロベルト・ポラック(新交響楽団)、マリオ・パッチ(新交響楽団)

1934 昭和9年

ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団)、イグナツ・フリードマン、コンラッド・リブレヒト、マキシム・シャピロ、エマヌエル・メッテル、プリポティコ、Artur Rubinstein アルトゥール・ルビンシュタイン、クロイツァー(新交響楽団)、シュレータ(新交響楽団)、Emanuel Feuermann (1902-1942)エマヌエル・フォイアマン、フリッキ・キッチンガー、ジョーン・ゴス、ポール・ローゼンスタン、マリア・トール(新交響楽団)、A.モギレフスキー

1935 昭和10年

ニコラ・シフェルブラッド(新交響楽団)、チェレブニン、リリー・クラウス、シモン・ゴールドベルグ、アルトゥール・ルビンシュタイン、レオ・トシコフ(新交響楽団)、ジャンヌ、マリア・トゥール(新交響楽団<フィデリオ>)、アメリタ・ガリクルチ、ホーマー・サミュエル、レイモンド・ウィリアム、Shura Cherkassky シューラ・チェルカスキー、モーリス・マーシャル、ロベルト・ポラック、マリア・トール、トゥリア・ヴェデリニコフ

1936 昭和11年

ガエタノ・コメリ(新交響楽団)、Josef Rosenstock (1895-1985)ヨゼフ・ローゼンストック(新交響楽団)、フョードル・シャリアピン、クラウス・プリングスハイム(新交響楽団)、レオ・トシコフ、シモン・ゴールドベルグ、クラウス、ウィリヘルム・ケンブ、エマヌエル・フォイアマン、ウォルフガング・レブナー、ヘルベルト・ワルター(新交響楽団)、フョードル・シャリアピン、ウィリー・フライ(新交響楽団)、ジャック・ティボー、ウォルフガング・レブナー(新交響楽団)、ピアティゴルスキー、チェレブニン、Mischa Elman (1891-1967)、ミツシャ・エルマン、モーリス・マーシャル、ウィリー・フライ、マリア・トゥール、ミロウィッチ、ピアストロ、シュスター、フェリックス・ワインガルトナー(新交響楽団)、ヴィノグラドフ、ルドルフ・フェッチ(宝塚交響楽団)、レオ・シロタ、

1938 昭和13年

ヨゼフ・ローゼンストック(新交響楽団)、ウィリー・フライ、レオニード・クロイツァー

1939 昭和14年

ヨゼフ・ローゼンストック(新交響楽団)、ロマン・ドクソン、ハルピン交響楽団(セルゲイ・シュワイコフスキー)、ウィリー・フライ、ロマン・ドクソン、ミロウィッチ、ピアストロ、シュスター

1940 昭和15年

Manfred Gurlitt (1890-1972)マンフレッド・グルリット(中央交響楽団・現東フィル)、ヨゼフ・ローゼンストック(新交響楽団)、レオ・シロタ、ウィリー・フライ、A.モギレフスキー、ロマン・ドクソン

1941 昭和 16 年	マンフレッド・グルリット(中央交響楽団)、ヨゼフ・ローゼンストック(新交響楽団) ウィリー・フライ、
1942 昭和 17 年	マンフレッド・グルリット(東京交響楽団)、藤原歌劇団公演 = ローエン格林、レオ・シロタ、ヨゼフ・ローゼンストック(新交響楽団) アウグスト・ユンケル(松竹交響楽団) ヘルムート・フェルマー(新交響楽団) ロマン・デュクソン(日本交響楽団<新響>)
1943 昭和 18 年	マンフレッド・グルリット(東京交響楽団)、ヨゼフ・ローゼンストック(日本交響楽団) ヘルムート・フェルマー(東京交響楽団) ウィリー・フライ
1944 昭和 19 年	ヨゼフ・ローゼンストック(日本交響楽団) フェルマー(日本交響楽団)
1945 昭和 20 年	ヨゼフ・ローゼンストック(日本交響楽団) レオ・シロタ、ウィリー・フライ

1.5. 昭和 期 (戦後)

図 4、及び一覧で示した通り、戦時中も日本交響楽団(新交響楽団) 東京交響楽団、中央交響楽団、松竹交響楽団等、それぞれに演奏活動は続けられた。

太平洋戦争が終結し、日本は敗戦の混乱期に入るが、早くも終戦の年 1945 年(昭和 20 年)に日比谷公会堂で「明朗音楽会」と称して戦後初めてのコンサートが開催されたことは注目に値する。しかし、流石に戦争直後は特筆すべき演奏会は開催されなかった。

年を経る毎に社会情勢は鎮定し、大衆に精神的な安定の兆しが見えると、人々の欲求は娯楽を求め、教養に目が向けられ始める。

戦後間もない時期の特徴として、世界的名手が続々と来日し、一流の音楽文化が大衆に紹介・啓蒙されたことが挙げられるが、何よりも着目すべきは、新聞社や放送局といったマスコミが主流だった招聘・主催業務に、専門のマネージメントが参入してきた点である。





このマネージメントの台頭こそ、昭和中期から後期に開花する外来演奏家全盛の誘因となるのである。この現象はウラディミール・ホロヴィッツ(後出)やエフゲニ・ムラヴィンスキー(後出)等といったクラシック分野に留まらず、マイルス・デイビス(1964 年)やビートルズ(1966 年)等といったジャズ、ポピュラー分野も同様で、事理を同じくしている。

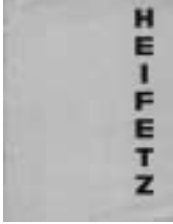

こうした多くの外来演奏家による音楽は、我国の音楽ファンの中へ、あたかも乾いた砂漠に水が凍み込む如く加速度的に浸透し、西洋音楽を起源としない日本特有の音楽文化活動を形成することになる。


しかし反面、こうした活気ある音楽活動が、邦人演奏会と外来公演との音楽文化の本質的な峻別がなされないままに猛進した結果、所謂アート・マネージメントの観点から多くの論議を呼び起こす事になる。商業的成功を目的とするマネージメントの、経済活動が優先されるフィールドから、距離を置くことのできるフィールドに目が向けられ始め、1950 年代に入ると、こうした鼓動は社団法人「日本クラシック音楽マネージメント協会」(現・日本クラシック音楽事業者協会)の発足を促し、やがて社団法人「企業メセナ協議会」設立(1990 年)へと結実していくのだが、その形勢の過程に於て公的助成・補助金問題も顕在化し、陳情運動も明確に動体化していく。

図 5

年号	主な来日演奏家	国籍	ジャンル	マネージメント
1947 昭和 22 年 8 月	パレナン弦楽四重奏団 	フランス	弦楽四重奏	都民劇場 都民劇場初の海外 招聘事業。
1948 昭和 23 年 4 月	レオニード・クロイツァー	ドイツ	ピアノ	移住 (22 年 10 月日本交響 楽団と競演)
1950 昭和 25 年 10 月	ラザール・レヴィ	フランス	ピアノ	NHK
1951 昭和 26 年	9 月 クルト・ウエス指揮 NHK 交響楽 団	ドイツ	指揮	NHK
	10 月 ユーディ・メニューイン アドルフ・パーラー	アメリカ	ヴァイオリン ピアノ	朝日新聞社
	12 月 ラリー・アドラー	アメリカ	ハーモニカ	全日本ハーモニカ連 盟
1952 昭和 27 年	4 月 ヘレン・トロウベル	ドイツ	アルト	
	6 月 ゲルハルト・ヒュッシュ	ドイツ	バリトン	
	9 月 ブダペスト弦楽四重奏団	ハンガリー	弦楽四重奏団	
	9 月 アルフレッド・コルトー 	フランス	ピアノ	朝日新聞社 読売新聞社
1953 昭和 28 年 3 月	ワルター・ギーゼキング 	フランス	ピアノ	読売新聞社

	5月	マリアン・アンダーソン 	アメリカ	声楽	NHK、中央共同募金会、日本赤十字社
	5月	ルードヴィッヒ・ヘルシャー		チェロ	
	6月	ヨゼフ・シゲティ 	ハンガリー	ピアノ	毎日新聞社
	9月	アイザック・スターン	ウクライナ	ヴァイオリン	
	9月	ソロモン 		ピアノ	朝日新聞社
	10月	ジャン・マルティノン指揮 NHK 交響楽団	フランス	指揮	NHK
1954	昭和 29 年 1月	デ・ボアア黒人合唱団	イギリス	合唱団	
	3月	マックス・エッガー		ピアノ	移住
	4月	ウィルヘルム・バックハウス		ピアノ	東京交響楽団
	4月	フェルツチョ・タリアヴィーニ 	イタリア	テノール	吉田音楽事務所
	4月	ヤッシャ・ハイフェッツ		ヴァイオリン	朝日新聞社

					
	4月	ヘルベルト・フォン・カラヤン (NHK交響楽団)  	オーストリア	指揮	NHK
	9月	マルコム・サージエント指揮 NHK交響楽団		指揮	NHK
	11月	ニクラウス・エシュバッハ指揮 NHK交響楽団 ピエール・フルニエ(チェロ)		指揮 チェロ	NHK
	12月	ジュリアス・カッチェン 		ピアノ	ラジオ東京
1955	昭和30年 2月	アリゴ・ボーラ	イタリア	テノール	
		ダヴィッド・オイストラフ	ロシア	ヴァイオリン	
	5月	ウインフリッド・ウォルフ W・ヘンドル(指揮) シンフォニー・オブ・ザ・エアー (前NBC交響楽団)  	アメリカ	オーケストラ	毎日新聞社・NHK

		アンドレ・コステラネット指揮 NHK 交響楽団		指揮	NHK
		アレキサンドラ・ダニロワ (バレエ)		バレエ	NBA・日本バレエ協会
		ウィーン少年合唱団		合唱団	NHK
1956	昭和 31 年 3 月	シュツットガルト室内管弦楽団 (カール・ミュンヒンガー) 	ドイツ	オーケストラ	読売新聞社
	3 月	セルゲ・ジャーロフ指揮 ドンコザック合唱団	ロシア	合唱団	NHK
	4 月	ユージン・イストミン		ピアノ	
	4 月	ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 (パウル・ヒンデミット)	オーストリア	オーケストラ	朝日新聞社
	6 月	ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団 (ウォーレンスタイン)	アメリカ	オーケストラ	国際文化交歓協会
	9 月	エドアルト・シュトラウス 東京交響楽団	オーストリア	指揮	東京交響楽団
	9 月	レフ・オポーリン	ロシア	ピアノ	
	10 月	ハンス・カン		ピアノ	
	11 月	ウェストミンスター合唱団	アメリカ	合唱団	
	11 月	サンソン・フランソワ 第 1 次イタリア歌劇団	フランス イタリア	ピアノ オペラ	NHK

一 覧

- 1947 昭和 22 年 パレナン弦楽四重奏団
- 1948 昭和 23 年 レオニード・クロイツァー
- 1950 昭和 25 年 ラザール・レヴィ
- 1951 昭和 26 年 クルト・ウエス (NHK 交響楽団)、ユーディ・メニューイン、アドルフ・バーラー、ラリー・アドラー
- 1952 昭和 27 年 ヘレン・トロウベル、ゲルハルト・ヒュッシュ、ブダベスト弦楽四重奏団、アルフレッド・コルトー
- 1953 昭和 28 年 ワルター・ギーゼキング、マリアン・アンダーソン、ルードヴィッヒ・ヘルシャー、ヨゼフ・シゲティ、アイザック・スターン、ソロモン、ジャン・マルティノン (NHK 交響楽団)
- 1954 昭和 29 年 デ・ボーア黒人合唱団、マックス・エッガー、ウィルヘルム・バックハウス、フェルツォ・タリアヴィーニ、ヤツシャ・ハイフェッツ、ヘルベルト・フォン・カラヤン (NHK 交響楽団)、マルコム・サージェント (NHK 交響楽団)、ニクラウス・エシュバッハ (NHK 交響楽団)、ピエール・フルニエ、ジュリアス・カッチェン、アリゴ・ポーラ
- 1955 昭和 30 年 ダヴィッド・オイストラフ、ウインフリッド・ウォルフ、W・ヘンドル指揮シンフォニー・オブ・ザ・エアー (前 NBC 交響楽団)、アンドレ・コステラネット (NHK 交響楽団)、アレキサンドラ・ダニロワ (バレエ)、ウィーン少年合唱団

1956 昭和 31 年

シュトゥットガルト室内管弦楽団 (カール・ミュンヒンガー) セルゲ・ジャール
フ指揮 ドンコザック合唱団、ユージン・イストミン、ウィーン・フィルハーモ
ニー管弦楽団 (パウル・ヒンデミット) ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団
(ウォーレンスタイン) エドアルト・シュトラウス (東京交響楽団) レフ・オボ
ーリン、ハンス・カン、ウェストミンスター合唱団、サンソン・フランソワ、イタ
リア歌劇団 (ヴィットリオ・グイ)

1957 昭和 32 年

エレナ・ステーパー、ジョルジア・ラスター、木の十字架合唱団、リチャード・
タッカー、カリフォルニア大学グリークラブ、Jeanne Isnard ジャンヌ・イスナール、
イーゴリー・ベズロードニー、ルティルディ・ベッシュ、**ウィリアム・マクダーモ
ット (東京交響楽団)**、ジャンヌ・イスナール、エミール・ギレリス、カラヤン
(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団) ハンナ・チェルニー・ステファンスカ、
アラ・ソレンコワ

1958 昭和 33 年

ブロードス・アール、ピエール・フルニエ、ジャネット・ドワイヤン、ネーリ・シ
コーリニコワ、マンフレッド・グルリット (NFC 交響楽団)、**エドゥアルド・シュ
トラウス (東京交響楽団)**、アマデウス弦楽四重奏団、ガウク、ザンデルリンク
(レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団)、ヘスス・ゴンザレス、
レオニード・コーガン、ムスティスラフ・ロストロポーヴィッチ、ジャン・ピア
ース、ベンノ・モイセヴィッチ、ジャンヌ・レディング、アンリ・ピエット、**エドア
ルド・ヴァン・ルモートル (東京交響楽団)**、パーヴェル・リシチアン、エンリ
コ・マイナルディ&カルロ・ゼッキ、ゴアール・ガスパリアン、レオニード・コー
ガン、ジャン・フルネ、アルヴィッド・ヤンソンス (東京交響楽団)、ホセ・F・
パスケス (東京フィルハーモニー)、スメタナ弦楽四重奏団、**ウィルヘルム・ロイ
ブナー (NHK 交響楽団)**

1959 昭和 34 年

ラティスラフ・ヤーセック、**イタリア歌劇団 (エレーデ、ヴェルキ、マリオ・デ
ル・モナコ、ガブリエッラ・トゥッチ、フェルツッチョ・タリアビーニ、他)**、マー
ゴット・フォンティーン、ミルカ・ポコルナ、アンドル・フォルデス、ウィーン国
立歌劇場公演 (ホルライザー)、ゴールデンゲイト四重唱団、ニューヨーク・リト
ル・オーケストラ (シャーマン) **フェルディナンド・プレヴィタリー (東京交響
楽団)**、ヴァレリー・クリモフ、アンドレ・セゴビア、**イーゴリ・ストラヴィンス
キー (NHK 交響楽団)**、イワン・ペトロフ、ヨゼフ・スーク、レフ・ブラセンコ、
ユーディ・メニューイン、ヘルムート・ロロフ、ジェラルド・スゼー、リタ・シュ
トライヒ、**ウィルヘルム・シュヒター = N響 (日独交歓放送音楽会)**、アルベル
ト・レオーネ、ヨゼフ・スーク (東京フィルハーモニー交響楽団)、ジュリアン・
オレウスキー、**ヘルベルト・フォン・カラヤン (ウィーン・フィルハーモニー管弦
楽団)**、**ウィリー・ボスコフスキ (ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)**、**チェ
コ・フィルハーモニー管弦楽団 (カレル・アンチェル)**、**ジャン・フルネ**、ジュリ
アン・オレウスキー (東京交響楽団)、ニコライ・マルコ (東京交響楽団)

1960 昭和 35 年

エヴァ・ヴェルトナ、パウル・バドゥラ=スコダ、リヒャルト・バクスト、イーゴ
リ・オイストラフ、オイゲン・ヨッフム (東京交響楽団)、ニカレノ・サバレタ、
チェコ室内管弦楽団、**ウィルヘルム・シュヒター (NHK 交響楽団)**、**シャルル・ミ
ュンシュ (ボストン交響楽団)**、アルフレッド・カンポーリ、ラインハルト・ペー
タース (東京交響楽団) 同 (東京交響楽団)、ハリダ・アフチャモワ、ニキタ・マ
ガロフ、ウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団、パウル・バドゥラ=スコダ、
ヤーノシュ・シュタルケル、アルヴィッド・ヤンソンス (東京交響楽団)、ジーク
フリード・ベーレント、ジェルギー・シェベック、カルロ・マリア・ジュリーニ

(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団)

1961 昭和 36 年

パウル・バドゥラ・スコダ、フランチェスコ・ラウフ、ウィトルド・マルクジンスキー、ヴァツラフ・スメタチェック(東京交響楽団) 同(東京交響楽団)、アダム・ハラシェヴィッチ、フランツ・コンピチュニー(ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団) ジュリアード弦楽四重奏団、アントニン・モラヴェッツ、*イエルク・デムス、ヘルマン・プライ、パブロ・カザルス(東京交響楽団)、アイザック・スターン、アルトゥール・グリュミオー、レナード・バーンスタイン(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団) プランシュ・シーボム、モウリス・ボニー(東京交響楽団)、ミヒャエル・バスクリンスキー、イタリア歌劇団(カプアーナ、マリオ・デル・モナコ、レナータ・テバルディ、ジュリエッタ・シミオナート、アルド・プロッティ他) モウリス・ボニー(東京交響楽団) スーク・トリオ、ウィルヘルム・ケンズ、ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団

1962 昭和 37 年

ワルター・クリーン、ドイツ・パッサ・ゾリスデン、アントン・カラス、ジュリアス・カッチェン、オイゲン・ヨッフム、ベルナルド・ハイティンク(アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団) エリック・フリードマン、ヤナーチェック弦楽四重奏団、ニューヨーク木管五重奏団、ハンガリー弦楽四重奏団、スメタナ弦楽四重奏団、ベルリン室内管弦楽団(西) シャルル・ミュンシュ(日本フィルハーモニー)

1963 昭和 38 年

レオニード・コーガン、アダム・ハチャトゥリアン、レオニード・コーガン(読売日本交響楽団) ヤン・クレンツ(ポーランド国立放送交響楽団) ヘルムート・ヴァインシャーマン(ドイツ・パッサ・ゾリスデン) ピエール・モントゥ、アンタル・ドラティ、ゲオルグ・ショルティ(ロンドン交響楽団) ジャン・マルティノン(NHK 交響楽団) ジュリアス・ベーカー、ハンス・リヒターハーザー、ウィーン・フィルハーモニック弦楽四重奏団、トゥールーズ管楽合奏団、イタリア歌劇団(ファブリチス、エット・レ・バステリアニーニ、アントニエッタ・ステラ、ジュリエッタ・シミオナート、アルド・プロッティ他) ベルリン・ドイツ・オペラ公演(カール・ベーム、ハインリッヒ・ホルライザー、ロリン・マゼール、エリザベート・グリュンマー、エリカ・ケート、クリスタ・ルードウィッヒ、リザ・オットー、ワルター・ベリー、D. フィッシャウ＝ディスカウ他)

1964 昭和 39 年

ルネッサンス合唱団、コンスタンティン・シルベストリ、ミシェル・シュヴァルヴェ(NHK 交響楽団) ジャン・ピエール・ランバル、イワーノフ、A. ヤンソンス(ソビエト国立交響楽団) アンドレ・クリュイタンス(パリ音楽院管弦楽団) ケルン古典管弦楽団、ソリスト・ヴェネティ合奏団、アンドル・フォルデス、ウォルフガング・サヴァリッシュ(NHK 交響楽団) イシュトバン・ケルテス、コリン・デイビス(*ロンドン交響楽団) リリー・クラウス

1965 昭和 40 年

*ヘンリック・シェリング、ハンガリー弦楽四重奏団、ウラディミール・アシケナージ、ソウル市交響楽団、アルトゥール・ベネデッティ＝ミケランジェリ、ジュリアン・ブリーム、ラファエル・クーベリック(バイエルン放送交響楽団) ウィルヘルム・ケンズ、ルドルフ・ゼルキン、レオポルド・ストコフスキー(読売日本交響楽団) レオポルド・ストコフスキー(日本フィルハーモニー) スラブ歌劇団公演(マタチッチ、ミロスラフ・チャンガロヴィッチ他) ホプキンス(シドニー交響楽団) ヴェーグ弦楽四重奏団、ジャン・ピエール・ランバル、レフ・オボーリン、レオニード・コーガン、アイザック・スターン、パーヴォ・ベルグルンド(日本フィルハーモニー)

1966 昭和 41 年

ジョン・オグドン(日本フィルハーモニー) イングリッド・ヘブラー、ヘルベル

ト・フォン・カラヤン（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）、シモン・ゴールドベルグ（オランダ室内管弦楽団）、ヴァン・クライバーン、ルドルフ・バルシャイ（モスクワ室内管弦楽団）、ルドルフ（シンシナティ交響楽団）、ジュリアード弦楽四重奏団、フー・ツォン、ミッシェル・デポスト、ダニエル・バレンボイム、シャルル・ミュンシュ（フランス国立放送管弦楽団）、*ヴィトルド・ロヴィツキ（ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団）、*ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団（オイゲン・ヨッフム、マゼール、ヘンツェ、ヒルデ・ギューデン、エリカ・ケート、ピラル・ローレンガー、リザ・オットー、D.フィッシャウ=ディスカウ、ヨゼフ・グラインドル他）、ロプロ・フォン・マタチッチ（NHK交響楽団）

1967 昭和 42 年

アレクサンダー・ブライロフスキー、ダヴィッド・オイストラッフ、キリル・コンドラシ、ダヴィッド・オイストラッフ（モスクワ・フィルハーモニー交響楽団）、イタリア歌劇団（ファブリチス、アントニエッタ・ステラ、レナータ・スコット、ギネス・ジョ・ンズ、カルロ・ベルゴンツィ他）、ユージン・オーマンディ（フィラデルフィア管弦楽団）、リリー・クラウス、ジュゼッペ・ディ・ステファアーノ、ソリスティ・ヴェネティ合奏団、*アマデウス弦楽四重奏団、ゲザ・アンダ、アイザック・スターン、ウォルフガング・サヴァリッシュ（ウィーン交響楽団）

1968 昭和 43 年

アダム・ハラシェヴィッチ、ウラディミール・アシュケナージ、ウィーン・フィルハーモニック弦楽四重奏団、ヨゼフ・クリップス（サンフランシスコ交響楽団）、レオニード・コーガン、ブルーノ・レオナルド=ゲルバー、ヨゼフ・カイルベルト（バンベルク交響楽団）、スヴェトラノフ（ソビエト国立交響楽団）、エルネスト・アンセルメ、パウル・クレツキ（スイス・ロマン管弦楽団）、オイゲン・ヨッフム、ベルナルド・ハイティンク（アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団）、パイヤール室内管弦楽団、ピーター・ゼルキン、ワンゲンハイム（ボン・ベートーベン・ホール管弦楽団）、ベルリン聖ヘドヴィヒ大聖堂合唱団）

1969 昭和 44 年

ハンス・リヒター・ハーザー、ゲオルグ・ショルティ、ウィリー・ボスコフスキー（ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）、ナルシソ・イエペス、トロント交響楽団、イーゴリ・オイストラッフ、イングリッド・ヘブラー、カール・リヒター（ミュンヘン・パッサ管弦楽団）、アンドレ・ワッツ、ヴァン・クライバーン、ヴァツラフ・ノイマン（チェコ・フィルハーモニー管弦楽団）、*クリストフ・エッセンバツハ、ズピン・メータ（ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団）、ベルナルド・ハイティンク、ジョン・ブリッチャード（*ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団）、イ・ムジチ合奏団）

1970 昭和 45 年

ユーディ・メニューイン、マルタ・アルゲリッチ、ヘルムート・ヴィンシャーマン（ドイツ・パッサ・ゾリスデン）、ハインツ・ホリガー、ウィルヘルム・ケンフ、ベルリン・ドイツ・オペラ公演（マゼール、ヨッフム、ホルライザー、エリカ・ケート、ピラル・ローレンガー、エディット・マティス、ホセ・ファン・ダム、D.フィッシャウ=ディスカウ他）{大阪国際万国博覧会=*ベルリン・ドイツオペラ、*セルジュ・ボド、ジョルジュ・プレートル、アレクシス・ワイセンベルク（パリ管弦楽団）、ワイセンベルク、シャルル・デュトワ、オーレル・ニコレ（読売日本交響楽団））、ヘルベルト・フォン・カラヤン（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）、ジョ・ジ・セル、ピエール・ブーレーズ（クリーブランド管弦楽団）、ジャン=ピエール・ランパル、パイヤール室内管弦楽団、ローマ室内歌劇場公演、パウル・デッカー、モーリン・フォレスター、フィリップ・アントルモン（モンテリオール交響楽団）、エフゲニ・ムラヴィンスキー、アルヴィッド・ヤンソン（レニングラード・フィルハーモニー交響楽団）、ジョン・バルビローリ（ニュー・フィ

ルハーモニア管弦楽団)、ポリショイ・オペラ公演(*ゲンナジ・ロジェストペンスキー、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ、ガリーナ・ヴィシネフスカヤ他)、レナード・バーンスタイン(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団)、*ヴィトルド・ロヴィツキ(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団)、ロリン・マゼール(日本フィルハーモニー)、アレクシス・ワイセンベルク、*セルジュ・ボド、ジョルジュ・プレートル(パリ管弦楽団)、イゴール・マルケビッチ(日本フィルハーモニー)、ヘルベルト・フォン・カラヤン(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)、ジョージ・セル(クリーブランド管弦楽団)、パイヤール室内管弦楽団、デッカー(モントリオール交響楽団)、アルヴィッド・ヤンソンス(レニングラード・フィルハーモニー交響楽団)、ジョン・ブリッチャード(ニュー・フィルハーモニア管弦楽団)、ポリショイ歌劇場公演、レナード・バーンスタイン(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団)、スヴァトスラフ・リヒテル、レppard(イギリス室内管弦楽団)、*イエルク・デムス(日本フィルハーモニー)、エルンスト・ヘフリガー、チューリッヒ・コレギウム・ムジクム(ハインツ・ホリガー、オーレル・ニコレ)、ストラトヴァリウス・トリオ、ウラディミール・アシュケナージ、ハンス・シュミット=イッセルシュテット(読売日本交響楽団)

1971 昭和 46 年

ウィリー・ボスコフスキー(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団)、ネルソン・フレイレ(読売日本交響楽団)、イヴァン・モラヴェッツ、チューリッヒ室内管弦楽団、ヨゼフ・スーク、クリスチャン・フェラス、ウォルフガング・サヴァリッシュ、ヨゼフ・スーク(NHK 交響楽団)、クリスティアン・フェラス、ルツェルン祝祭楽合奏団、*アンドレ・プレヴィン(*ロンドン交響楽団)、ユーディ・メニューイン、リリー・クラウス(日本フィルハーモニー)、イングリット・ヘブラー、ヘルマン・ブライ、バルトク弦楽四重奏団、アダム・ハラシェヴィッチ、イタリア歌劇団(ファブリティス、マタチッチ、エレナ・スリオティス、フィオレンツァ・コッソット、アルフレッド・クラウス、ルチアーノ・パヴァロッティ他)、ユージン・イストミン&アイザック・スターン&レナード・ローズ、フランコ・コレリ、ピエール・コシュロー、ラインハルト・ペータース(NHK 交響楽団)、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ&ガリーナ・ヴィシネフスカヤ、ストラスブル・パーカッショングループ、シューラ・チェルカスキー、イ・ムジチ合奏団とセヴェリーノ・ガツェローニ、トゥールーズ室内管弦楽団、ミツシャ・ディヒター(日本フィルハーモニー)、*クルト・マズア(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団)、マイケル・ティルソン・トーマス(日本フィルハーモニー)、オトマール・スイトナー(NHK 交響楽団)

1972 昭和 47 年

ウィリー・ボスコフスキー(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団)、スティーブン・ビショップ、エリザベート・シュワルツコップ、ローマ合奏団、エリー・アメリック、ピエール・フルニエ、リーガー(ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団)、ヴィンシャーマン(ドイツ・パッサ・ゾリステン)、*クリストフ・エッシェンバッハ、オッコー・カム、ハインツ・ホリガー、ウルズラ・ホリガー、オーレル・ニコレ(日本フィルハーモニー)、スメタナ弦楽四重奏団、エミール・ギレリス、イギリス室内管弦楽団、ハンス・ホッター、サヴァリッシュ、E. ギレリス(NHK 交響楽団)、モーリス・アンドレ、ネヴィル・マリナー(アカデミー室内管弦楽団)、パイヤール室内管弦楽団、*ゲンナジ・ロジェストペンスキー(*モスクワ放送交響楽団)、ユージン・オーマンディ(フィラデルフィア管弦楽団)、シクステン・エーリング(日本フィルハーモニー)、ジョン・ブリッチャード(読売日本交響楽団)、ウォルフガング・サヴァリッシュ(NHK 交響楽団)、カール・ミュ

ンヒンガー(シュトゥットガルト室内管弦楽団) クラウディオ・アラウ、アグスティン・アニエバス(p f)、ディーター・ツェヒリン(p f)、スヴェトラノフ、キタエンコ(ソビエト国立交響楽団) *アマデウス弦楽四重奏団、ヴィクトリア・デ・ロスアンヘルス、ジャン・ピエール・ランバル(読売日本交響楽団) レオニード・コーガン、エフゲニー・マリニン(p f)、ウィルヘルム・ケンブ、藤原歌劇団公演「ルチア」(ニコラ・ルッチ、ヘレン・マネ) ウィレム・ヴァン・オッテルロー、ウラディミール・アシュケナージ(読売日本交響楽団) モーリス・ジャンドロン、*レオポルド・ハーガー(ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団)、ミシェル・ベロフ、ズピン・メータ(ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団) エリカ・ウプハーゲン(東京フィルハーモニー) ウィレム・ヴァン・オッテルロー(読売日本交響楽団) ワルシャワ・フィルハーモニー室内管弦楽団

1973 昭和 48 年

ロリン・マゼール(ベルリン放送交響楽団(西))、カール・ハインツ・ツェラー、アウグスト・ヴェンツィンガー(古典音楽協会) *ヴィトルド・ロヴィツキ(読売日本交響楽団) オットマール・スウィトナー(NHK 交響楽団) ホルスト・シュタイン、グレゴリー・ソコロフ(NHK 交響楽団) ベルリン・フィルハーモニー八重奏団、ソフィア・ゾリステン、クラウディオ・アバド(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団) モーリス・アンドレ、アウジェオ・クワドリ(東京フィルハーモニー) チョン・キョン・ファ&フー・ツォン、ジャクリーヌ・デュ・プレ&ピンカス・ズッカーマン&ダニエル・パレンボイム、ダニエル・パレンボイム(イギリス室内管弦楽団) ウィリアム・スタインバーグ(ピッツバーグ交響楽団) ブルーノ・レオナルド・ゲルバー、*ヴィトルド・ロヴィツキ(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団) フィリップ・アントルモン、ジュリアード弦楽四重奏団、エフゲニ・ムラヴィンスキー(レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団) ウォルフガング・サバリッシュ、ゲルバー(NHK 交響楽団) エリアフ・インバル(読売日本交響楽団) イージ・ラインベルガー(or)、ウォルフガング・サバリッシュ、アンナ=トモフ・シントウ(NHK 交響楽団) ユーリ・シモノフ(ポリショイ劇場管弦楽団) ルドルフ・ケレル(p f)、アンドル・フォルデス、*アンネローゼ・シュミット、ヴァツラフ・フデチェック&ヨゼフ・ハーラ、イタリア歌劇団(ファブリティス、カバイヴァンスカ、スコット、コッソット、カレラス、ベルゴンツィ、クラウス、ギャウロフ) アンドル・フォルデス(東京都交響楽団) ヘルマン・プライ(読売日本交響楽団) フランス室内合奏団、ラドゥ・ルプー、ハンス・スワロフスキー、スコダ、*イエルク・デムス(NHK 交響楽団) クルト・ザンデルリンク(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団) ヘルベルト・フォン・カラヤン(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団) ベルリン弦楽四重奏団、ミレーナ・モローバ(p f) レナータ・テバルディ&フランコ・コレルリ、イ・ムジチ合奏団、ウィーン八重奏団、アルトゥーロ・ヴェネゼッティ=ミケランジェリ

1974 昭和 49 年

ベルリンフィルハーモニーゾリスデン、マルタ・アルゲリッチ、フェレンチュ(ハンガリー国立交響楽団) オットマール・スウィトナー(NHK 交響楽団) ヤン・パネンカ、テミルカーノフ(レニングラード・フィルハーモニー管弦楽団) パーヴォ・ベルグランド、ヤーノシュ・シュタルケル(東京都交響楽団) ストラスブール・パーカッショングループ、マキシム・ショスタコーヴィチ(NHK 交響楽団) デジェ・ラーンキ(東京都交響楽団) ヘルムート・リリング(シュトゥットガルト・パツハ管弦楽団&合唱団) アンナ・モッフオ、マリツィオ・ポリーニ、スヴァトスラフ・リヒテル、ベルナルド・ハイティンク(アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団) ロリン・マゼール(クリーヴランド管弦楽団) イングリット・

ヘブラー、アルフレッド・ブレンデル、ヴァツラフ・ノイマン（チェコ・フィルハーモニー管弦楽団）、*ラファエル＝フリーベック・デ・ブルゴス（読売日本交響楽団）、レナード・パースタイン、ピエール・ブーレーズ（ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団）、バンクーバー交響楽団、ルドルフ・ケレル、イツァーク・パールマン（読売日本交響楽団）、バイエルン国立歌劇場公演（カルロス・クライバニ、サバリッシュ、ライトナー、コトルバス、ファスベンダー、ギネス・ジョンズ、ディートリッヒ・フィッシャウ＝ディスカウ、ジェームス・キング、ビルギッド・ニルソン他）、テオ・アダム、中国中央楽団、マリア・カラス&ジュゼッペ・ディ・ステファアーノ、*クリストフ・エッセンバッハ（読売日本交響楽団）、スメタナ弦楽四重奏団、ウィーン弦楽四重奏団、ディートリッヒ・フィッシャー＝ディスカウ、ヨゼフ・スーク、ウィルヘルム・ケンブ、エディット・マティス、テレサ、ツィリス＝ガラ&クルト・ヴェス、日本フィルハーモニー、クルト・ザンデルリンク（ベルリン交響楽団）、ペーター・シュライヤー、<ベルリン音楽祭>ドイツ・リートの日（プロイル、ビュヒナー、フォーゲル、エーテル）、ヘルムート・コッホ（ベルリン室内管弦楽団）

1975 昭和 50 年

フェドセーエウフ（*モスクワ放送交響楽団）、ギャリック・オールソン、ヤナーチェク弦楽四重奏団、カール・ペーム、リッカルド・ムーティ（ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）、ラドゥ・ルプー（東京都交響楽団）、ウォルフガング・サバリッシュ（NHK 交響楽団）、ニコライ・ゲッタ、デジェ・ラーンキ、アレクシス・ワイゼンベルク、パイヤール室内管弦楽団、ルドルフ・バルシャイ（モスクワ室内管弦楽団）、ピエール・ブーレーズ（BBC 交響楽団）、ロシア・ソビエト音楽祭（オシポフ・バラライカ・オーケストラ、モスクワ室内管弦楽団、エレナ・オブラストワ、国立ロシア合唱団、ムラビンスキー＝レニングラード・フィル）、ラファエル・クーベリック（バイエルン放送交響楽団）、ムラビンスキー（レニングラード国立フィルハーモニー・アカデミー交響楽団）、アルトゥール・ベネデッティ＝ミケランジェリ、メトロポリタン歌劇場公演（ボニング、コレルリ、ドミンゴ、マリリン・ホーン、パヴァロッチ、メリル、サザーランド他）、ブルーノ＝レオナルド・ゲルバー、ネルソン・フレア、サンフランシスコ交響楽団、ローチェ（ドレスデンフィルハーモニー管弦楽団&ライブツィヒ聖トーマス教会合唱団）、アルジェオ・クワドリ、ウィーン室内管弦楽団、ジュリーニ（ウィーン交響楽団）、コレギウム・アウレム合奏団、*セルジュ・ボド、ランバル（読売日本交響楽団）、ジュゼッペ・ディ・ステファアーノ、*アンドレ・プレビン（*ロンドン交響楽団）、ペーター・シュライヤー、*クルト・マズア（ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団）、トスカ公演（ベントウーラ、モンセラ・カバリエ、ステファアーノ他）、プラハ室内管弦楽団

1976 昭和 51 年

ヘルヴィッヒ（ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団）、アルヴィド・ヤンソンス（モスクワ・フィルハーモニー交響楽団）、シューラ・チェルカスキー、ウラディミール・クライネフ（P）、ワルター・ノータス（東京フィルハーモニー交響楽団）、マウリツィオ・ポリーニ、*ヘンリク・シェリング、モーリス・ジャンドロ、アラン・ロンパール（ストラスブル・フィルハーモニー管弦楽団）、マルタ・アルゲリッチ、ルイ・オーリアコンブ（トゥールズ室内管弦楽団）、ミュンヒンガー（シュトゥットガルト室内管弦楽団）、エフゲニー・モギレフスキー（P）、スーク・トリオ、ブルーノ・リグット（P）、*クルト・マズア（読売日本交響楽団）、イタリア歌劇団（ファブリティス、マシーニ、コッソット、カバレ、カレラス、ドミンゴ、リッチャレリ他）、ヴァインシャーマン（ドイツ・バッハゾリスデ

ン) サバリッシュ(スイス・ロマン管弦楽団)、ウィルヘルム・ケンプ、ノイマン(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団)、ヴァルハル(スロバキア室内管弦楽団)、ザンデルリンク(読売日本交響楽団)

1977 昭和 52 年

ベルリン国立歌劇場公演(スウイトナー、テオ・アダム、カサビエトラ、シントウ、シュライヤー、フォーゲル他)、スウイトナー(ベルリン国立歌劇場管弦楽団)、ペーター・シュライヤー、テオ・アダム、クルト・レーデル(ミュンヘン・プロアルテ室内管弦楽団)、カール・ベーム、ドホナーニ、アニヤ・シリヤ(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)、*クリストフ・エッセンバッハ、クラウディオ・シモーネ(ソリストィ・ヴェネティ合奏団)、ドレスデン・カンマーソリスト、モスクワ・アカデミー音楽劇場公演(キタエンコ、ピサレンコ他)、ベルナルド・ハイティンク(アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団)、ギドン・クレーメル、カールハインツ・ツェラー&ウォルフガング・ベッヒャー(Vc)、ゲオルグ・シヨルティ(シカゴ交響楽団)、ベルリン室内管弦楽団、カップ(ニューヨーク・フィルハーモニア室内管弦楽団)、ロマーノ・ガンドルフィ(ミラノ・スカラ座合唱団)、ローチェ(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団)、ラザール・ベルマン、ムラヴィンスキー(レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団)、アントルモン(ウィーン室内管弦楽団)、モーリス・アンドレ、セルジュ・チェリビダツケ(読売日本交響楽団)、エッダ・モーザー、ヘルベルト・フォン・カラヤン、バーバラ・ヘンドリックス、ワイゼンベルク(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)、マイケル・ポンティ、エフゲニ・マリーニン、コンラッド・ラゴスニック、ハンス・マルティン・リンデ、ウィーン・ブロックフレーテ・アンサンブル、バルトーク弦楽四重奏団、チューリッヒ・バロック合奏団

1978 昭和 53 年

アンドリュウ・デイビス(トロント交響楽団)、ボッセ(ゲバントハウス・バッハ・オーケストラ)、エリー・アメリンク、ルドルフ・ゼルキン、ボストン交響楽団、プロムシュテット(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団)、パイヤール室内管弦楽団、ヴァルハル(スロバキア室内管弦楽団)、ユージン・オーマンディ(フィラデルフィア管弦楽団)、エーリッヒ・ラインスドルフ(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団)、マゼール(フランス国立管弦楽団)、マゼール(クレーヴランド管弦楽団)、アルフレッド・ブレンデル(東京フィルハーモニー交響楽団)、スヴェトラノフ(ソビエト国立交響楽団)、スウイトナー(ベルリン国立歌劇場管弦楽団)、アルフレッド・ブレンデル、ザンデルリンク、アルド・チッコリーニ(読売日本交響楽団)、ラザール・ベルマン、ジョルジュ・シェベック(P)、ワルシャワ・フィルハーモニー室内管弦楽団、*レオポルド・ハーガー(*ザルツブルク・モーツァルト管弦楽団)、ブルゴス(フィルハーモニア管弦楽団)、*セルジュ・ボド(読売日本交響楽団)、ハインツ・レークナー(読売日本交響楽団)、スウイトナー(NHK 交響楽団)、ジャン・フルネ(東京都響)、ガブリエル・タキーノ、イムレ・ローマン、ディミトリー・バシキロフ、ワンダ・ウィルコミスカ、ジャン＝ピエール・ヴァレーズ、ルードヴィッヒ・ギョトラー、マクサンス・ラリュウ、コダーイ弦楽四重奏団、ワルシャワ室内管弦楽団

1979 昭和 54 年

ヘルムート・リリング(シュトゥットガルト・バッハ・コレギウム)、モートン・グールド(読売日本交響楽団)、スビャトスラフ・リヒテル、フレミヒ(ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団)、韓国国立交響楽団、テオ・アダム、ロリス・チェクナポリアン、ビルギッド・ニルソン(読売日本交響楽団)、エド・デ・ワールト(ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団)、エルンスト・ヘフリガー、モスクワ・オペラ公演(コジュハーリ、クロモワ他)、*セルジュ・ボド(リヨン管

弦楽団)「魔笛」公演(サバリッシュ、シュライヤー、スジスラフ・ドナート他) ルドルフ・バルシャイ、クラウド・アラウ(読売日本交響楽団) *クリストフ・エッシェンバッハ、アンヌ・ケフェレック、ムラビンスキー(レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団)、フランツ・リスト室内管弦楽団、フェルバー(ヴュルテンブルク室内管弦楽団) バルシャイ(読売日本交響楽団)「モニュシコ:ストラシニ・ドヴール」公演(ミェチスラフ・ノヴァコフスキ) レナード・バーンスタイン(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団)、ウィーン・フォルクス・オパー公演(トイスル、ピーブル、ミニツヒ、カール・デンヒ、ワルデマール・クメント、イーロツシュ・ダラボツツァ、メラニー・ホリデイ他) フィルハーモニア・ヴァーチュオーヅ、コベントガーデン王立歌劇場公演(コリン・デイビス、ジャン・ピアース、コトルバシュ、カバリエ、カレラス、ヴィクセル他) モンセラ・カバリエ、シモノフ(ポリショイ劇場管弦楽団) ヘルベルト・フォン・カラヤン、シントウ、バルダーニ、フレニ、アグネス・バルツァ、シュライヤー、ルイス・リマ、ギャウロフ、ファン・ダム、ウィーン楽友協会合唱団(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)、ノイマン、コシュラー(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) *マズア(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団)、ベルリン・フィルハーモニートリオ、イ・ムジチ合奏団、*クリストフ・エッシェンバッハ、フェレンチク(ハンガリー国立交響楽団) *ゲンナジ・ロジェストベンス主二(読売日本交響楽団) エフゲニー・モギレフスキー、*アンネローゼ・シュミット、*イエノ・ヤンド、ボジュナ・シュタイネロヴァ、エフゲニ・マリニン、*カール・ズスケ、ペーター・ダム、チモフェイド・クシツェル、ポロディン弦楽四重奏団、バルトク弦楽四重奏団、テオ・アダム、ヴュルテンベルク室内管弦楽団、アルヴィッド・ヤンソンス、ヘルベルト・ケーゲル

1980 昭和 55 年

ペーター・シュライヤー&コンラッド・ラゴスニック(G)、ベルリン国立歌劇場公演(スウイトナー、シュライヤー、テオ・アダム、カサピエトラ他) ケルン放送交響楽団、クワドリ(東京フィルハーモニー交響楽団) *ブルゴス、ベルキン(読売日本交響楽団) ブルーノ・レオナルド・ゲルバー、ロストロポーヴィチ(ナショナル交響楽団)、ウィーン室内アンサンブル、*ロンドン交響楽団、ロサーノ(メキシコ・シティ・フィルハーモニー管弦楽団)、エレナ・オブラスツォフ、ジュリアード弦楽四重奏団、バレンボイム(パリ管弦楽団) ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ&ガリーナ・ヴィシネフスカヤ、コシュラー(スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団) エーリッヒ・ラインスドルフ(ベルリン放送交響楽団(西))、ウィーン国立歌劇場公演(カール・ベーム、クロプチャール、ハインリッヒ・ホルライザー、ホルスト・シュタイン、グシュルバウアー、ルチア・ポップ、グンドラ・ヤノヴィツ、ヘルマン・プライ、アグネス・バルツァ、エディッタ・グルベローヴァ、ジェームス・キング、レオニー・リザネック他) カール・ベーム、マゼール(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)、コレギウム・アウレウム合奏団、*ブルゴス(読売日本交響楽団) ラドゥ・ルプー、マクサンス・ラリュエ&ロベール・ヴェイロン=ラクロワ、ベルリン室内オーケストラ、エリー・アメリング、ショルティ、コボス(*ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団)、ベルリン室内管弦楽団、*ブルゴス(読売日本交響楽団) アルトゥーロ・ヴェネゼッティ=ミケランジェリ、エリー・アメリンク(東京交響楽団) エリー・アメリング、タチアナ・ニコライエワ、エフゲニ・モギレフスキー、デュオ・ガネビ、ガブリエル・タキーノ、ジャン=ピエール・ヴァレーズ、モーリス・ジャンドロン、ヨハネス・ワルター、チモフェイド・クシツェル、ルードウィッヒ・ギュトラー、モスクワ少年

少女合唱団、オーストラリア室内管弦楽団

1981 昭和 56 年

スピャトスラフ・リヒテル、マクシミウク（ポーランド室内管弦楽団）、マウリツィオ・ポリーニ、テレサ・ベルガンサ、マルタ・アルゲリッチ（新日本フィルハーモニー）イエーナ（ミュンヘン・バッハ管弦楽団）スウイトナー（ベルリン国立歌劇場管弦楽団）アイザック・スターン、*ロジェストベンスキー（BBC 交響楽団）パイヤール室内管弦楽団、キタエンコ、シモノフ（モスクワ・フィルハーモニー交響楽団）、オーマンディ、ムーティ（フィラデルフィア管弦楽団）ユーディ・メニューイン、アニー・フィッシャー、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス・バッハ管弦楽団、ドレスデン国立歌劇場公演（クルツ他）、ミラノ・スカラ座公演（カルロス・クライバー、クラウディオ・アバド、アライザ、カッパチルリ、ドミンゴ、ドヴォルスキー、フレニ、ギャウロフ、レオ・ヌッチ、シントウ、バレンティーニ他）、ヴァレス（パリ室内管弦楽団）、アルフレッド・ブレンデル、ヘルベルト・フォン・カラヤン（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）、ジャン＝ベルナル・ボミエ（P）、バルトク弦楽四重奏団、フランツ・リスト室内管弦楽団、ボストン交響楽団、シルヴィア・シャーシュ（S）、*アンネローゼ・シュミット、エフゲニ・マリーニン、*イエノ・ヤンド、*カール・ズスケ、スザンナ・ミルドニアン、コンラッド・ラゴスニック、ペーター・ダム、マクサン・ラリュエ、ポロディン弦楽四重奏団、ラサール弦楽四重奏団、バルトク弦楽四重奏団、ソフィア少年少女合唱団

1982 昭和 57 年

オッコー・カム（ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団）、クリスティナ・オルティズ（東京フィルハーモニー交響楽団）、アシュケナージ（フィルハーモニア管弦楽団）、ベルリン・フィル八重奏団、マゼール（クリーヴランド管弦楽団）、アンタル・ドラティ（読売日本交響楽団）、エドアルド・ミュレル（東京フィルハーモニー交響楽団）、マゼール（フランス国立管弦楽団）*クリストフ・エッセンバッハ（ウィーン交響楽団）アンネ・ゾフィー・ムター & アレクシス・ワイゼンベルク、ペーター・シュライヤー、イーレク（ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団）、カルロ・マリア・ジュリーニ（ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団）、ウィーン国立フォルクスオペラ公演（ビーブル、ピンダー、イーロシュ、ホリデイ、カール・デンヒ、ミニッヒ、ダラポツァ他）、ハインツ・シュンク（ベルリン室内管弦楽団）、セシル・リカド、アンドレス・セゴビア、グート（ウィーン・シュトラウス＝レハール管弦楽団）、クリスティアン・ツィメルマン、ミシェル・ペロフ、オイゲン・ヨッフム、*レオポルド・ハーガー（バンベルク交響楽団）、ウィーン八重奏団、モンセラ・カバリエ、ミュンヒンガー（シュトゥットガルト室内管弦楽団）、ルドルフ・ゼルキン（新日本フィルハーモニー）、ノイマン、コシュラー（チェコ・フィルハーモニー管弦楽団）、ハウシルト（ライプツィヒ放送交響楽団）、ウィーン弦楽合奏団、ユーディ・メニューイン、ドレスデン室内管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー・トリオ、スウイトナー（NHK 交響楽団）、カサドシュ（リル管弦楽団）、アラン・プラネス、タチアナ・ニコライエワ、ルードヴィッヒ・ギュトラー、ハンス・マルティン・リンデ、フランス金管五重奏団、コダーイ弦楽四重奏団、モスクワ少年少女合唱団、ヘルベルト・ケーゲル

1983 昭和 58 年

コーロディ（ブタペスト・フィルハーモニー管弦楽団）、シュタットマイヤー（ミュンヘン室内管弦楽団）、ズピン・メータ（イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団）、トゥールーズ室内管弦楽団、ロストロポーヴィチ（ナショナル交響楽団）、エリー・アメリング、シャ・マーホン（香港フィルハーモニー管弦楽団）、ウラディミール・ホロヴィッツ、マゼール（ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）、ベル

リン国立歌劇場公演(スウイトナー、クルツ、アダム、カサピエトラ他)、ブルク劇場公演、アバド(*ロンドン交響楽団)、ブラハ室内管弦楽団、ケルン放送交響楽団、ウェス(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団)、ヴィンシャーマン(ドイツ・パッサリステン)、スピヴァコフ(モスクワ・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団)、ベルリン室内管弦楽団、イングリット・ヘブラー、スヴェトラノフ(ソビエト国立交響楽団)、エレナ・オプラスツォワ&エフゲニー・ネステレンコ、ブルゴス(読売日本交響楽団)、*クルト・マズア(ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団)、ラドゥ・ルプー、ヨーヨー・マ、ホセ・カレラス、チョン・キョンファ、クロー(クイーンズランド・ユース・オーケストラ)、ペーター・ギュルケ(NHK交響楽団)、マリア=ジョアオ・ピリス、ユゲット・ドレイフィス、エフゲニ・モギレフスキー、オリヴィエ・ギャルドン、ミシェル・シュワルヴェ、ジャン=ピエール・ヴァレーズ、スザンナ・ミルドニアン、マクサンス・ラリュウ、ペーター・ダム、ボロディン弦楽四重奏団、ラサール弦楽四重奏団、アーリン・オージェ、オーストラリア室内管弦楽団、ヴュルテンベルク室内管弦楽団

1984 昭和 59 年

シャロン(イスラエル室内管弦楽団)、バーダー(ハノーバー北ドイツ放送管弦楽団)、ホグウッド(エンシェント室内管弦楽団)、リリエホッシュ(スウェーデン王立室内管弦楽団)、パーボ・ベルグルンド(アムステルダム・フィルハーモニー管弦楽団)、*レオポルド・ハーガー(東京フィルハーモニー)、ギルバート・キャプラン(新日本フィルハーモニー)、サバリッシュ、ムター、ポップ、プライ(NHK交響楽団)、コレギウム・アウレム合奏団、クラウス・テンシュテット(*ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団)、ハンブルク国立歌劇場公演(ドホナーニ、ネルソン、ヘルガ・デルネッシュ、ヘレン・ドナート、ギネス・ジョーンズ、クルト・モル、リザネック、テルツ少年合唱団他)、コリン・デビス(バイエルン放送交響楽団)、ハインリッヒ・ホルライザー、シュロモ・ミンツ(読売日本交響楽団)、バレンボイム(パリ管弦楽団)、シュロモ・ミンツ、モッシュ・アツモン(デンマーク王立管弦楽団)、スウイトナー(ベルリン国立歌劇場管弦楽団)、グート(ウィーン・シュトラウス=レハール管弦楽団)、メータ(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団)、カップ(フィルハーモニア・ヴァーチュオーゾ)、メラニー・ホリデー、ランプレヒト(ウィーン・シンフォニック・ポップ・オーケストラ)、イーレク(ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団)、ヴァレス(パリ室内管弦楽団)、ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団、アンサンブル・ウィーン=ベルリン、パイヤール室内管弦楽団、ペーター・シュライヤー、ヘルベルト・フォン・カラヤン(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)、リッカルド・シャイー(ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団)、マルタ・アルゲリッチ(新日本フィルハーモニー)、マルタ・アルゲリッチ&ネルソン・フレイレ、スーク・トリオ、スメタナ弦楽四重奏団、ハインツ・レーグナー(ベルリン放送交響楽団)、ヴァツラフ・ノイマン(NHK交響楽団)、ロベルト・ベント、タチアナ・ニコライエワ、*アンネローゼ・シュミット、ヴィクトル・トレチャコフ、フランス金管五重奏団、バルトック弦楽四重奏団、ルツェルン祝祭弦楽合奏団、チューリッヒ弦楽合奏団、オッコー・カム、ヘルベルト・ケーゲル

1985 昭和 60 年

ウェス(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団)、ウォルフガング・ゲネンヴァイン(ドイツ・パッサ管弦楽団)、クルト・レーデル(ミュンヘン・プロアルテ室内管弦楽団)、シャルル・デュトワ(モンテリオール交響楽団)、サイモン・ラトル(フィルハーモニア管弦楽団)、ウィーン国立フォルクスオペラ公演(ルドルフ・ピープル、ノイホルト、カール・デンヒ、メラニー・ホリデー、ペーター・ミ

ニッヒ他) ウィーン国立フォルクスオパー・ガラコンサート、*エッセンパツハ(チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団) ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル、リリング(シュツットガルト・バッハ・コレギウム) トレバール・ピノック(イングリッシュ・コンサート) リカルド・ムーティ(フィラデルフィア管弦楽団) クリスティアン・ツィメルマン(新日本フィルハーモニー) テオドール・グシュルパウアー(ストラスプール・フィルハーモニー管弦楽団) プラハ国立歌劇場公演(コシュラー、ペーター・ドヴォルスキー、ガブリエラ・ベニャチコヴァ他) ノイマン(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) バンクーバー交響楽団、エフゲニー・ネステレンコ、アントルモン(ウィーン室内管弦楽団) ハワース(ロンドン・シンフォニエッタ) レナード・バーンスタイン(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団) マンニーノ(カナダ・ナショナルオーケストラ) ウェス、ワルベルク(ウィーン・トーンキュストラ管弦楽団) トレチャコフ(ソビエト国立室内管弦楽団=旧モスクワ室内管弦楽団) アニー・フィッシャー、プロムシユテット(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団) ジェシー・ノーマン、ヘンヒェン(ベルリン国立歌劇場室内管弦楽団) ジェシー・ノーマン(新日本フィルハーモニー) ローチェ、シュライヤー(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団&聖トーマス教会合唱団) グラーフ(*ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団) 郭昇(KBS交響楽団) フー・ツォン、ユーリー・エゴロフ、フリリップ・アントルモン、マリア=ジョアオ・ピリス、ジャン=ピエール・ヴァレーズ、スザンナ・ミルドニアン、マクサンス・ラリュエ、ラサール弦楽四重奏団、ドイツ・バッハ合唱団、アーリン・オージェ、グンドラ・ヤノヴィッツ、ディベルティメント・ザルツブルグ

1986 昭和 61 年

カーリンガー(ウィーン・シュトラウス・カペレ) コシュラー(スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団) ボストン交響楽団、ウィーン国立歌劇場公演(ジュゼッペ・シノポリ、シュナイダー、ホルライザー、フレニ、ヘンドリックス、ヤノヴィッツ、ジョーンズ、トコディ、アダム、ドヴォルスキー、ルネ・コロ、クメント他) シヨルティ、パレンボイム(シカゴ交響楽団) ロリン・マゼール(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団) ギネス・ジョーンズ、ピエロフラーヴェック(プラハ交響楽団) カルロス・クライバー(バイエルン国立管弦楽団) マウリツィオ・ポリニ、ウラディミール・フェドセーエフ(*モスクワ放送交響楽団) ヴェーグ(ザルツブルク・カメラータ・アカデミカ) エディット・マティス、ウェス(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) ウラディミール・ホロヴィッツ、ボッセ(ライブツィヒ・ゲバントハウス・バッハ管弦楽団) グート(ウィーン・シュトラウス=レハール管弦楽団) *ゲンナジ・ロジェストベンスキー(ソビエト国立文化省交響楽団) オイゲン・ヨッフム、アシュケナージ(ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団) 英国ロイヤル・オペラ公演(ジャック・デラコット、マーク・エルムラー、フランコ・ボニソルリ、カレラス、アグネス・バルツァ、ワルター・ベリー、キリ・テ・カナワ他) デラコット(コベントガーデン王立歌劇場管弦楽団) ホルスト・シュタイン(バンベルク交響楽団) アグネス・バルツァ、ホセ・カレラス、マリス・ヤンソンス(レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団) サバリッシュ、ポップ、ヴェルント・ワイケル(NHK 交響楽団) *エッセンパツハ(ウィーン交響楽団) エフゲニー・ネステレンコ&国立モスクワ室内合唱団、スピヴァコフ(モスクワ・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団) チェリビダッケ(ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団) ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、アイザック・スターンと仲間たち、ケント・ナガノ、スタニスラ

1987 昭和 62 年

フ・ブーニン、リットン(イギリス室内管弦楽団) **ネヴィル・マリナー**(シュトゥットガルト放送交響楽団) **ヴァーレク**(チェコスロバキア放送交響楽団) **スウイトナー**(NHK 交響楽団) **アンナ・トモア**=シントウ、**ギュルシン・ナオイ**、**ニコライ・デミジェンコ**、**ロベルト・ベンツ**、**クリスティアン・ツァハリス**、***アンネローゼ・シュミット**、**セルゲイ・スタドレル**、**ヴィクトル・トレチャコフ**、**ペーター・ダム**、**ウィーン木管アンサンブル**、**フランス金管イレブン**、**メロス弦楽四重奏団**、**ヴュルテンベルク室内管弦楽団**、**ウィーン・ベラ・アルテ合奏団**

ザイベンブッシュ、**ウヴェ・タイマー**(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ) **ジュゼッペ・シノポリ**(フィルハーモニア管弦楽団) **ネーヴェ・ヤルヴィ**(エーテポリ交響楽団) **ジェフリー・テイ**(イギリス室内管弦楽団) ***ブルゴス**(読売日本交響楽団) **イツァーク・パールマン**、**シュタットマイヤー**(ミュンヘン室内オーケストラ) **サロネン**(スウェーデン放送交響楽団) **アバド**(**ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団**) **ユーディ・メニューイン**、**ベルリン国立歌劇場公演**(**スウイトナー**、**クルツ**、**アダム**、**シュライヤー**、**カサピエトラ**、**フォーゲル**他) **バレンボイム**(パリ管弦楽団) **キャスリーン・バトル**、**デュトワ**(北ドイツ放送交響楽団) **マゼール**(ピッツバーグ交響楽団) **ブルーノ**=**レオナルド・ゲルバー**、***マズア**(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団) **スヴェトラノフ**(ソビエト国立交響楽団) **マゼール**(読売日本交響楽団) **ヘスス・ロベス**=**コボス**、***ブルゴス**(スペイン国立管弦楽団) ***イエルク・デムス**、**ラトル**(パーミンガム市交響楽団) **ピーター・ゼルキン**(東京都交響楽団) **スクロヴァチェフスキー**(ジュリアード音楽院オーケストラ) **ベルリン・フィルハーモニー室内合奏団**、**ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ**、**ベルリン室内管弦楽団**、**クリストフ・フォン・ドホナーニ**(クリーヴランド管弦楽団) **ネーヴェ・ヤルヴィ**(スコットランド・ナショナル交響楽団) **バイヤール室内管弦楽団**、**ベルリン・ドイツ・オペラ公演**(**ホルライザー**、**コボス**、**ルネ・コロ**、**イエルサレム**、**サルミネン**、**アームストロング**他) **ジェームズ・コンロン**(ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団) **メルボルン交響楽団**、**ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団**、**ジョルダン**(スイス・ロマン管弦楽団) **インバル**(フランクフルト放送交響楽団) **ウラディミール・アシュケナージ**、**パーバラ・ヘンドリックス**、**タルミ**(イスラエル室内管弦楽団) **コープマン**(アムステルダム・バロック・オーケストラ) **クラウドディオ・アラウ**、**ピエール・コシュラー**(スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団) **ブラシド・ドミンゴ**、**ロッホラン**(スコットランド室内管弦楽団) **ボストン・ポップス・エスプラネード・オーケストラ**、**クレニコフ&キーシン&レービン&ゲルギエフ**、**NHK 交響楽団**、**シノポリ**(ワールド・フィルハーモニー管弦楽団) **シュテファン・フラダール**、**フー・ツォン**、**フィリップ・アントルモン**、**マリア**=**ジョアオ・ピリス**、**トーマス・ツェートマイヤー**、**ナルシソ・イエベス**、**ユージニア・ズッカーマン**、**ヨハネス・ワルター**、**ウィーン・アルティス弦楽四重奏団**、**ミルヤーナ・イーロツシュ**、**ハロルド・セラフィン**、**ウィーン・フィルハーモニア・シュランメル**、**ロンドン・ナッシュアンサンブル**、**ベルリン室内管弦楽団**、**スコットランド室内管弦楽団**、**エドガー・ザイベンブッシュ**(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ)

1988 昭和 63 年

ボスコフスキー(ウィнна・ワルツ・オーケストラ) **エシュベ**(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) **カム**、**ベルグルンド**(ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団) **シャーマーホン**(香港フィルハーモニー管弦楽団) **ハンガリー国立交響楽団**、**オルフェウス室内管弦楽団**、**ブロムシュテット**(サンフランシスコ交響楽団) **メータ**(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団) **アバド**(ヨーロッパ室

内管弦楽団) コルト(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団) **ウィーン国立フィルハーモニー管弦楽団** (ビーブル、イーロッシュ、ホリデイ他) ベルティエニ(ケルン放送交響楽団) マリナー(アカデミー室内管弦楽団) トレチャコフ(ソビエト国立室内管弦楽団) **ジェシー・ノーマン**、ヘルムート・リリング(シュトゥットガルト・パッサ管弦楽団) **ヘルベルト・フォン・カラヤン**(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団) マルパ(スペイン放送交響楽団) **サバリッシュ**(NHK交響楽団) **デイビス**(バイエルン放送交響楽団) ハンス・ブリュッヘン(18世紀オーケストラ) **アントルモン**(ウィーン室内管弦楽団) **キャスリーン・バトル**、ダフ・オフ(トルブーヒン室内管弦楽団) **メトロポリタン歌劇場公演**(**ジェームス・レバイン**、**クルト・レーデル**、**ドミンゴ**、**キャスリーン・バトル**、**トーマス・ハンブソン**、**ドーン・アップショー**、**シェリル・ミルンズ**、**フランコ・ボニゾリ**、**ユッソット**他) **ロンパール**(ボルドー・アキテーヌ管弦楽団) **レナード・スラットキン**(NHK交響楽団) **ウィーン・アマデウス管弦楽団**、**スイートナー**(ベルリン国立歌劇場管弦楽団) **トゥルチャク**(キエフ・オペラ・バレエ管弦楽団) **ホグウッド**(エンシェント・ミュージック管弦楽団) **グート**(ウィーン・シュトラウス=レハール管弦楽団) **ライナ・カバイヴァンスカ**、**ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル**、**パーノン・ハンドレイ**、***ライナー・キュッヒル**(読売日本交響楽団) **ジョルジュ・プレートル**(パリ・オペラ座管弦楽団) **ミラノ・スカラ座公演**(**カルロス・クライバー**、**リッカルド・ムーティ**、**ロリン・マゼール**、**アグネス・バルツァ**、**ディミトロヴァ**、**ミレツラ・フレニ**、**ペーター・ドヴォルスキー**、**ブルゾン**、**マルティヌッチ**他) **イートン**(ニューヨーク・シティ・シンフォニー) **エサ・ベッカ**・**サロネン**(NHK交響楽団) **ジュゼッペ・シノポリ**(フィルハーモニア管弦楽団) **ヨーヨー・マ&エマニュエル・アックス&ヤンウク・キム**、**ウラディミール・フェドセエフ**(***モスクワ放送交響楽団**) ***アンドレ・プレビン**(ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団) **フォスター**(ローザンヌ室内管弦楽団) **ヨゼフ・スーク**(スーク室内オーケストラ) **ヴェーグ**(ザルツブルク・カメラータ・アカデミカ) **ブロムシュテット**、**アルフレッド・ブレンデル**(NHK交響楽団) **C.ライトナー**(ウィーン・モーツァルト・オーケストラ) **クラウド・テンシュテット**、**レナード・スラットキン**(***ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団**) **ノイマン**、**ピエロフラーベック**(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) **フレーミヒ**(ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団) **デイビッド・アサートン**、**チャー・リャン・リン**、**ホルヘ・ボレット**、**アンドレアス・ブラウ**(NHK交響楽団) **シュビנק**(シュトゥットガルト室内管弦楽団) **バイエルン国立歌劇場公演**(**サバリッシュ**、**シュライヤー**、**ポツプ**、**シントウ**、**ユリア・ヴァラディ**、**コロ**、**ヴァイクル**、**プライ**、**クルト・モル**、**アダム**他) **バイエルン国立歌劇場特別公演**、**フロー**、**ペーター・シュライヤー**、**グラフ**(***ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団**) **マリス・ヤンソンス**(オスロ・フィルハーモニー管弦楽団) **ヴォルフ=ディーター・ハウシルト**(シュトゥットガルトフィルハーモニー管弦楽団) **フロー**、**マレク・ヤノフスキ**(NHK交響楽団) **レヅジャ**(イギリス室内管弦楽団) **セルジオ・ダニエル・ティエンボ**、**タチアーナ・ニコライエワ**、**フィリップ・アントルモン**、**クリスティアン・カツァリス**、**ミハエル・プレトニョフ**、***アンネロ・ゼ・シュミット**、**デュオ・クロムランク**、**アルト・ノラス**、**ヴィクトル・トレチャコフ**、**マキシム・フェドトフ**、**ペーター・ダム**、**ウィーン木管アンサンブル**、**ポロディン弦楽四重奏団**、**ドンナ・ロビン**、**アンドレア・マルティン**、**シュトゥットガルト・フィルハーモ**

1.6. 平成時代

1970年（昭和45年）に開催された日本万国博覧会・芸術催事をピークに、昭和中・後期に爛熟期を経た外来演奏家公演も、平成を迎えると沈静化の兆候が見られる様になった。そして、1984年（昭和59年）から始まった金融自由化の帰結とも言うべき1990年（平成2年）のバブル崩壊は、大衆に価値観の移動を促すことになり、“金・物”から“心・精神”志向への転換を示唆することになる。昭和の項で述べた社団法人「企業メセナ協議会」設立（1990年）は正にそうした動向の表象化に他ならない。

また平成時代になってからのIT（情報技術）の加速度的且つ飛躍的な進歩と、経済活動の急速なグローバル化もまた、少なからず芸術活動に影響を与え、延いては演奏会活動にも婉曲的に反映する事に成る。CD、DVDの複製簡便化、そこから派生する音楽著作権侵害による実演家の被害増大、経済活動のグローバル化がもたらす輸入盤CDと国内盤CDの価格間格差、音声圧縮技術によるPC、モバイル・ツールへの音声配信、等々、音楽鑑賞形態の変化、演奏会離れを誘発する因子の出現を見逃す事はできない。我々は、IT技術の進歩、経済活動のグローバル化が、情報・事務処理の簡素化、交通手段の迅速化を編み出し、公演活動に簡便化をもたらした反面、生の演奏会主催活動にとって婉曲的には阻害要因となり得ることに開眼しなければならない。

換言すれば、大正・昭和時代に比して、実演を取り巻く環境は一入厳しさを増してきたと言わざるを得ない。

一 覧

1989 昭和64年・平成1年 カーリンガー（ウィーン・シュトラウス・カペレ）ウィルトナー（ウィーン交響楽団）ヨハン・シュトラウスアンサンブル、アレグザンダー・ギブソン、ギル・シャハム（NHK交響楽団）、*ブルゴス（スペイン国立管弦楽団）、ホルスト・シュタイン、アレクセーエフ、クーレン（NHK交響楽団）、エシュベ（ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団）、**ダニエル・バレンボイム（パリ管弦楽団）**、ハンス・ドレバンツ、ネルソン・フレイレ（NHK交響楽団）、ジョン・エリオット・ガーディナー（イギリス・バロック管弦楽団）、トーマス（*ロンドン交響楽団）、**ドレスデン国立歌劇場管弦楽団**、シュトゥッツ（チューリッヒ室内管弦楽団）ウリ・セガル（シュトゥットガルト室内管弦楽団）、**サバリッシュ、ヴァラディ、ディスカウ、ジョン・キムラ・パーカー（NHK交響楽団）、ニコライ・ゲッダ、エヴァリンド、リラ・オウベルリ、カラブチェフスキー（ウィーン・トーンクンストラ管弦楽団）**、コンツ（南西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団）、**ムーティ（フィラデルフィア管弦楽団）、**ディミトリー・キタエンコ（モスクワ・フィルハー

モニー交響楽団) ホセ・カレラス、ユッカ=ベッカ・サラステ(フィンランド放送交響楽団) ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、オルフェウス室内管弦楽団、フランツ・リスト室内管弦楽団、ミシェル・タバシュニク(NHK 交響楽団) ウィーン国立フォルクス・オパー公演(ルドルフ・ピーブル、C. ライトナー他) ポリショイ歌劇場公演(ラザレフ、スヴェトラノフ他) ラッファ(オーストラリア・フィルハーモニー管弦楽団) インバル(ベルリン放送交響楽団(西)) モニエ(ベルサイユ室内管弦楽団) パイロイト音楽祭「タンホイザー」東京公演(ジュゼッペ・シノポリ他) ズピン・メータ(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団) ブルーノ=レオナルド・ゲルバー(新星日本交響楽団) カロテヌート(ローマ国際室内管弦楽団) ゾンデッキー(リトアニア室内管弦楽団) マリス・ヤンソンス、テミルカーノフ(レニングラード・フィルハーモニー・アカデミー管弦楽団) ヴィノグラドフ(モスクワ・クラシック・バレエ管弦楽団) ヘルベルト・ケーゲル(ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団) ジョージアディズ(ロンドン・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団) ストラカ(ベルリン・カメラータ・ムジカ室内オーケストラ) 上海交響楽団、マレク・ヤノフスキ、フランク・ペーター・ツィンマーマン(NHK 交響楽団) ホグウッド(エンシェント・ミュージック管弦楽団) クラウディオ・アバド(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団) ウィーン国立歌劇場公演(クラウディオ・アバド、ホルライザー、グラーフ他) ロッホラン(*ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団) デラコート(ナショナル・フィルハーモニー管弦楽団) プレートル(ウィーン交響楽団) スウイトナー(NHK 交響楽団) ベンダー、ペロフ(カンヌ管弦楽団) デュトワ(モントリオール交響楽団) グランド・オペラ「カルメン」(ホセ・カレラス、アグネス・バルツァ他) インバル(フランクフルト放送交響楽団) カントロフ(オヴェールニュ室内オーケストラ) ミツシャ・マイスキー、アシュケナージ(ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団) スピヴァコフ(モスクワ・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団) ピエロフラーベック(ブラハ交響楽団) *クルト・マズア(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団) ゲネンヴァイン(ドイツ・パッサ管弦楽団) ヴァレリー・アフナシェフ、レーデル(ミュンヘン・プロアルテ室内管弦楽団) ボストン交響楽団、アレナ・ディ・ヴェローナ「アイダ」公演(ネルロ・サンティ他) ウラディミール・クライネフ、タチアナ・ニコライエワ、パウル・グルダ、ニコライ・ルガンスキー、スヴェトラナ・パターニナ、フー・ツォン、ラファエル・オレゲー、ナルシソ・イエペス、セルゲイ・スタドレル、ラドヴァン・ヴラトコヴィッチ、アンサンブル・ウィーン、ウィーン・アルティス弦楽四重奏団、ハーゲン弦楽四重奏団、モンテヴェルディ合唱団、ソフィア少年少女合唱団、ドイツ・パッサ合唱団、ウィーン・フィルハーモニア・シュランメル、リトアニア室内管弦楽団 ザイブンブッシュ(ウィーン国立フォルクスオパー管弦楽団) ウヴェ・タイマー(ウィーン・オペラボール・アンサンブル) エシュベ(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) ウィルトナー(ウィーン・モーツァルト・アカデミー・オーケストラ) サロネン(NHK 交響楽団) *ピнкаス・スタインバーグ(オーストラリア放送交響楽団) ロストロポーヴィチ(ナショナル交響楽団) ベルグルンド(ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団) シュタイン(NHK 交響楽団) スラトキン(セントルイス交響楽団) ウリ・セガル(大阪センチュリー・オーケストラ) ハーゼルベック(ウィーン・アカデミー管弦楽団) ウヴェ・ムント、ルドルフ・ブッフピンダー(NHK 交響楽団) ブラハ室内管弦楽団、サバリッシュ、ペーター・ホフマン(NHK 交響楽団) ショルティ、バレンボイム(シカゴ交響楽団)

1990 平成2年

トラウンフェルナー（ウィーン・カンマーフィルハーモニー管弦楽団）、ブロムシ
 ユテット（NHK 交響楽団）、シュタイン（バンベルク交響楽団）、ダフォフ（トルブ
 ーヒン室内管弦楽団）、アンドリュウ・デイビス（BBC 交響楽団）、サバリッシュ、
 ミッサ・マイスキー（NHK 交響楽団）、スヴェトラノフ（ソビエト国立交響楽
 団）、オペラ・ガラ・コンサート（ガルシア・ナヴァーロ、アグネス・バルツァ、
 ペニャチコヴァー、アトラントフ、ヴァイクル他）、ヘルビツヒ（トロント交響楽
 団）、クリストフ・フォン・ドホナーニ（クリーヴランド管弦楽団）、ウィーン・モ
 ーツァルト室内オーケストラ、*エツシェンバッハ（イギリス室内管弦楽団）、サ
 バリッシュ、マイスキー（NHK 交響楽団）、カンガス（オストロボスニア室内オー
 ケストラ）、ミュンヘン・サロン・オーケストラ、ジャン・フルネ（NHK 交響楽団）、
 ウヴェ・タイマー（ウィーン国立フォルクスオペラ室内管弦楽団）、パイヤール室
 内管弦楽団、ボストン・ポップス・オーケストラ、コジュハーリ（キエフ・オペ
 ラ・バレエ管弦楽団）、バーダー（クラクフ・フィルハーモニー管弦楽団）、ゲルト
 ナーブラッツ国立歌劇場公演（シュバルツ、シック他）、ニューヨーク・シンフォ
 ニックアンサンブル、グート（ウィーン・シュトラウス＝レハール管弦楽団）、*
ライナー・キュッヒル、レナード・バーンスタイン、トーマス（*ロンドン交響楽
 団）、ムーティ（スカラ・フィルハーモニー管弦楽団）、フランツ・リスト室内管弦
 楽団、チェルネツキ（南西ドイツ室内管弦楽団）、マリナー（アカデミー室内管弦
 楽団）、レニングラード室内管弦楽団、トレヴァー・ピノック（イングリッシュ・
 コンソート）、ライトナー、ミカエラ・フカチョパー（NHK 交響楽団）、マウリエル
 ロ（フィレンツェ・アカデミア室内楽団）、セルジュ・チェリビダッケ（ミュンヘ
 ン・フィルハーモニー管弦楽団）、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、ベルリン
 国立歌劇場公演（シュナイト、ショルテス、アダム、フォーゲル、アンドレアス・
 シュミット他）、ジェルメッティ（シュトゥットガルト放送交響楽団）、シンシナテ
 ィ交響楽団、シンシナティ・ポップス管弦楽団、シェルツァー（ドレスデン室内オ
 ーケストラ）、ゲルテンバッハ（ポーランド室内管弦楽団）、ギュンター・ヴァント
 （北ドイツ放送交響楽団）、ウェルズ・ナショナル・オペラ公演（アームストロン
 グ他）、シノポリ（フィルハーモニア管弦楽団）、ブリュッヘン（18世紀オーケスト
 ラ）、ノイマン、プライ、ミンツ（NHK 交響楽団）、ベルティエニ（ケルン放送交
 響楽団）、ベトゥル・ヴロンスキ（ブルノ・フィルハーモニー管弦楽団）、ターフェ
 ルムジーク・パロック・オーケストラ、タバコフ（ソフィア・フィルハーモニー管
 弦楽団）、マゼール（フランス国立管弦楽団）、ロ・チェ（ライプツィヒ・ゲバント
 ハウス管弦楽団）、パルトロメイ（リエージュ・フィルハーモニー管弦楽団）、ハイ
 ンツ・ワルベルク、ミハエル・プレトニョフ（NHK 交響楽団）、セルジオ・ダニエ
 ル・ティエンボ、エフゲニー・モギレフスキー、クルト・ニッカネン、ライナー・
 モーク、ヴァツラフ・フデチェック、ダニエル・ヴァイス、ベルリン・フィルハー
 モニー木管アンサンブル、メロス弦楽四重奏団、グッジー・レーヴィンガー、シル
 ヴァーナ・ドゥスマン、ダグマール・コラー、ペーター・ミニツヒ、クルト・ヒュ
 ーマー、ロ・レンス・ヴィンセント、ルーマニア国立マドリガル合唱団、ブラハ室
 内管弦楽団、レニングラード室内管弦楽団、エドガー・ザイゲンブッシュ（ウィ
 ーン国立歌劇場舞踏会管弦楽団）、ヘスス・ロペス＝コボス（シンシナティ交響楽団）、
エリック・カンゼ（シンシナティ・ポップス・オーケストラ）

1991 平成 3 年

カーリンガー（ウィーン・シュトラウス・カペレ）、ウィーン・アマデウス管弦楽
 団、エシュベ（ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団）、ベリニコフ（レニ
 グラード国立オペラ・バレエ劇場管弦楽団）、ウィルトナー（ウィーン交響楽団ヨ

ハン・シュトラウスアンサンブル)、 アダム・フィッシャー、 ギル・シャハム (NHK 交響楽団) ライトナー (ウィーン・モーツァルト・オーケストラ) グローヴァー (ロンドン・モーツァルト・プレイヤーズ) オルフェウス室内管弦楽団、 ヤノフスキー (フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団) ヴァルハル (スロバキア室内オーケストラ) ナバロ (サルスエラ管弦楽団) ラトル (バーミンガム市交響楽団) ベルティエニ (ケルン放送交響楽団) シュタットマイヤー (ミュンヘン室内オーケストラ) ヤルヴィ (エーテポリ交響楽団) *レオポルド・ハーガニ、 *アンドレ・ブレビン (ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団) *ウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団、 リリング (シュトゥットガルト・バッハ管弦楽団) プロムシュテット (NHK 交響楽団) *ウィーン・リング・アンサンブル、 ホセ・カレラス、 ヴェーグ (ザルツブルク・カメラータ・アカデミカ) グラーフ (*ザルツブルク・モーツァルトウム管弦楽団) アバド (ヨーロッパ室内管弦楽団) スピヴァコフ (モスクワ・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団) モスクワ室内管弦楽団、 フロール (ベルリン交響楽団) デュトワ、 ジャン=フィリップ・コラール (NHK 交響楽団) ガルドゥファー (ベネズエラ・シモン・ポリール交響楽団) ザルツブルグ州立歌劇場公演 (グラーフ、 インセラ、 ベルグルンド他) アントルモン (ウィーン室内管弦楽団) BBC ウェールズ交響楽団、 エルムレル、 ヤンソンス (モスクワ・フィルハーモニー交響楽団) デイビス (バイエルン放送交響楽団) マゼール (ピッツバーグ交響楽団) コープマン (アムステルダム・バロック・オーケストラ) アユケナージ (ベルリン放送交響楽団) アンゲルヴォ (西ヘルシンキ音楽院室内オーケストラ) ロレンス・フォスター、 リン (NHK 交響楽団) ギドン・クレーメル (ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団) ベルリン・コミッシェ・オーバー公演 (ウィラート、 ロイター他) オソフスキー、 レービン (モスクワ・シアター・オペラ管弦楽団) ジェムチュージン (モスクワ・アカデミー音楽劇場管弦楽団) セルジュ・コミッションナ (バンクーバー交響楽団) P. コーガン (モスクワ国立交響楽団) ネラート (ザルツブルク室内オーケストラ) スタニシェフ (ウィーン舞踏管弦楽団) ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル、 ゾンデッキー (レニングラード・フィルハーモニー室内管弦楽団) エッセンバッハ (ヒューストン交響楽団) ジェラード・シュワルツ (モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団) サバリッシュ (ウィーン交響楽団) ルトナ (ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ) シュンク (ベルリン室内管弦楽団) アントルモン (NHK 交響楽団) *ブレビン (ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団) フルネ (NHK 交響楽団) カロテヌート (ローマ国際室内管弦楽団) イマゼール (アニメ・エテルナ・オーケストラ) スーク (スーク室内オーケストラ) サバリッシュ、 クルト・モル (NHK 交響楽団) シャイー (ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団) ウッドワード (ウィーン室内歌劇場管弦楽団) ホグウッド (エンシェント・ミュージック管弦楽団) クィーンズランド・フィルハーモニー管弦楽団、 *エッセン、 ンバッハ (バンベルク交響楽団) モッシュ・アツモン (KBS 交響楽団) ラファエル・クーベリック、 ノイマン他 (チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) ベリンゲン (ルーアン室内管弦楽団) ビシュコフ (パリ管弦楽団) ダニエル・ナザレス (NHK 交響楽団) トン・コープマン (アムステルダム・バロック・オーケストラ) グラダー (チェコスロバキア室内管弦楽団) ジョルダン (スイス・ロマン管弦楽団) ベルティエニ (ケルン放送交響楽団) ジーヴァ (レニングラード国立歌劇場管弦楽団) クリンスキー (バルドゥビツェ室内管弦楽団) ハンガリー・ヴィルトゥオーゾ・チェンバー・オーケストラ、 アレナ・ディ・ヴェローナ公演 (ネ

1992 平成 4 年

ロ・サンティ、ゲーナ・ディミトローヴァ、ニコラ・マルティヌッチ他)、ヴィット(ポーランド国立放送交響楽団)、メータ(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団)、ハインツ・レーグナー(ベルリン放送交響楽団)、ドミトリエフ(レニングラード交響楽団)、ギュトラー(ドレスデン祝祭管弦楽団)、ウヴェ・ムント(NHK交響楽団)、トーマス(ニューワールド・シンフォニーオーケストラ)、カザルス(イギリス室内管弦楽団)、*アンネローゼ・シュミット、フィリップ・アントルモン、ニコライ・ルガンスキー、ルイ・ローティ、タチアナ・ニコライエフ、ミラ・ゲオルギエヴァ、ナタリア・コルサコヴァ、トリオ・イエペス(ナルシソ・イエペス)、ナタリア・ブリシェベンコ、ワジム・レーピン、マキシム・ヴァンゲロフ、オフラ・ハーノイ、*カール・ズスケ、ペーター・ダム、ラドヴァン・グラトコヴィチ、ドレスデン国立歌劇場木管八重奏、ハーゲン弦楽四重奏団、ドンナ・ロビン、アンドレア・マルティン、ベルリン放送合唱団、ウィーン・モーツァルト・オーケストラ、モスクワ室内管弦楽団、ウィーン室内管弦楽団、ベルリン室内管弦楽団、ウラディミール・フェドセーエフ(*モスクワ放送交響楽団)
コシュラー(ブラハ国立歌劇場管弦楽団)、クラウディオ・アバド、アルフレッド・ブレンデル、ムローヴァ(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)、ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル)、ゲオルゲ・アレクサンダー・アルブレヒト、アンヌ・ケフェレック(NHK交響楽団)、ケルン歌劇場公演(ジェームス・コンロン他)、*ゲンナジ・ロジェストベンスキー(ソビエト・フィルハーモニー交響楽団)、フランツ=ウェルザー・メスト、テンシュテット(ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団)、ジュゼッペ・シノポリ(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)、ブロムシュテット(サンフランシスコ交響楽団)、マゼール(読売日本交響楽団)、デュトワ(モンリオール交響楽団)、シュタイン、ツィンマーマン、ゲアハルト・オビッツ(NHK交響楽団)、ナヴァロ(バルセロナ市立管弦楽団)、*ロジェストベンスキー(ロイヤル・ストックホルム管弦楽団)、マティアス・クンチ(NHK交響楽団)、プレトニョフ(ロシア・ナショナル交響楽団)、トーマス(*ロンドン交響楽団)、ウラディミール・ヴァーレク(ブラハ放送交響楽団)、グート(ウィーン国立フォルクスオペラ管弦楽団)、アダム・フィッシャー(ハンガリー国立交響楽団)、シュライヤー(ベルリン国立歌劇場室内管弦楽団)、オストロボスニア室内オーケストラ、ガブリエル・ムーラ、ミカエラ・フカチョバー、イーゴリ・オイストラッフ(NHK交響楽団)、フランツ・リスト室内管弦楽団、テミルカーノフ、ヤンソンス(サンクト・ペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団)、カラブチェフスキー、トイスル(ウィーン・トーンキュストラ管弦楽団)、パイヤール室内管弦楽団、ハインリヒ・シフ(ノーザン・シンフォニア管弦楽団)、タバシェニク、レーピン(NHK交響楽団)、ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、ロサンゼルス・チェンバー・オーケストラ、ハイティンク、ジェフリー・テイト(コベントガーデン王立歌劇場管弦楽団)、トーマス、カール・セントクレア(バイエルン放送交響楽団)、ゲルテンバッハ(ポーランド室内管弦楽団)、ジェラード・シュワルツ(モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団)、エリオット・ガーディナー(イギリス・バロック管弦楽団)、ジョルジュ・ディマ、フィルハーモニー管弦楽団、アサートン、ミチエル・ダルベルド、ジョン・リル、ミッシャ・マイスキー(NHK交響楽団)、ウィーン・モーツァルト・オーケストラ、オーストラリア室内管弦楽団、ヨハネス・ヴィルトナー(チェコスロバキア放送交響楽団)、*ピンカス・スタインバーグ(NHK交響楽団)、マリナー(アカデミー室内管弦楽団)、ベルリン・カメラータ、ムジカ室内オーケストラ、アルトウール・

1993 平成 5 年

ベネデッティ＝ミケランジェリ、シノポリ（フィルハーモニア管弦楽団）、ヤノフスキー（フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団）、マカール（ミルウォーキー交響楽団）、オーケストラ・オブ・セントルークス、セルジュ・チェリビダッケ（ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団）、スヴェトラノフ（ロシア国立交響楽団）、ジリナ室内管弦楽団、コリン・デイビス（ドレスデン国立歌劇場管弦楽団）、グスタフ・クーン（NHK 交響楽団）、プロムシュテット（NHK 交響楽団）、ブルゴス（ウィーン交響楽団）、ウェラー（シュツットガルト・フィルハーモニー管弦楽団）、バイエルン国立歌劇場公演（ウォルフガング・サバリッシュ、ルチア・ボツプ、ユリア・ヴァラディ、ベルンハルド・ヴァイクル他）、ザクレブ・フィルハーモニー管弦楽団、ミハエル・ギーレン（南西ドイツ放送交響楽団）、リゲティ（ハンガリー放送交響楽団）、オーストラリア室内管弦楽団、コルト（ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団）、ピクトル・パブロ・ペレス（レイナ・ソフィア・オーケストラ）、ヨルダン・ダホフ（ブルガリア室内オーケストラ）、クリスティアン・エーヴァルト（NHK 交響楽団）、マレク・ヤノフスキー、ペーター・ヤブロンスキー（NHK 交響楽団）、オラ・ルトナー（ウィンナワルツ・オーケストラ）、ウヴェ・タイマー（ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ）、ロンドン・バツハ・オーケストラ、セルジオ・ダニエル・ティエンボ、ミラ・ゲオルギエヴァ、メロス弦楽四重奏団、ヴェルニゲローデ合唱団、ウィーン・フィルハーモニア・シュランメル、チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団、ソフィア・ゾリステン、ウィーン・フォルクスオペラ交響楽団、ウィンナ・ワルツ・オーケストラ、フェドセーエフ・ヨゼフ・ガスナー（ウィーン・シュトラウス・ゾリスデン）、*ウィーン・リング・アンサンブル、エシュベ（ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団）、ヴィンフリート・カリンガー（ウィーン・ヨハン・シュトラウス・シンフォニエッタ）、マヌエル・エルナンデス・シルバ（ウィーン・モーツァルト・オーケストラ）、ドレスデン室内オーケストラ、オルフェウス室内管弦楽団、スヴェトラノフ、シューラ・チェルカスキー（NHK 交響楽団）、ターフェルムジーク・バロック・オーケストラ、ヤンソンス（オスロ・フィルハーモニー管弦楽団）、コシュラー（スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団）、ジャン・フルネ、パスカル・ドゥワイヨン（NHK 交響楽団）、クラウス・ペーター・フロール、セシル・ウセー（NHK 交響楽団）、マゼール（バイエルン放送交響楽団）、ベルリン・フィルハーモニー管弦アンサンブル、イヨルグ・ペーター・ヴァイグレ（ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団）、チェリビダッケ（ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団）、ラザレフ（ポリショイ交響楽団）、グシュルバウアー（ストラスブル・フィルハーモニー管弦楽団）、ベルリン室内管弦楽団、ハンス・ドレヴァンツ（NHK 交響楽団）、サバリッシュ（フィラデルフィア管弦楽団）、スラットキン、ユーリ・バシユメット、ラベック姉妹（NHK 交響楽団）、シナイスキー（モスクワ・フィルハーモニー交響楽団）、BBC 交響楽団、オペラ・ガラ・コンサート、メトロポリタン歌劇場管弦楽団、ホルスト・シュタイン、*マルタ・アルゲリッチ（バンベルク交響楽団）、ブリュッヘン（18 世紀オーケストラ）、ピノック（イングリッシュ・コンソート）、ポローニャ市立歌劇場公演（シャイー、R.アバド、ルチアーナ・セツラ、ギャウロフ、ドヴォルスキー、フレーニ、コツソット他）、テミルカーノフ（サンクト・ペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団）、フェドセーエフ（*モスクワ放送交響楽団）、キタエンコ（ベルゲン・フィルハーモニー管弦楽団）、マルティン・ジークハルト（シュトゥットガルト室内管弦楽団）、ピエロフラーベク、エマヌエル・アックス、イザベル・ファン・クーレン（NHK 交響楽団）、インゴ・メッツマッハー（NHK 交

響楽団) ティーレマン、*エッセンバッハ(サンタチェチーリア・アカデミー管弦楽団) *ライナー・キュッヒル(東京シンフォニエッタ・アンサンブル) ゲバントハウス・バッハ・オーケストラ、シュワルツ(モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団) リッカルド・シャイー(アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団) *ピンカス・スタインバーグ(ウィーン放送交響楽団) *ブルゴス、ティーレマン(ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団) フォルカー・シュミット・ゲルテンバッハ(ワルシャワ・シンフォニア) ウォルフ・ディーター・ハウシルト(NHK 交響楽団) ドホナーニ(クリーヴランド管弦楽団) アントルモン、ゾルタン・コチシュ(NHK 交響楽団) マルティン・ハーゼルベック(ウィーン・アカデミー管弦楽団) ジェルメッティ(シュトゥットガルト放送交響楽団) A.フィッシャー(ハイドン・フィルハーモニー管弦楽団) ウィーン国立フォルクス・オパー公演(ゲート、ピープル、ホリデイ、ダラボツァ、ヨッヘン・コヴァルスキー他) クリスティアン・マンデアル(ブカレスト・フィルハーモニー管弦楽団) スロバーク・フィル室内オーケストラ、クラウディオ・シモーネ(グルベンキアン管弦楽団) ドミトリー・キタエンコ(フランクフルト放送交響楽団) ビシュコフ(パリ管弦楽団) ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ゲルギエフ(キーロフ歌劇場管弦楽団) ホルスト・シュツィン、ヘルマン・プライ(NHK 交響楽団) カントロフ(レニングラード管弦楽団) フリードリッヒ・グルダ、マルティン・トゥルノフスキー(ブラハ交響楽団) テイト(*ザルツブルク・モーツァルトウム管弦楽団) コープマン(アムステルダム・バロック・オーケストラ) デュトワ(フランス国立管弦楽団) *ウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団、ピープル(ウィーン国立フォルクスオパー管弦楽団) アシュケナージ(ベルリン・ドイツ交響楽団) エリアフ・インバル、ジャン・マルク・ルイサダ(NHK 交響楽団) ウヴェ・タイマー(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ) タチアナ・ニコライエワ、ミラ・ゲオルギエヴァ、トリオ・イエペス(ナルシソ・イエペス) ハーゲン弦楽四重奏団、ウィーン・アルティス弦楽四重奏団、ソフィア少年少女合唱団、ヘルマン・プライ、ウィーン・ヴィルティオーゾ、ウィーン・モーツァルト・オーケストラ、アレクサンドル・ヴェデルニコフ

1994 平成 6 年

レオン・ポッツスタイン(アメリカン・シンフォニー・オーケストラ) *ウィーン・リング・アンサンブル、ウィーン・アマデウス管弦楽団、ヨハネス・ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル) ヴィリー・ビュッヒラー(ウィーン・シュトラウスフェスティバル・オーケストラ) エシュベ(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) プロムシュテット(NHK 交響楽団) アレクサンダー・ラザレフ、カール・ライスター(NHK 交響楽団) ブラシド・ドミンゴ、ミレルラ・フレニ、ハルトムート・ヘンヒェン(ネザーランド・フィルハーモニー管弦楽団) ハインツ・ワルベルク、テレサ・ベルガンサ(NHK 交響楽団) サロネン(ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団) ジェルメッティ、イヴリー・ギトリス(NHK 交響楽団) スピヴァコフ(モスクワ・ヴィルトゥオーゾ室内管弦楽団) ロストロポーヴィチ(ナショナル交響楽団) マゼール(フィルハーモニア管弦楽団) *ブルゴス(ベルリン放送交響楽団) アントルモン(ウィーン室内管弦楽団) ハンス・シュタルマイヤー(ミュンヘン室内オーケストラ) ミシェル・ブラッソン、ヴァディム・レーピン、ピーター・ゼルキン(NHK 交響楽団) イエルク・フェルパー(ヴュルテンベルク室内管弦楽団) ゲルト・アルブレヒト(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) *クルト・マズア(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団) チャー・リャン・リン(NHK 交響楽団) デュトワ、サ

ラ・チャン、ルイ・ローティ（NHK 交響楽団）、エマヌエル・クリヴィヌ（リヨン管弦楽団）、ラザレフ（ボリショイ交響楽団）、ロルフ・ロイター（ベルリン・コミッシェ・オパー管弦楽団）、パイヤール室内管弦楽団、ドミトリエフ（サンクトペテルブルク交響楽団）、トーマス、エッセンバッハ（*ロンドン交響楽団）、シュワルツ（モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団）、ヤンソンス、テミルカーノフ（サンクト・ペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団）、シャイー（ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団）、マリナー（アカデミー室内管弦楽団）、*ピカス・スタインバーク、チー・ユン、ペテル・ヤブロンスキー、アンドレ・ワッツ（NHK 交響楽団）、ウィーン国立歌劇場公演（カルロス・クライバー、クラウドイオ・アバド他）、ノール・ショピング交響楽団、サンティ（ローマ歌劇場管弦楽団）、ギュンター・ビヒラー（ロンドン・モーツァルト管弦楽団）、シヨルティ（ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）、アバド（ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団）、マゼール（バイエルン放送交響楽団）、ライン・ドイツ・オペラ公演（ハンス・ヴァラット、ドレヴァンツ他）、P. コーガン（モスクワ国立交響楽団）、ヴァーレク（ブラハ放送交響楽団）、サルヴァドール・マス・コンデ（デュセルドルフ交響楽団）、アナトーリ・レーピン（モスクワ・シアター・オペラ管弦楽団）、エドモンド・シュトツ（チューリッヒ室内管弦楽団）、ムント、チェリル・ステューダー、シブリアン・カツァリス（NHK 交響楽団）、ラトル（バーミンガム市交響楽団）、ジンマン（ポルティモア交響楽団）、P. ズーカーマン（イギリス室内管弦楽団）、サバリツシュ、ラドゥ・ルプー（NHK 交響楽団）、メータ（イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団）、ベルティーニ（ケルン放送交響楽団）、ヨハネス・ヴィルトナ（スロバキア国立放送交響楽団）、フランツ・リスト室内管弦楽団、プレトニョフ（ロシア・ナショナル交響楽団）、コルト（ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団）、メルボルン交響楽団、アンドレイ・アニハーフ（レニングラード国立歌劇場管弦楽団）、グューラー・アイカル（プレジデンシャル交響楽団）、サバリツシュ、ルプー、シフ、マリオ・ブルネルロ（NHK 交響楽団）、クリストファー・ホグウッド（エンシェント室内管弦楽団）、ブラハ室内管弦楽団、ルドルフ・ヴェルテン（ベルギー室内管弦楽団）、ピエロフラベック、ダグマル・ベツコヴァー（NHK 交響楽団）、ニコラ・マルティヌッチ、ジャコモ・アラガル、ジュゼッペ・コスタツツォ、タイマー（ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ）、ピエロフラベック（NHK 交響楽団）、ボストン交響楽団、グート（ウィーン国立フォルクスオパー管弦楽団）、セルジオ・ダニエル・ティエンボ、フィリップ・アントルモン、スザンナ・ミルドニアン、マクサンス・ラリュエ、メロス弦楽四重奏団、シュターミッツ弦楽四重奏団、テレサ・ベルガンサ、ピクトリア・デ・ロサンヘルス、ヘルマン・プライ、ウィーン・フィルハーモニア・シュランメル、ウィーン室内管弦楽団、トロンハイム弦楽合奏団、チェコ・フィルハーモニー室内合奏団、ウィーン・ヴィルティオーゾ、ルドルフ・ビーブル（ウィーン・フォルクスオパー交響楽団）

1995 平成 7 年

ガイド・マリア・グイダ、フランク・シップウェイ（イタリア国立放送交響楽団）、エシュベ（ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団）、*ウィーン・リング・アンサンブル、ウィーン・モーツァルト・オーケストラ、ヨハネス・ヴィルトナ（ウィーン・ヨハン・シュトラウス・シンフォニエッタ）、クリストフ・フォン・ドホナーニ（ブラハ国立劇場管弦楽団）、オルフェウス室内管弦楽団、シュタイン（NHK 交響楽団）、ハルトムート・ヘンヒェン（ベルリン・パッサ管弦楽団）、スラトキン（セントルイス交響楽団）、フランツ＝ウェルザー・メスト（*ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団）、ロレンス・フォスター、バーバラ・ヘンドリックス、

ミッシェル・マイスキー (NHK 交響楽団)、デュトワ (モンテリオール交響楽団)、
 フォスター、アンヌ・ケフェレク (NHK 交響楽団)、ロリン・マゼール (ピッツバ
 ーグ交響楽団)、エドモン・コロマー (バルセロナ市立管弦楽団)、*クルト・マズ
 エ (ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団)、スヴェトラノフ (ロシア国立交
 響楽団)、ヤノフスキー (フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団)、ギルヴァ
 ート・ヴァルガ (シュトゥットガルト室内管弦楽団)、トーマス、ブーレーズ (*
 ロンドン交響楽団)、ブーレーズ、パレンボイム (シカゴ交響楽団)、ラザレフ (ボ
 リショイ劇場管弦楽団)、ユーリ・シモノフ、イヴァン・モラヴェッツ、インゲボ
 ルク・バルダスティ (NHK 交響楽団)、オーレ・クリスティアン・ルード (ストッ
 クホルム室内オーケストラ)、クリスティアン・シモニス (ウィーン・コンツェル
 トフェライン室内管弦楽団)、ウィーン・モーツァルト室内オーケストラ、ウラデ
 イミール・コジューハリー (キエフ・オペラ・バレエ管弦楽団)、ヤン・シュティフ、
 ヤン・ズバピテル (ブルノ国立歌劇場管弦楽団)、*エッセンバッハ (ヒュース
 トン交響楽団)、ゲバントハウス・バッハ・オーケストラ、シュワルツ (モースト
 リー・モーツァルト祝祭管弦楽団)、ミラノ・スカラ座公演 (リッカルド・ムーテ
 イ、ジュゼッペ・シノポリ、ティツィアーナ・ファツプリニ、ファン・ボンス
 他)、ヴェルディ「レクイエム」公演 (スカラ座)、ムーティ、シノポリ (スカラ・
 フィルハーモニー管弦楽団)、*ウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団、ブ
 ロムシュテット (NHK 交響楽団)、フェドセーエフ (*モスクワ放送交響楽団)、小
 澤征爾 60 歳祝賀コンサート (ロストロポーヴィチ、*アルゲリッチ、*キュッヒ
 ル他)、ジョルダン (スイス・ロマンド管弦楽団)、ルーマニア・トランシルヴァニ
 ア室内管弦楽団、マンフレート・シェルツァ (ドレスデン室内オーケストラ)、ヨ
 ザス・ドマルカス (リトアニア国立交響楽団)、ビシュコフ (パリ管弦楽団)、シュ
 タイン (バンベルク交響楽団)、レオシュ・スクロフスキー (ブルノ・フィルハー
 モニー管弦楽団)、ブラソン (ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団)、メニュー
 イン・オーケストラ、マンハイム国立歌劇場室内管弦楽団、ベルリン室内管弦楽団、
 ウィーン・トーンキユストラ室内管弦楽団、ピシャン・カーデム・ミサク (フィ
 レンツェ・オーケストラ・ヴェルディアーナ)、アグニエシュカ・ドゥチマル (ア
 マデウス室内オーケストラ)、*アンドレ・ブレビン、ジャン・フィリップ・コラ
 ール (NHK 交響楽団)、ザルツブルク室内オーケストラ、ジェームス・レヴァイン
 (ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)、ルカーチ (ハンガリー国立交響楽団)、
 インバル (フランクフルト放送交響楽団)、イーヴォ・ポゴレリッチ、オリベル・
 フォン・ドホナーニ、ポゴレリッチ (読売日本交響楽団)、ピノック (イングリッ
 シュ・コンサート)、サバリッシュ、F. P. ツィンマー (NHK 交響楽団)、ゴロ
 フチン (モスクワ管弦楽団)、BBC ウェールズ交響楽団、*ブルゴス (ウィーン交
 響楽団)、ゲルギエフ (キーロフ歌劇場管弦楽団)、コルト (ワルシャワ・フィルハー
 モニー管弦楽団)、ザウリス・ゾンデツキ (サンクトペテルブルク室内管弦楽団)、
 ビーブル (ウィーン・ブタベスト・オペレッタ管弦楽団)、ブラハ国立歌劇場公演
 (ヨハネス・ヴィルトナ他)、ジョゼフ・スウェセン (スコットランド室内管弦楽団)、
 ブリュッヘン (18 世紀オーケストラ)、トゥールズ室内管弦楽団、ヤン・クレンツ、
 ゲルテンバッハ (ワルシャワ・シンフォニア)、デュトワ、フランソワーズ・ボレ
 (NHK 交響楽団)、リリング (ヴィルトゥオーゾ・ディ・ブラハ)、タイマー (ウィ
 ーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ)、ビーブル (ウィーン国立フォルクスオペ
 ー管弦楽団)、ヴェセリン・スターネフ、ミラ・ゲオルギエヴァ、ハーゲン弦楽四重
 奏団、テレサ・ベルガンサ、ヘルマン・ブライ、ヘルムート・リリング&ヴィルテ

イオージ・ブラハ、ブラメン・デュロフ(ソフィア・ゾリステン) マヌエル・エルナンデス=ジルバ(ウィーン・モーツァルト・オーケストラ)

ロリン・マゼール(バイエルン放送交響楽団)、シナイスキー(モスクワ・フィルハーモニー交響楽団) ***ウィーン・リング・アンサンブル**、エシュベ(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) ウィーン・アマデウス管弦楽団、ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル) クリスティアン・ガンシュ(ウィーン・オペレッタ・シンフォニッタ) ヴィリー・ヴェッヒラー(ウィーン・シュトラウスフェスティバル・オーケストラ) アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) ハンガリー放送交響楽団、ハンガリー国立ブタベスト・オペレッタ劇場公演(カタリン・ヴァーラディ、カロチャイ・ジュジャ他) ジリナ室内管弦楽団、スロバキア・フィルハーモニーゾリスデン、アサートン、ジョン・キムラ・パーカー(NHK 交響楽団) ズーカerman(イギリス室内管弦楽団) ゲオルグ・クリストフ・ピラー(ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団) スタニスラフ・スクロヴァチェフスキー(NHK 交響楽団) ***ピンカス・スタインバーグ**(ウィーン放送交響楽団) ミヒヤエル・シェーンヴァント(ベルリン交響楽団) ワルベルク(NHK 交響楽団) デュトワ(フランス国立管弦楽団) ヴァーレク(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) ゲルハルト・ラルガンシュ(バーデン市立劇場管弦楽団) **サバリッシュ**(フィラデルフィア管弦楽団) 3大テナー(ルチアーノ・パヴァロッティ、ブラシド・ドミンゴ、ホセ・カレーラス) プレトニョフ(ロシア・ナショナル交響楽団) ガブリエル・フェロ(シチリア交響楽団) **インバル**、**ゲルバー**、**イヴリー・ギトリス**(NHK 交響楽団) クリヴィヌ(リヨン管弦楽団) アントニ・ヴィット(ポーランド国立放送交響楽団) **ハンブルク国立歌劇場公演**(アルブレヒト、バーバラ・ヘンドリックス、ルネ・コロ、アンドレアス・シュミット他) ブラハ室内管弦楽団、コープマン(アムステルダム・バロック・オーケストラ) レイナルド(スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団) ケント・ナガノ(ハレ管弦楽団) **デュトワ**(モンテリオール交響楽団) レバイン(フィルハーモニア管弦楽団) アシュケナージ(ベルリン・ドイツ交響楽団) ヴァーレク(ブラハ放送交響楽団) **テイト**(***ザルツブルク・モーツァルトウム管弦楽団**) マレック・セヴァン(ワルシャワ室内オーケストラ) ヒュー・ウルフ(セントポール室内管弦楽団) ブルガリア室内オーケストラ、**アントルモン**(ウィーン室内管弦楽団) スラトキン(NHK 交響楽団) ローランド・バーダー(クラクフ室内管弦楽団) ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、シュワルツ(モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団) **フィレンツェ五月音楽祭日本公演**(ズピン・メータ、ジョバンニ・フルラネット、ミシェル・クライダー、エディタ・グルペローヴァ、ジュゼッペ・ジャコモニ他) ムーティ(スカラ・フィルハーモニー管弦楽団) シャイー(ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団) **ズピン・メータ**、**五嶋みどり**(**ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団**)、オッコー・カム、レイフ・セゲルスタム(ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団) オーストラリア室内管弦楽団、ビーブル(ウィーン・シュトラウス・カペレ) プロムシュテット、リチャード・ゲート、ステイーヴン・コワセヴィッチ(NHK 交響楽団) テミルカーノフ(サンクト・ペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団) **シュタイン**、**シュテファン・ヴラダー**(NHK 交響楽団) マルティン・ジークハルト(リンツ・ブルックナー管弦楽団) ドミトリー・リス(ウラル・フィルハーモニー管弦楽団) ヒラリー・グリフィス(ブラハ国立歌劇場管弦楽団) **マルティン・ジークハルト**(リンツ・ブルックナー管弦楽団) エド・デ・ワールト(シドニー交響楽団) マルコ・ポーニ(アムステ

ルダム・コンセルトヘボウ室内管弦楽団) パイヤール室内管弦楽団、ギンタ
 ー・ピヒラー(ロンドン・モーツァルト管弦楽団) トーマス・ハヌス(ブラハ
 室内フィルハーモニック管弦楽団) **クラウディオ・アバド**(ベルリン・フィルハー
 モニー管弦楽団) ドイツ祝祭管弦楽団、マルティン・ハーゼルベック(ウィ
 ーン・アカデミー管弦楽団) シュタイン、オピッツ、シュテファン・ヴラダー
 (NHK 交響楽団) ゲルギエフ(キーロフ歌劇場管弦楽団) **チョン・ミュンフン**
 (***ロンドン交響楽団**) ***ラファエル=フリーベック・デ・ブルゴス**(ウィ
 ーン交響楽団) ベルティーニ(シュトゥットガルト放送交響楽団) フィッシャー(ブ
 タベスト祝祭管弦楽団) ターフェルムジーク・バロック・オーケストラ、**ジョ
 ン・エリオット・ガーディナー**(イギリス・バロック管弦楽団&モンテヴェルディ
 ー合唱団) カントロフ(レニングラード管弦楽団) ヤンソンス(オスロ・フィル
 ハーモニー管弦楽団) イェジ・スフォボダ(シレジア・フィルハーモニー交響楽
 団) アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) クリストフ・ポッペン
 (ミュンヘン室内オーケストラ) クラウス・ベーター・フロール、イングリッド・
 ヘプラー、アン・アキコ・マイヤース(NHK 交響楽団) ローランド・バーダー
 (ドイツ・フィルハーモニア・フンガリカ) **デュトワ、ドーン・アップショウ**
 (NHK 交響楽団) **デュトワ、*アルゲリッチ**(NHK 交響楽団) グート(ウィ
 ーン国立フォルクスオペラ管弦楽団) タイマー(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケ
 ストラ) ナルシソ・イエペス、メロス弦楽四重奏団、ハーゲン弦楽四重奏団、ウ
 ーン・アルティス弦楽四重奏団、ニコライ・ゲッダ、ソフィア少年少女合唱団、
 モンテヴェルディ合唱団、**チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団**、ウィーン・フ
 ィルハーモニア・シュランメル、***カール・ズスケ**

1997 平成 9 年

ジークフリート・アンドラシェック(ウィーン・オペレッタ管弦楽団) ヨハネ
 ス・ヴィルトナー(ウィーン・ヨハン・シュトラウス・シンフォニエッタ) ***ウ
 ィーン・リング・アンサンブル**、ヴィリー・ヴェッヒラー(ウィーン・シュトラ
 ウスフェスティバル・オーケストラ) エルンスト・オッテンザマー(ウィーン・モ
 ーツァルト・オーケストラ) エシュベ(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽
 団) カールマン・ベルケシュ(ハンガリー室内管弦楽団) オルフェウス室内管弦
 楽団、スロバキア・フィルハーモニーゾリスデン、ローデリッヒ・クライデ(ドレ
 スデン・フィル室内オーケストラ) チョン・ミュンフン(アジア・フィルハーモ
 ニー管弦楽団) ピエロフリーベック(NHK 交響楽団) プロムシュテット(北ドイ
 ツ放送交響楽団) ハルトムート・ヘンヒェン(ベルリン・パッサ管弦楽団) スタ
 インバーグ、イザベル・ファン・クーレン(NHK 交響楽団) **ミュンヘン・フィル
 ハーモニー管弦楽団、*ウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団**、デュトワ
 (モントリオール交響楽団) **イヴァン・フィッシャー**、**マイクロシュ・ペレーニ**
 (NHK 交響楽団) **ラルフ・ワイケルト**、**チェリル・ステューダー**(NHK 交響楽団)
 スヴェトラーノフ(ロシア国立交響楽団) **マゼール**(フィルハーモニア管弦楽団)
 ドミトリエフ(レニングラード交響楽団) A. デイビス(BBC 交響楽団) スタニ
 スラフ・ガヴォンスキー(クラクフ室内管弦楽団) ヒュー・ウルフ(ジュリア
 ード音楽院オーケストラ) イルジー・コウト、フランソワーズ・ボレ、ハンス・ゾ
 ーティン、イヴァン・モラベッツ(NHK 交響楽団) ヤン・シュティフ(ブルノ
 国立歌劇場管弦楽団) レバイン、ドミンゴ(メトロポリタン歌劇場管弦楽団) **ヒル
 デガルト・ペーレンス&アンナ・トモワ=シントウ**、ハンガリー国立ブタベスト・
オペレッタ劇場公演(ラースロー・マクラーリ、カロチャイ・ジュジャ他) シ
 ュトゥットガルト室内管弦楽団、ヤルヴィ(エーテポリ交響楽団) デュトワ(NHK

交響楽団) トーマス、エッセンパッサ(*ロンドン交響楽団)、ゲバントハウス・パッサ・オーケストラ、ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、シュワルツ(モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団)、ピエロフラーベック(ブラハ交響楽団)、ブラッソン(ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団)、ケント・ナガノ(リヨン歌劇場管弦楽団)、ホリア・アンドレースク(ルーマニア国立放送管弦楽団)、ワルター・コベラ(ウィーン・ノイエ・オペラ管弦楽団)、ヴォイチェフ・ライスキ(ポーランド室内管弦楽団)、ハラルド・ネラート(ザルツブルク室内オーケストラ)、スヴェトラノフ(NHK 交響楽団)、ベルナルド・ハイティンク(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団)、クラウス・ベーター・フロール、アン・アキコ・マイヤース(ウィーン交響楽団)、ズピン・メータ(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団)、*ブルゴス(ベルリン放送交響楽団)、トーマス(サンフランシスコ交響楽団)、チョン・ミュンフン(ローマ・サンタチェチーリア・アカデミー管弦楽団)、ロベルト・スタンコフスキー(スロバキア国立放送交響楽団)、スーク室内オーケストラ、オラ・ルトナー(フィルハーモニア・ウィーン)、フィンランド・クオピオ交響楽団、フランツ・リスト室内管弦楽団、キタエンコ、アンドレ・ワッツ(NHK 交響楽団)、バレンボイム(ベルリン国立歌劇場管弦楽団)、マルカ、ヴァーレク(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団)、レイナルド、イワン・アンゲロフ(スロバキア国立歌劇場管弦楽団)、ジンマン(ポルティモア交響楽団)、ウラディーミル・フェドセーエフ(*モスクワ放送交響楽団)、コルト(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団)、モスクワ・シアター・オペラ管弦楽団、ハンスイエルグ・シェレンベルガー(イタリア・パドヴァ交響楽団)、クリヴィヌ(ヨーロッパ室内管弦楽団)、ルーマニア室内管弦楽団、グラント・レウェリン(ベルギー王立フィルハーモニー管弦楽団フランダース)、サバリッシュ、トーマス・ハンブソン、ジュラー・カウフマン、マーク・ベスカノフ(NHK 交響楽団)、アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団)、ビーブル(ウィーン国立フォルクスオペラ管弦楽団)、タイマー(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ)、デュトワ、ジャン・イヴ・ティボーデ、ハンナ・チャン、ピンカス・ズーカーマン(NHK 交響楽団)、ユーリ・ニコライエフスキー、アーノルド・カーツ(ノヴォシビリスク・フィルハーモニー管弦楽団)、エヴァ・ポブウォツカ、ニコライ・トカレフ、ハーゲン弦楽四重奏団、チェコ・フィルハーモニー八重奏団、マレク・ドレグノフスキー、ウィーン・ヴィルティオーゾ、ベーター・グート(ウィーン・フォルクスオペラ交響楽団)、エルンスト・オッテンザマー(ウィーン・モーツァルト・オーケストラ)、エリック・カンゼル(シンシナティ・ポップス・オーケストラ)、ブラハ国立歌劇場公演

1998 平成 10 年

ヨハネス・ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル)、*ウィーン・リング・アンサンブル、エシュベ(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団)、ミヒャエル・トマシェック(ウィーン・シュトラウス・カペレ)、ヴィリー・ピュッヒラー(ウィーン・シュトラウスフェスティバル・オーケストラ)、シノポリ(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団)、ハンガリー国立ブタベスト・オペレッタ劇場公演(マクラリー・ラースロー他)、ブラハ国立歌劇場管弦楽団、ハンス・ドレパンツ、ドリス・ゾッフエル、ロバート・ガンビル、スタニスラフ・ブーニン(NHK 交響楽団)、ティーレマン、デイスカウ(ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団)、キタエンコ(ベルゲン・フィルハーモニー管弦楽団)、ブラハ・ターリッヒ・オーケストラ、シュタイン(NHK 交響楽団)、ウト・ウギ(聖チェチーリア室内管弦楽団)、ブリュッヘン(18世紀オーケストラ)、ミュンフン(アジア・フィル

ハーモニー管弦楽団)、デュトワ、ゲルバー他(NHK交響楽団)、ウルフ・シルマー、ジャン・フィリップ・コラル、アラン・ギルバート、アンヌ・ケフェレック、準・メルクル、スティーブン・コワセヴィチ(NHK交響楽団)、C.デビス(*ロンドン交響楽団)、M.ヤンソンス(ピッツバーグ交響楽団)、ラトル(バーミンガム市交響楽団)、**アン・アキコ・マイヤース**、ドホナーニ(クリーヴランド管弦楽団)、ペドロ・イグナチオン・カルデロン(アルゼンチン国立交響楽団)、サロネン(フィルハーモニア管弦楽団)、マンチェスター室内管弦楽団、ロラン・ワグナー(ザール州立歌劇場管弦楽団)、ルドルフ・ヴェルテン(ベルギー室内管弦楽団)、エヴァルト・ダルネ(ドボルザーク室内オーケストラ)、***アンドレ・ブレビン**(NHK交響楽団)、シャオ・チウ・リウ(ベルリン・コミッシェ・オパー管弦楽団)、***クルト・マズア**(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団)、ハインツ・ヘルベルク(ウィーン・オペレッタ劇場管弦楽団)、**アントルモン**(イスラエル室内管弦楽団)、ファヴィオ・ルイジ(ウィーン・トーンキュストラ管弦楽団)、エルンスト・コヴァチッチ(ウィーン室内管弦楽団)、ヴァーレク(プラハ放送交響楽団)、コジュハリー(キエフ・オペラ・バレエ管弦楽団)、コープマン(アムステルダム・バロック・オーケストラ)、スタニスラフ・ガヴォンスキー(クラクフ室内管弦楽団)、チクロヴァ交響楽団、ワルベルク、ギル・シャハム、マイスキー、ヘブラー(NHK交響楽団)、ミュンフン(ローマ聖チェチーリア・アカデミー管弦楽団)、グート(ウィーン国立フォルクスオパー管弦楽団)、ローランド・バーダー(マーストリヒト交響楽団)、プラハ室内オペラ、シュワルツ(モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団)、ムーティ(スカラ・フィルハーモニー管弦楽団)、ミネソタ管弦楽団、ガッティ(ボローニャ市立歌劇場管弦楽団)、ビシュコフ(ケルン放送交響楽団)、ハインツ・ハルテル・ブリギッテ(バーデン市立劇場管弦楽団)、ミュンフン、ヴァンゲロフ、ヤノフスキー、ザビーネ・マイヤー(NHK交響楽団)、アバド(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)、**マゼール**(イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団)、アシュケナージ(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団)、**ホルスト・シュタイン**(バンベルク交響楽団)、**ギュンター・ピヒラー**(ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団)、ヤーノシュ・コパーチ(ハンガリー国立歌劇場管弦楽団)、パイヤール室内管弦楽団、ハイコ・マティアス・フェルスター(ブランデンブルク交響楽団)、ヴィクトル・ティーツ(ロシア極東交響楽団)、ポフダン・ヴァルハル(スロバキア室内オーケストラ)、クリストファ・ウォレン・グリーン(ロンドン室内オーケストラ)、ジリナ室内管弦楽団、プロムシュテット、スウェーデン放送合唱団他(NHK交響楽団)、プレートル(パリ管弦楽団)、***ライナー・キユツヒル**、プレートニョフ(ロシア・ナショナル交響楽団)、ヘルムート・ブラーニ、シュライヤー(ドレスデン国立歌劇場室内管弦楽団)、ハンガリー国立交響楽団、**チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団**、ネーヴェ・ヤルヴィ(デトロイト交響楽団)、ヤーノシュ・コパーチ(ブタベスト・フィルハーモニー管弦楽団)、フィリップ・ヘレヴェッヘ(シャンゼリゼ管弦楽団)、ローマン・コフマン(キエフ室内管弦楽団)、ウラディミール・ジイバ(モスクワ管弦楽団)、ザウリス・ゾンデツキ(サンクトペテルブルク室内管弦楽団)、ルーマニア国立放送室内管弦楽団、クリストフ・ポッペン(ミュンヘン室内オーケストラ)、**サバリッシュ**他(NHK交響楽団)、ゲルギエフ(キーロフ歌劇場管弦楽団)、アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団)、ヤノフスキー(フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団)、ターフェルムジーク・バロック・オーケストラ、ウト・ウギ(ローマ室内管弦楽団)、デュトワ他(NHK交響楽団)、アッシャー・フィッシュ(ウィーン国立フォルクス

1999 平成 11 年

オペラ管弦楽団) タイマー(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ) ニコライ・トカレフ、エリザベータ・スーシェンコ、メロス弦楽四重奏団、アントルモン(イスラエル室内管弦楽団) *カール・ズスケ、コンバッティメント・コンソート・アムステルダム、エリック・カンゼン(シンシナティ・ポップス・オーケストラ) ビーブル(ウィーン・フォルクスオペラ管弦楽団) オペラ・アトリエ、プラハ室内オペラ

ヴィリー・グュッヒラー(ウィーン・シュトラウスフェスティバル・オーケストラ) *ウィーン・リング・アンサンブル、エシュベ(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル) エルンスト・オッテンザマー(ウィーン・モーツァルト・オーケストラ) 3大テナー(ルチアーノ・パヴァロッティ、プラシド・ドミンゴ、ホセ・カレーラス) ヤーノシュ・コバーチ、ゲルゲイ・カボシ(ハンガリー国立歌劇場管弦楽団) ウィーン・カンマーオペラ、ダニエル・ハーディング(マーラー室内管弦楽団) スクロパチェフスキー、ギャリック・オールソン他(NHK交響楽団) F.P.ツインマーマン(イギリス室内管弦楽団) スラトキン(ナショナル交響楽団) プラソン(トゥールズ・キャピトル国立管弦楽団) マクラーリ・ラーズロー(ハンガリー国立ブタペスト・オペレッタ劇場管弦楽団) スヴェトラノフ、ニコライ・ペトロフ(NHK交響楽団) ムーティ(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団) ハインリッヒ・シフ(ウィーン放送交響楽団) *ユストス・フランツ(ダビドフ・フィルハーモニー管弦楽団) デュトワ、シャントル・ジュイエ(NHK交響楽団) ザバリツシュ(フィラデルフィア管弦楽団) ポストン交響楽団、プロムシュテット(ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団) ファヴィオ・ルイジ(スイス・ロマンド管弦楽団) *イエルク・デムス(ロイヤル・メトロポリタン管弦楽団) クリヴィヌ(リヨン管弦楽団) *イエルク・デムス、北西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団、シュトゥットガルト室内管弦楽団、オルフェウス室内管弦楽団、ホグウッド(エンシェント室内管弦楽団) *アンドレ・ブレビン他(NHK交響楽団) ジンマン(チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団) ユベール・スーダン(*ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団) フェドセーエフ(*モスクワ放送交響楽団) オーレ・クリスティアン・ルード(ストックホルム室内オーケストラ) ヤン・ズバピテル(ブルノ国立歌劇場管弦楽団) ザハール・ブロン、ラスヴァン・チェルナット(ルーマニア国立歌劇場管弦楽団) デュトワ(モントリオール交響楽団) ガッティ(ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団) アッシャー・フィッシュ(ウィーン国立フォルクスオペラ管弦楽団) サラステ(フィンランド放送交響楽団) ベルリン古楽器アカデミー・オーケストラ、スタニスラフ・ガヴォンスキー(クラクフ室内管弦楽団) ルーマニア・トランシルヴァニア室内管弦楽団、ターリッヒ室内オーケストラ、ベルリン室内管弦楽団、ゾンデツキ(リトアニア室内管弦楽団) ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、シュワルツ(モーストリー・モーツァルト祝祭管弦楽団) 李心草(中国国立交響楽団) フルネ(スーパー・ワールドオーケストラ) クリスティアン・ポーラック(バーデン市立劇場管弦楽団) トゥールズ室内管弦楽団、マレック・セヴァン(ワルシャワ室内オーケストラ) アリ・ヴァン・ベーク(オヴェールニュ室内オーケストラ) デュトワ、スウェーデン放送合唱団他(NHK交響楽団) テミルカーノフ(サンクト・ペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団) サラステ(フィンランド・ラハティ交響楽団) *イエルク・デムス、ケント・ナガノ(ベルリン・ドイツ交響楽団) ピエロフラーベック、クリンスキー(プラハ国民歌劇場管弦楽団) ケント・ナガノ(ハレ管弦楽団) ピエロ

フラーベック（ブラハ・フィルハーモニー管弦楽団）、ハノイ国立音楽院管弦楽団、アニマ・エテルナ・オーケストラ、ゲルト・アルブレヒト（ブラハ室内管弦楽団）、ルーマニア国立放送室内管弦楽団、ポーランド・チェンバー・オーケストラ、ドボルザーク室内オーケストラ、スーク室内オーケストラ、イルジー・コウト、ヤーノシュ・シュタルケル（NHK 交響楽団）、アシュケナージ（チェコ・フィルハーモニー管弦楽団）、スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団、スビグニェフ・グラツァ（ワルシャワ室内歌劇場管弦楽団）、**トレヴァー・ピノックと仲間たち（レイセル・ボジャー、ジョナサン・マンソン）**、アントニ・ヴィット（ポーランド国立放送交響楽団）、ヨザス・ドマルカス（リトアニア室内管弦楽団）、***ウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団**、ハンガリー室内オーケストラ、**サバリッシュ**、トーマス・ハンブソン（NHK 交響楽団）、イタリア室内オーケストラ、タイマー（ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ）、アニハーフ（レニングラード国立歌劇場管弦楽団）、デュトワ、ナンシー・アレン・ランディー（NHK 交響楽団）、リヒャルト・エドリンガー（ウィーン国立フォルクスオパー管弦楽団）、エヴァ・ポプウォツカ、ディートリッヒ・ヘンシェル、チェコ・フィルハーモニー八重奏団、マレク・ドレグノフスキー、ウィーン・ヴィルティオーゾ、ウィーン・ピアノ・トリオ、ロシア国立バラライカ民族楽器オーケストラ、アッシャー・フィッシュ（ウィーン・フォルクスオパー管弦楽団）

2000 平成 12 年

エシュベ（ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団）、ゲルギエフ（キーロフ歌劇場管弦楽団）、ルドルフ・クレチメル、リハルト・ハイン、マルコ・パーチェ（ブラハ国立歌劇場管弦楽団）、シノポリ（ドレスデン国立歌劇場管弦楽団）、ヴィリー・ビュッヒラー（ウィーン・シュトラウスフェスティバル・オーケストラ）、ヨハネス・ヴィルトナー（ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル）、サカドロ・クトゥレーロ（ウィンナ・ワルツ・オーケストラ）、マティアス・バーメルト（ロンドン・モーツァルト管弦楽団）、コンラート・アルトミュラー（ウィーンの森メートリンク交響楽団）、**ハンガリー国立ブタベスト・オペレッタ劇場公演（マクラーリ・ラースロー、ヴァーラティ・カタリン、カロチャイ・ジュジャ他）**ハンガリー室内管弦楽団、ハンス・ブリュッヘン（18 世紀オーケストラ）、イヴァン・フィッシャー、ジェルジ・パウク、ジェームス・エーネス（NHK 交響楽団）、メータ（イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団）、シャイ（ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団）、ミュンフン（フランス国立管弦楽団）、アシュケナージ（フィルハーモニア管弦楽団）、フェドセーエフ（ウィーン交響楽団）、スラトキン、パメラ・フランク、ジョン・ブラウニング、スティーブン・イッサーリス（NHK 交響楽団）、ボリス・モノソン（ブラハ室内オーケストラ）、ゲオルグ・クリストフ・ピラー（ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団）、**アントルモン（オランダ室内管弦楽団）**、***イエルク・デムス（東京ニュー・シティー管弦楽団）**、ゲルギエフ（ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団）、インバル、ドミトリー・シトコヴェツキ、セルゲイ・アレクサーシキン（NHK 交響楽団）、***エッシェンバッツハ（北ドイツ放送交響楽団）**、***イエルク・デムス**、ジョルジョ・ベルナスコーニ（トスカニーニ交響楽団）、I. フィッシャー（ブタベスト祝祭管弦楽団）、デイビット・ロバートソン（NHK 交響楽団）、アラン・ギルバート、デュトワ（NHK 交響楽団）、リチャード・ボニング、グアダーニョ（モンテカルロ歌劇場管弦楽団）、**カナディアン・バロックオペラ公演（アンドリュウ・パロット）**、ワルター・ウェラー（ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団）、パイヤール室内管弦楽団、クリストフ・エーバレー（ウィーン室内管弦楽団）、ハインツ・ヘルベルク（ウィーン・オペレッ

夕劇場管弦楽団) ローランド・バーダー(クラクフ室内管弦楽団) アルノシュト・モウリーク(ブラハ・オペレッタ劇場管弦楽団) ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、コジュハーリ(キエフ・オペラ・バレエ管弦楽団) ディルク・ブロッセ、ヤーヤ・リン(スーパー・ワールドオーケストラ) ペトル・ブロンスキ(ヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団) ムーティ(ミラノ・スカラ座管弦楽団) トヌ・カリユステ(タリン室内管弦楽団) トルコ国立イズミール交響楽団、クリスティアン・ポーラック(モーツァルティアーデ管弦楽団) スヴェトラーノフ(NHK 交響楽団) アユケナージ(NHK 交響楽団) マゼール(バイエルン放送交響楽団) *ブルゴス(ベルリン放送交響楽団) インバル(フランクフルト放送交響楽団) ピノック(イングリッシュ・コンソート) ミッコ・フランク(パンベルク交響楽団) フランツ・リスト室内管弦楽団、オバールフランク、パール・タマーシュ(ハンガリー国立歌劇場管弦楽団) シノポリ、カンパネルラ、準メルクル(ウィーン国立歌劇場管弦楽団) ハイデルベルク・フィルハーモニー管弦楽団、クリヴィヌ(ヨーロッパ室内管弦楽団) レフ・オソフスキー、アナトリ・レーピン(モスクワ・シアター・オペラ管弦楽団) コーブマン(アムステルダム・バロック・オーケストラ) クリストフ・ボッペン(ミュンヘン室内オーケストラ) ミシェル・コルボ(フライターク・アカデミー室内管弦楽団) アバド、ヤンソンス(ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団) ポロディン弦楽四重奏団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ギュンター・ヴァント(北ドイツ放送交響楽団) コルト(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団) ヤーヴ・ヴァン・ズヴェーデン(ハーグ・レジデンティ管弦楽団) ユハ・カンガス(オストロボスニア室内オーケストラ) スタニスラフ・ゴルゴヴェンコ(サンクトペテルブルク放送交響楽団) ヴァーレク(ブラハ放送交響楽団) ヤーノシュ・コバーチュ(ブタベスト・フィルハーモニー管弦楽団) ルドルフ・ヴェルテン(ベルギー室内管弦楽団) *イエルク・デムス、サンドロ・クトゥレーロ(ブラハ・モーツァルト・オーケストラ) ジョルジョ・ブロイエッティ(ソフィア国立歌劇場管弦楽団) エマニュエル・クリヴィヌ、ナタリー・シュトゥツマン、アンチレアス・デルフス、ゲルバー、オリバー・ナッセン、ギル・シャハム(NHK 交響楽団) ドミトリエフ(サンクトペテルブルク交響楽団)、コチシュ(ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団) アニハーノフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) グート(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ) チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団、ビーブル(ウィーン国立フォルクスオパー管弦楽団) ロレンツォ・カストリオータ・スカンダーベッグ(ローマ・フィルハーモニー室内管弦楽団) デュトワ、トルルス・モルク、レオニダス・カヴァコス(NHK 交響楽団) ハンガリー国立ブタベスト・オペレッタ劇場管弦楽団、スザンナ・ミルドニアン、ミリヤム・コンツェン、マクサンス・ラリユー、メロス弦楽四重奏団、チェコ・フィルハーモニー六重奏団、アフラートゥス・クインテット・ブラハ、ウィーン・シュランメル、レ・ヴィヴァルディアーネ合奏団、リヒャルト・エドリンガー(ウィーン・フォルクスオパー管弦楽団) ウィーン・フォルクスオパー・サロンオーケストラ、オペラ・アトリエ タイマー(ウィーン国立歌劇場舞踏会オーケストラ) ヤーチェク・カスプシェク(ポーランド国立歌劇場管弦楽団) カサドロ・クトゥレーロ(ウィンナ・ワルツ・オーケストラ) *ウィーン・リング・アンサンブル、マルティン・ジークハルト(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) ミヒヤエル・トマシェック(ウィーン・シュトラウス・カペレ) クルト・シュミット(ウィーン・シュトラウス・ガラ・オーケストラ) グート(ウィーン交響楽団)ヨハン・シュトラウスアン

2001 平成 13 年

サンプル) ピエロフラベック(ブラハ交響楽団) **ブラハ国立歌劇場公演(ジョルジョ・クローチ、ボフミン・クリンスキー、ヤン・ハルベッキ他)** ミュンフン(アジア・フィルハーモニー管弦楽団) ボフダン・ヴァルハル(スロバキア室内オーケストラ) マレック・セヴェン(ワルシャワ交響楽団) マリオ・コシュク(ドボルザーク室内オーケストラ) 準・メルクル、ヘブラー(NHK 交響楽団) タマーシュ・バーシャリ(ハンガリー放送交響楽団) **ロストロポーヴィチ(*ロンドン交響楽団)** デュトワ、エマニュエル・アックス(NHK 交響楽団) メータ(フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団) E.オッテンザマー(ウィーン・ゾリスデン・カンマーオーケストラ) ブルガリア室内オーケストラ、ルーマニア・トランシルヴァニア室内管弦楽団、ルーマニア室内管弦楽団、プロムシュテット(NHK 交響楽団) ミュンフン(ローマ・サンタチェチーリア・アカデミー管弦楽団) ウラディミール・スピヴァコフ(ロシア・ナショナル交響楽団) **クレメラータ・バルティカ室内管弦楽団、ジェシー・ノーマン、サバリツシュ(フィラデルフィア管弦楽団)** レヴァイン、アンドリュー・デイビス(メトロポリタン歌劇場管弦楽団) オルフェウス室内管弦楽団、チェコ・ブラハ交響楽団、バーダ(ポーランド国立クラクウ室内管弦楽団) ワルベルク、ブリギッテ・ハーン、ジョアン・クオン、アラン・ギルバート(NHK 交響楽団) **フェニーチェ歌劇場公演(イザーク・カラブチェフスキー、ディミトラ・テオドッシュー他)** フェドセーエフ(*モスクワ放送交響楽団) アントニー・ロス・マルバ(スペイン王立セビリヤ交響楽団) シュトゥットガルト室内管弦楽団、ゲバントハウス・バッハ・オーケストラ、ヤロスラフ・キズリンク、ヤン・ズヴァピテル(ブルノ国立歌劇場管弦楽団) ホグウッド(エンシェント室内管弦楽団) デュトワ、スティーブン・ハフ、イエフィム・ブロンフマン、トルルス・モルク、ハンナ・チャン、ボリス・ベルガメンシコフ(NHK 交響楽団) アシュケナージ(フィルハーモニア管弦楽団) アンドレイ・ニハーノフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) ルスラン・ライチェフ(ソフィア国立オペレッタ劇場管弦楽団) ジーグフリート・アンドラシェク(ウィーン・オペレッタ管弦楽団) クルト・レーデル(ブラハ・プロアルテ室内管弦楽団) メータ(バイエルン国立歌劇場管弦楽団) **マゼール(スーパー・ワールドオーケストラ)** レイフ・セイゲルスタム(ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団) フィリップ・ヘレヴェッヘ(ロイヤル・フランダース・フィルハーモニー管弦楽団) クリステイアン・ポーラック(バーデン市立歌劇場) アンドレア・マルコン(ヴェニス・バロック・オーケストラ) 準・メルクル、クラウディオ・ボルケス(NHK 交響楽団) ラトル(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団) ***マズア(*ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団)** ラドゥ・ルプー(イギリス室内管弦楽団) テミルカーノフ(サンクト・ペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団) ミシェル・プラソン(トゥールズ・キャピトル国立管弦楽団) ヤン・クレンツ(ポーランド国立放送交響楽団) ヴァーレク、ドホナーニ(チェコ・ナショナル交響楽団) スーク室内オーケストラ、サウルス・ゾンデツキ(リトアニア室内管弦楽団) **サバリツシュ**、マリアーナ・リボグシェク、F.P.ツインマーマン(NHK 交響楽団) アシュケナージ(チェコ・フィルハーモニー管弦楽団) カジミエシュ・コルト(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団) プレートル(パリ管弦楽団) インバル(ベルリン交響楽団) **ベルリンフィル・ヴィルティオーゾ**、エンリコ・ドヴィゴ、カルロス・カルマー(ザクセン=アンハルト歌劇場管弦楽団) サンドロ・クトゥレーロ(イタリア・ベネチア室内管弦楽団) フランクフルト交響楽団、キース・パークルス(マレーシア・フィルハーモニー管弦楽団) ハイコ・マティアス・フェルスタ

ー(ミュンヘン交響楽団) ハーディング(ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団) ネルロ・サンティ、ジョルジョ・チュブリアン、アドリアーナ・マルフィージ(NHK 交響楽団) アンドレイ・アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) ヘルムート・ブランニ(ドレスデン国立歌劇場室内管弦楽団) デュトワ、ジャンス・チャンドラー、ワディム・レーピン他(NHK 交響楽団) ギュンター・ノイホルト(ウィーン国立フォルクスオペ管弦楽団) サラ・ミネモト、ディートリッヒ・ヘンシェル、チェコ・フィルハーモニー八重奏団、レギーナ・レンツォーヴァ・トリオ、ウィーン・ヴィルティオーゾ、**ブラハ・バロックアンサンブル**、ウィーン・フォルクスオペ交響楽団、ウィーン・オペレッタ管弦楽団、**ブダペスト・オペレッタ公演**

2002 平成 14 年

ヨハネス・ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル) ヴィリー・ビュッヒラー(ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ) ***ウィーン・リング・アンサンブル**、タイマー(ウィーン・オペラ舞踏会管弦楽団) サンドロ・クトゥレーロ(ウイナー・ワルツ・オーケストラ) **ジュームス・ロックハート(新交響楽団)**、マルティン・ジークハルト(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) トマシェック(ウィーン・シュトラウスカペレ) ピエロフラベック(ブラハ・フィルハーモニー管弦楽団) アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) パレンボイム(ベルリン国立歌劇場管弦楽団) パーヴォ・ヤルヴィ他(NHK 交響楽団) コパーチュ(ハンガリー国立歌劇場管弦楽団) **ハンガリー国立ブダペスト・オペレッタ歌劇場公演(カルツァイ・ジュジャ他)**、フェドセーフ(ウィーン交響楽団) オッテルガマー(ウィーン・モーツァルト・オーケストラ) ヤンソンズ(ピッツバーグ交響楽団) **プロムシュテット(ライブツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団)**、セバステイアン・ヴァイグレ、デュトワ他(NHK 交響楽団) ブラハ室内管弦楽団、ミュンフン(フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団) 3大テナー(ルチアーノ・パヴァロッチ、プラシド・ドミンゴ、ホセ・カレーラス) スクロヴァチェフスキー、コンスタンティ・クルカ(NHK 交響楽団) コンロン(ドレスデン国立歌劇場管弦楽団) **スポレート実験オペラ劇場公演(レオナルド・ガレアツィ他)**、ベルギー王立音楽院室内オーケストラ、マリオ・コシユク(ドボルザーク室内オーケストラ) マレイア・ペライア(アカデミー室内管弦楽団) ゲルギエフ(キーロフ歌劇場フィルハーモニー管弦楽団) ***イエルク・デムス**、スダーン(***ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団**)、アグスティアン・レオン・アラ(ロドリゴ室内管弦楽団) ダニエル・ガッティ(ポーロニャ市立歌劇場管弦楽団) アシュケナージ(イタリア・パドヴァ管弦楽団) ハンガリー室内オーケストラ、キタエンコ(KBS 交響楽団) アラン・ギルバート、ステイブン・オズボーン、トーマス・ツェートマイヤー、スコダ(NHK 交響楽団) アレクセーフ(サンクトペテルブルク・フィル室内オーケストラ) ***マズア**(ニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団) ローランド・バーダ(ポーランド国立クラクウ室内管弦楽団) ゲオルク・アレクサンダー・アルブレヒト(ワイマール国立歌劇場管弦楽団) ウィーン・オペレッタ劇場管弦楽団、**マゼニル**、ミッコ・フランク(スーパー・ワールドオーケストラ) 郭昇(ソウル・フィルハーモニックオーケストラ) デュトワ、ラン・ラン、エマニュエル・アックス(NHK 交響楽団) イヴァン・フィッシャー(ブダペスト祝祭管弦楽団) アンドレイ・アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) アレクサンドル・ヴェデルニコフ(ロシア・フィルハーモニー管弦楽団) カルリーン・ブラハ・オペレッタ劇場、D.ヒメネス、H.フリッケ、ゲルギエフ(ワシントン・ナショナル歌

劇場) アレクセーエフ(サンクト・ペテルブルクフィル室内オーケストラ) ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、ムーティ(スカラ・フィルハーモニー管弦楽団) サカモ・オラーリ(バーミンガム市交響楽団) テミルカーノフ(ボルティモア交響楽団) ロン・ユイ(中国フィルハーモニックオーケストラ) リ・シンサオ(中国国家交響楽団) バンコク交響楽団、イム・ハンジョン(プチョン・フィルハーモニー管弦楽団) ルジェロ・バルビエーリ(フィリピン・フィルハーモニック管弦楽団) ハイコ・マティアス・フェルスター、V.シムキン、シモノフ(モスクワ・フィルハーモニー交響楽団) ポーラック(モーツァルティアード管弦楽団) ロシア・ポリショイ交響楽団、マイケル・クリスティ(クィーンズランド管弦楽団) マルク・ミンコフスキー(マラー・チェンバー・オーケストラ) ブラハ室内オーケストラ、デュトワ他(NHK 交響楽団) エヴァルト・ダネル(スロバキア室内オーケストラ) チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団、ヒュー・ウルフ(フランクフルト放送交響楽団) アシュケナージ(フィルハーモニア管弦楽団) ヘンヒェン(ベルリン・バツハ管弦楽団) リオール・シャンパター(ベルリン交響楽団) ブーレーズ(*ロンドン交響楽団) コルト(ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団) ヴィル・フンブルグ(ハンガリー国立歌劇場管弦楽団) クリスティアン・マンデル(ブカレストフィルハーモニー管弦楽団) チェコ・ブラハ管弦楽団、ヨアフ・タルミ(NHK 交響楽団) ヤルヴィ(エーテポリ交響楽団) ワレリー・ギルギエフ(キーロフ歌劇場管弦楽団) シャー(ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団) カジメシュ・コルト(ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団) アシュケナージ、クライツベルク(チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団) ヤーノシュ・コバーチュ(ブタベスト・フィルハーモニー管弦楽団) マルコ・ポーニ(アムステルダム・コンセルトヘボウ室内管弦楽団) ギャウロウ(ソフィア国立歌劇場管弦楽団) ワルシャワ室内歌劇場管弦楽団、クルト・レーデル(ブラハ・プロアルテ室内管弦楽団) ルーマニア国立放送室内管弦楽団、サバリッシュ、レオニダス・カヴァコス、ワレリー・ゲルギエフ(NHK 交響楽団) パイヤール室内管弦楽団、アニハーフ(レニングラード国立歌劇場管弦楽団) **ハンガリー国立ブタベスト・オペレッタ劇場公演**、サロネン、デュトワ(NHK 交響楽団) アッシャー・フィッシュ(ウィーン・フォルクスオパー管弦楽団) マルティヌー弦楽四重奏団、メロス弦楽四重奏団、プロアルテ・アンティクア・ブラハ、ブラハ室内管弦楽団、ウィーン・フォルクスオパー・モーツァルト・アンサンブル、サンタ・ジブシー・スーパー・アンサンブル、ウィーン・フォルクスオパー・サロンオーケストラ、**チェコ・フィルハーモニー室内管弦楽団**、コンパッティメント・コンソート・アムステルダム、ウィーン・モーツァルト・オーケストラ、ウィーン・フォルクスオパー交響楽団

2003 平成 15 年

ヴィリー・ピュッヒラー(ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ) ジークハルト(ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団) タイマー(ウィーン・オペラ舞踏会管弦楽団) ヴィルトナー(ウィーン交響楽団ヨハン・シュトラウスアンサンブル) ウィンナー・ワルツ・オーケストラ、ミクローシュ・セントハイ(ハンガリー室内オーケストラ) マカール(ブラハ交響楽団) **ブラハ国立歌劇場公演**(ペーター・フェラネツ、ヘレナ・カウボヴァー他)、ヤーチェク・カスプッシュェック(ポーランド国立放送交響楽団) クトゥレーロ(ウィンナー・ワルツ・オーケストラ) イルジー・コウト、ミクローシュ・ペレーニ、スーザン・オウエン、アルフォンス・エーベルツ、フルーデ・ウルセン(NHK 交響楽団) ペトロ・ブロンスキー(ヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団) ペーター・

チャパー（リヨン・コンセルバトワール室内管弦楽団）、アンドレア・マルコン（ベニス・バロックオーケストラ）、ブロムシュテット、ゲルバー、イモジェン・クーパー（NHK 交響楽団）、モスクワ室内歌劇場管弦楽団、カーク・トレヴァー（スロバキア国立放送交響楽団）、マゼール（バイエルン放送交響楽団）、ブルーーズ（グスタフ・マーラー・ユージェント・オーケストラ）、デュトワ、フレイレ（NHK 交響楽団）、*クリストフ・エッセンバッハ（北ドイツ放送交響楽団）、バーダー（クラクフ室内管弦楽団）、シンフォニア・ワルソヴィア管弦楽団、ピシュコフ（ケルン放送交響楽団）、オーレン、バルチェッローナ（トリエステ・ジュゼッペ・ベルディ歌劇場）、ワシーリ・シナイスキー、ダビッド・ゲリンガス、クシシュトフ・ベンデレツキ、ジャンタル・ジュイエ、ネロ・サンティ、アドリアーナ・マルフィージ、ヤーナ・ムラゾワ、ミロ・ソルマン他（NHK 交響楽団）、*ブルゴス（イタリア国立放送交響楽団）、ドミトリエフ（サンクトペテルブルク交響楽団）、ヘルヴィッヒ（ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団）、コチシュ（ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団）、ポストック、レオツシュ・スワロフスキー（スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団）、シュトゥットガルト室内管弦楽団、レンツェティ（カターニア・ベッリーニ大劇場）、ブルノ歌劇場管弦楽団、エーバーレ（ウィーン室内管弦楽団）、オルフェウス室内管弦楽団、デイビッド・ロイドホジョーンズ（ドボルザーク・シンフォニーオーケストラ）、マティアス・バーメルト、ミシェル・ダルベルト（NHK 交響楽団）、ゲオルグ・チチナゼ（サンクトペテルブルク室内管弦楽団）、デュトワ、ジークフリード・イエルザレム他（NHK 交響楽団）、ハイティング、ザンデルリンク（スーパー・ワールドオーケストラ）、ニューヨーク・シンフォニックアンサンブル、ジークフリード・アンドラシェック（ウィーン・オペレッタ管弦楽団）、シュトゥルンツ（チェコ国立ブルゼーニュ歌劇場）、ムーティ（ミラノ・スカラ座管弦楽団）、スカラ座室内管弦楽団、ダニエル・ハーディング（マーラー・チェンバー・オーケストラ）、ポーラック（バーデン市立劇場管弦楽団）、ヴァンスカ（フィンランド・ラハティ交響楽団）、ドイツ・マグデブルク歌劇場、トルコ国立イズミール交響楽団、ロシア・シンフォニーオーケストラ、スクロヴァチェフスキー（ザールブリュケン放送交響楽団）、テミルカーノフ（サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団）、イスタンブール交響楽団、ブテンヤハル（モンゴル・フィルハーモニー交響楽団）、ジャッド（ニュージーランド交響楽団）、ラン・シュイ（シンガポール交響楽団）、パク・ウンサン（スウォン・フィルハーモニック管弦楽団）、ヤン・リ（天津交響楽団）、ブラハ国立歌劇場公演（クローチ他）、バレンボイム（シカゴ交響楽団）、ケント・ナガノ（ベルリン・ドイツ交響楽団）、シャイー（ミラノ・ジュゼッペ・ベルディ交響楽団）、ベルリン室内管弦楽団、チェコ・ヴィルトゥーゾ室内オーケストラ、エイジ・オブ・エンライトメント管弦楽団、準・メルクル他（NHK 交響楽団）、クリスティアン・テイーレマン（ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団）、ヤルヴィ（シンシナティ交響楽団）、ジャン・フルネ、クカル（チェコ・フィルハーモニー管弦楽団）、S.ゴルコヴェンコ（サンクト・ペテルブルク放送交響楽団）、ヤノフスキー（ベルリン放送交響楽団）、キーロフ歌劇場公演（ゲルギエフ他）、ユハ・カンガス（オストロボスニア室内管弦楽団）、テリエ・ミケルセン（ラトビア交響楽団）、ズビン・メータ（イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団）、ポリス・ベルキン他（NHK 交響楽団）、スダーン（イギリス室内管弦楽団）、アニハーノフ（レニングラード国立歌劇場管弦楽団）、*イエルク・デムス、ムジカ・ボヘミカ、ヴィンシャーマン（ドイツ・バッハ・ドリスデン）、ルーデル（ウィーンフォルクスオパー管弦楽団）、ザンデル

リンク、ウト・ウギ、マルク・アルブレヒト（NHK 交響楽団） シュターミッツ弦楽四重奏団、ディートリッヒ・ヘンシェル、ウィーン・フィルハーモニア・カペレ、チェコ・フィルハーモニー八重奏団、プラハ・モーツァルティッシモ・アンサンブル、レンツォーヴァ・トリオ、ウィーン・ヴィルティオーゾ、ウィーン・シンフォニア・シュランメル、ウィーン・フォルクスオパー交響楽団、ウィーン・オペレッタ管弦楽団、ハンガリー国立ブタペスト・オペレッタ歌劇場公演（カロチャイ・ジュジャ他）

2. 1. 外来演奏家による公演ジャンルの潮流

上記の調査の結果、図表及び一覧を概観すると、1790年（寛政2年）オランダからファンデンベルヒが来日して以来、2003年に至る213年間で、洋楽史に名を留める主要演奏家の殆どが日本公演を行ったことは明瞭である。

そこで青史を図6に分析・整理し、外来音楽家のジャンル別開催傾向を探り、聴衆のジャンル趣向を浮き彫りにする。

図6

年代	ジャンル別 主要演奏家・公演開催数												
	ピアノ	ヴァイオリン	その他弦ソロ	管楽器ソロ	弦楽四重奏	室内オケ・他	オーケストラ	ブラスバンド	声楽ソロ	合唱	オペラ	指揮	その他
1790									1				
1804								1					
1826													1
1853								1					
1854								1					
1855													1
1860								1					
1863						1		1					
1865								1					
1866								1					
1867								1					
1868								1					
1870								1					
1875									2				
1879											1		
1880		1											
1881		1							1				
1882								1					
1885						1							

1888	1							1				1
1889								1				
1890				1								
1891	1	1										
1893	1	2	1					1			1	
1894	1											
1895	1	1						1				
1896								1				
1899		1										
1901	1	1						1				1
1902												
1903	1							1				
1904												
1905	1	1									1	
1906				1								
1907	3	2	1					3				
1908								1				
1909	4	2	3						2			
1910	1	1										
1911		2	2					2				
1912	2	2	1					1				
1913	3	2						1				
1914												
1915									1			
1916	2	1							1	1		
1918	6	3	2					2				
1919	4	3						3		1		
1920	1		1									
1921	2	1						5		1		
1922	5	3					1	3				
1923	7	4	4							1	1	
1924	4	3						1				
1925	2		1					1		1		
1926	2	2	1					1		2		
1927	6	4	1					1		2	2	
1928	8	3						6			3	
1929	6	6		1				4		1	1	
1930	6	2						1			4	
1931	9	3	1	1				4			3	
1932	6	5						1			3	
1933	4	2						1		1	3	
1934	6	2	2					3			3	
1935	6	3		1				4			4	1
1936	4	4	2					1			4	
1937	3	4	1					1			3	
1938	1	1									1	
1939	1	2	2				1				2	
1940	1	2	1								2	
1941		1									2	

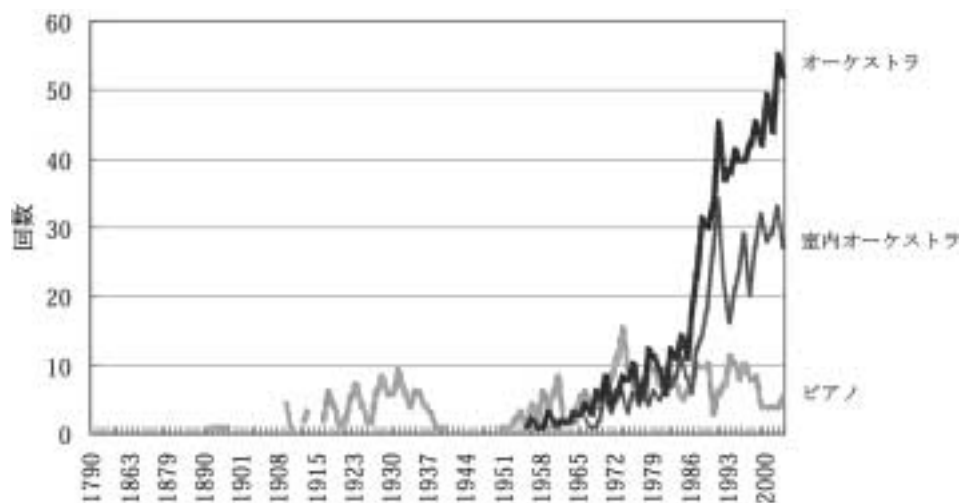
1942	1												5	
1943													3	
1944													2	
1945	1	1											1	
1946														
1947						1								
1948	1													
1949														
1950	1													
1951	1	1											1	1
1952	1					1				2				
1953	2	2	1							1			1	1
1954	3	1	1							2	1		3	
1955	1	1						1			1		2	1
1956	4					1	2				2	1	3	
1957	2	1					1			5	3		2	
1958	6	3	3			2		1		3			7	1
1959	4	5						3		4		2	8	3
1960	6	2	1			1	1	2		2			6	1
1961	8	3	1			1	1	2	1	1		1	4	
1962	2	1				3	2	2					4	1
1963	2					1	2	2		1		2	4	1
1964	2	1			1		2	3			1		7	
1965	5	3			1	2		3				1	5	1
1966	6					1	2	4				1	5	
1967	3	2				1	1	3		1		1	3	
1968	4	1				1	1	6			1		8	
1969	5	1					2	5					6	1
1970	6	1			5		6	8		3		3	17	
1971	8	4	1		1	1	3	4	1	3		1	9	1
1972	11	1	2		5	4	5	6		5			16	
1973	15	3	1		2	2	6	8		4		1	16	1
1974	9	2	1			2	3	8	1	11	1	1	14	1
1975	7				1	1	6	10		6	2	1	13	1
1976	7	1	2			1	4	5				1	7	
1977	5	1	1		3	1	8	7		5	1	2	9	1
1978	10	2			1	1	4	12		1			15	
1979	9	1			2	2	6	11		16	1	3	21	
1980	7	2	2		5	1	5	9		5	1	2	12	1
1981	9	4			2	4	6	6		2	1	2	7	1
1982	8	2			3	1	7	12		2	1	1	16	1
1983	7	8	1		2	2	8	11		5		1	12	1
1984	5	8			1	2	11	14	1	4	1	1	21	
1985	6	1			1	2	8	11		4	2	2	17	1
1986	8	3			3	1	6	19		8	1	2	21	
1987	10	4	1		2	1	12	23	1	5		2	25	1
1988	10	6	2		2	1	14	31		7	1	4	38	
1989	10	7	1		1	2	18	30		8	3	4	36	1
1990	3	5	3		1	1	26	33		13	1	3	45	

1992	7	5	1		1	22	37			1	2	54	
1993	11	4		1	3	16	38		2	1	2	49	1
1994	10	6		2	2	21	41		11		2	42	1
1995	8	3	2		2	23	40		3		2	53	
1996	10	4			3	29	40		3	3	3	59	1
1997	8	4			2	20	42		7		2	53	
1998	8	6	1	1	1	27	45		2	1	4	51	
1999	4	1	1		1	32	42		4	1		45	1
2000	4	4		1	2	28	49				3	59	1
2001	4	3	1		0	29	44		3		3	54	
2002	4	1			2	33	55		1		4	63	
2003	5	1			1	27	52		2		2	55	
計	453	229	59	58	70	530	889	18	242	38	90	1212	35

*室内オケにはトリオ、弦楽合奏を含む。
 *指揮は単独で日本のオーケストラに來演した指揮者、及び海外オーケストラに同行した指揮者の合算数を表わす。
 *オペラは海外歌劇場の引越し公演数を表わすが、指揮者、歌手は各項目にカウントしていない。
 *その他は各ジャンル以外のハーブ、ハーモニカ、ギター等の演奏。

図6が示す通り、コンサートの開催ジャンルは1970年代からオーケストラ、室内オーケストラが圧倒的に増加していることは顕著である。この傾向を図7のグラフに表記すると一層分曉することができる。

図7



2.2. 日本の洋楽ファンの趣向

以上の表が示す通り、日本の音楽ファンの趣向がいかにオーケストラや室内オーケストラに傾斜しているかが解る。この傾向を芸団協出版部刊『芸能白書 2001』の調査によるデータで検証を加えると、更に明瞭となる。

下図は、1999年のホール申告による外来演奏会回数である。

図 8

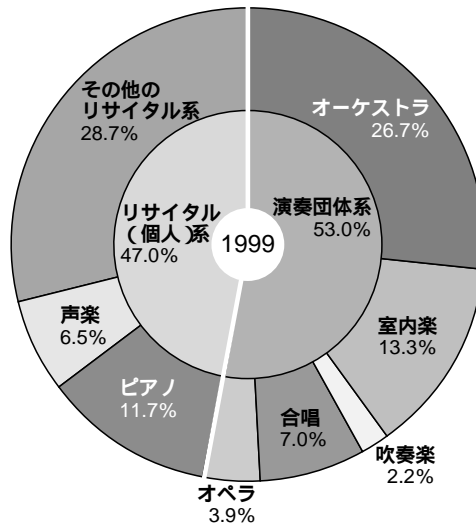
団体		リサイタル	
オーケストラ	481	ピアノ	381
室内楽	655	声楽	125
吹奏楽	37	ヴァイオリン	104
合唱	200	ヴィオラ	6
オペラ	178	チェロ	82
		コントラバス	0
		フルート	23
		クラリネット	19
		オーボエ	4
		トランペット	7
		サキソフォーン	0
		チェンバロ・オルガン	60
		ハープ	1
		マリンバ・打楽器	7

「芸能白書 2001」(芸団協出版部) : 調査

本書で草刈津三氏は「団体の室内楽は音楽上の楽曲様式として定義される純粹の室内楽ではなく、オーケストラにもリサイタルにも分類できない、演奏者10数名から2,3名の種々雑多な演奏のすべてを含むので、明確にジャンルとはいえない。」^(注1)と記述されている。従って図8の室内楽には、図7の室内オーケストラが含まれているものと想察される。また、図8の数字は演奏会回数を示すもので、図7の来日演奏家数とは一致しないが、連関していることは容易に推察できる。

また、こうしたオーケストラ偏重傾向はジャンル別回数比率でも示され、「オーケストラは、常に1位で全体の4分の1台を占め、わが国音楽文化の重要な担い手になっていることが示される」^(注2)とも付記されている。

図 9 (ジャンル別演奏会数比率)



「芸能白書 2001」(芸団協出版部)より

図 9 は団体申告・ホール申告を参考に作成されたもので、邦人・外来演奏家の合算である。更に、外来公演を含むジャンル別推定入場者数を見ると一層顕著となる。

尚、総演奏会回数に対する外来公演の比率は、バブル期の 1989 年が 29.1% とピークで、近年は 23% 前後で安定している。^(注 3)

図 10

	公演回数	推定入場者数	比率
オーケストラ	3,395	3,918,518	51.1%
室内楽	1,688	844,000	11.0%
吹奏楽	278	326,850	4.3%
合唱	887	645,832	8.4%
オペラ	501	436,400	5.7%
リサイタル系	5,974	1,493,500	19.5%
計	12,723	7,665,100	100.0%

「芸能白書 2001」(芸団協出版部)より

1.1. 及び 1.2. の検証に加え、社団法人・日本クラシック音楽事業協会平成 16 年 2 月発行による『クラシック音楽市場拡大の為の調査・研究』による「この 1 年間に鑑賞したジ

ジャンルと回数 > 調査、「一般クラシックファン全体では、国内オーケストラ（57.9 %）と海外オーケストラ（57.6 %）が拮抗しており、室内楽 36.3 %、ピアノソロ 33.9 %が続く。一般クラシックファンのうち、年間鑑賞回数が 3 ~ 6 回のセグメントでは、国内オーケストラが最も多く 53.6 %、海外オーケストラが 48.1 %、室内楽 28.8 %、ピアノソロ 21.2 %であった。このセグメントにおける平均鑑賞回数（そのジャンルを鑑賞した人ごと）が多いのは国内オーケストラ 2.04 回、海外オーケストラ 2.02 回であった。」^(注 4)を考量すると、日本の洋楽ファンの趣向は判然とする。

また、アマチュアオーケストラが社団法人日本アマチュアオーケストラ連盟（JAO）加盟だけで 151 団体に及んでいることは時の趣向とは言え、正にその帰結の一端とも考えられる。

そこで本稿では外来オーケストラ公演に照準を絞り考察を加える。

3. 1. 外来主要オーケストラの入場料

以下に、1956 年のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の来日から 2003 年の同楽団来日に至る迄の 30 数年間に渡る、外来主要オーケストラ 14 団体の来日時に於ける入場料金の推移を調査した（次頁図 11）。

図 11

年号	外実オーケストラ入場料金推移表															
	リファージュ		ベネチア・フィ		ニュー・オー・フィ		フィリッポ・フィ		列・ブランド		シゴ		ネストン		nリ管弦楽団	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
1956	1800	700														
1957			2000	800												
1958																
1959	2900	800														
1960												3000	800			
1961					3000	500										
1962																
1963																
1964																
1965																
1966			4500	1800												
1967							5000	800								
1968																
1969	4500	2000														
1970			6000	2000	4500	2500			4500	2500					4500	3000
1971																
1972							6000	2500								
1973	6500	2500	8000	2000												
1974					7000	3000			5000	3000						
1975	7000	2000														
1976																
1977	12000	4000	15000	3500							12000	4000				
1978					12000	4000	13000	4000	8000	4000			10000	4000		
1979			18000	5000	12000	4000										
			15000	4000												
1980	22000	5000					12000	4000							12000	4000
	17000	4000														
1981			26000	5000									13000	5000		
1982									12000	4000						
1983	18000	5000														
1984			23000	8000	18000	6000									12000	4000
			18000	5000												
1985							15000	4000								
1986	19000	5000	28000	5000							18000	5000	16000	5000		
	21000	5000							15000	5000					18000	5000
1987	24000	5000														
1988			26000	5000												
1989					29000	6000	18000	5000					20000	7000	15000	7000
1990									18000	5000	22000	8000				
1991	22000	12000													16000	6000
															18000	6000
2000	31000	17000														
	29000	19000														

3.2. 公演実施に関わる経費と入場料

音楽愛好家にとって、入場料金が高額であるか低額であるかは、何時の時代も論議的となるところである。特に大掛かりな海外オペラ引越し公演を筆頭に、オーケストラの様な多人数の公演となると、第三者に委ねてもその判断は極めて困難である。

経済的側面から通常のコンサート開催時に発生する収入、支出項目を列挙すると以下の如くである。

年号	外実オーケストラ入場料金推移表											
	ロンドン		チューリッヒ		コンセルトヘボウ		レニングラード		オランダハウス		ハイムン放送	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
1956												
1957												
1958							2000	700				
1959												
1960												
1961									3000	800		
1962					3000	1000						
1963	3000	800										
1964	3000	800										
1965											3000	800
1966												
1967												
1968					3500	1100						
1969			3500	1400								
1970							4500	2500				
1971	4500	2000							4000	2500		
1972												
1973							6000	2500				
1974			6000	3000	5000	3000	5500	2000				
1975	5500	2500					6000	2800	5500	3000	6000	3000
1976			7000	3000								
1977					7000	3000	10000	4000				
1978												
1979			9000	4000			10000	4000	8000	4000		
1980	12000	4000							7000	3000		
1981												
1982			11000	4000								
1983	13000	5000							10000	3000		
1984											13000	4000
1985			12000	3000					13000	4000		
1986					13000	5000	12000	3000				
1987									12000	2500		
1988			13000	4000							13000	4000
1989	15000	5000					14000	5000	17000	8000		
1990	25000	10000							15000	8000		
			16000	6000								
1991			20000	12000	20000	5000					19000	5000
			15000	7000								

主催者の直接的収入

チケット売上、放送料、プログラム収入（売上・広告収入）、協賛金、援助金、その他

主催者の直接的経費・支出

会場費、付帯設備費、PA費、照明費、舞台施工費、舞台美術費、舞台監督費、楽器レンタル料、特殊効果料、電源車費、トランスポート費、ピアノ調律費、出演料、広告宣伝費（新聞・雑誌・放送媒体・DM発送費・その他）、広告制作費（新聞・雑誌・放送・DM制作・デザイン費・その他）、印刷費（ポスター・チラシ・プログラ

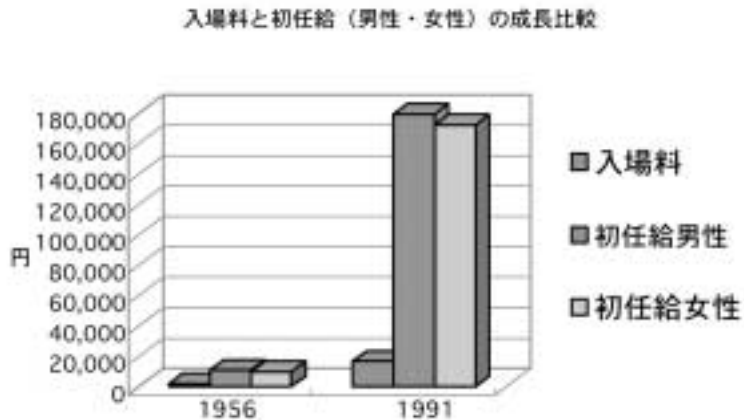
ム・チケット・招待状)、スタイリスト費、ヘア・メイク費、名義借用料、入場税、音楽著作権料、貸譜借用料、ケータリング費、人件費(スタッフ人件費・通訳料・アルバイト料)、出演交渉費、その他

コンサート開催の経済構造は、端的に言えば - が主催者利益なのだが、実際の入場料金設定にあたっては、A.社会環境・経済状況を鑑みた判断、B.同業他社開催状況、C.同種ジャンル入場料金との比較、D.過去開催時の実績、E.入場者数不確定によるリスク回避の方策・対応、準備、といった外的・間接的要因に追うエレメントが複雑に交錯する。それらが混成して成立しているのが現実である。

3.3. 外来オーケストラの入場料金と大学卒初任給の推移

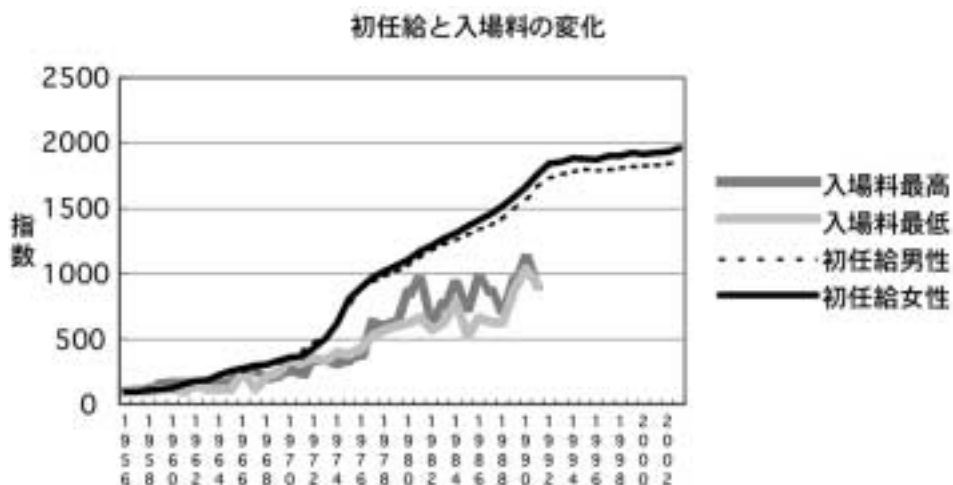
図11で示した外来オーケストラ主要14団体の入場料金の各年度平均値と、厚生労働省調査による「大卒者初任給額及び対前年増減率の推移」を比較対照したものが図12である。

図12 (1956年と1991年の比較)



この図の通り、初任給の上昇率に対し、明らかに入場料の上昇率は鈍いことが解る。加えて、入場料の最高・最低を指数で対照しても動態は相似している(図13)。

図 13 (1956 年～1991 年の推移)



【備考】大卒者初任給額及び対前年増減率の推移
(学生労働力調査)

	男性		女性			男性		女性	
	千円	増減率 (%)	千円	増減率 (%)		千円	増減率 (%)	千円	増減率 (%)
昭和 29 年	16.1	-	8.3	-	昭和 14 年	109.5	13.80	103.7	43.81
昭和 30 年	16.7	-	9.5	-	昭和 15 年	114.5	4.62	108.7	4.81
昭和 31 年	16.9	-	9.8	-	昭和 16 年	120.8	5.52	115.0	5.81
昭和 32 年	16.9	-	9.0	-	昭和 17 年	127.3	5.38	118.1	2.81
昭和 33 年	11.9	-	10.4	-	昭和 18 年	127.3	3.98	121.1	2.51
昭和 34 年	12.2	-	11.1	-	昭和 19 年	135.5	6.41	128.7	6.21
昭和 35 年	12.9	-	12.3	-	昭和 20 年	140.0	3.31	133.5	3.71
昭和 36 年	12.7	-	12.2	-	昭和 21 年	144.5	3.21	138.4	3.71
昭和 37 年	16.9	-	17.2	-	昭和 22 年	148.2	2.60	142.7	3.11
昭和 38 年	19.9	-	18.8	-	昭和 23 年	153.1	3.31	149.0	4.41
昭和 39 年	-	-	-	-	平成元年	160.9	5.11	155.6	4.41
昭和 40 年	-	-	-	-	平成 2 年	162.9	1.26	162.9	4.41
昭和 41 年	-	-	-	-	平成 3 年	179.4	10.20	172.3	4.31
昭和 42 年	-	-	-	-	平成 4 年	186.9	4.23	180.1	4.51
昭和 43 年	-	-	-	-	平成 5 年	190.2	1.78	181.9	1.01
昭和 44 年	-	-	-	-	平成 6 年	197.4	3.78	184.5	1.41
昭和 45 年	34.7	-	34.7	-	平成 7 年	194.2	-1.62	183.0	-0.81
昭和 46 年	41.1	-	38.1	-	平成 8 年	193.2	-0.52	183.6	-0.31
昭和 47 年	45.9	-	42.4	-	平成 9 年	193.9	0.36	188.2	2.51
昭和 48 年	47.8	-	49.1	-	平成 10 年	195.5	0.82	188.2	0.01
昭和 49 年	67.8	-	60.9	-	平成 11 年	196.6	0.56	188.7	0.21
昭和 50 年	83.6	-	78.8	-	平成 12 年	196.9	0.15	187.4	-0.71
昭和 51 年	84.3	-	87.6	-	平成 13 年	198.3	0.67	188.6	0.61
昭和 52 年	101.0	17.11	95.2	5.81	平成 14 年	198.5	0.11	188.8	0.11
昭和 53 年	105.5	4.52	99.8	4.81	平成 15 年	201.2	1.36	192.5	2.11

※昭和 29 年～51 年は、調査の範囲や方法等が異なるので直接対比できない
 ※昭和 39 年～44 年は、大卒について調査していない

3.4. 外来オーケストラの入場料金と消費者物価総合指数

更に総務省調査による「消費者物価総合指数」、「持家の帰属家賃を除く消費者物価総合指数（全国）」を加えて対照すると、

図 14 (1956 ~ 1990 年の推移)

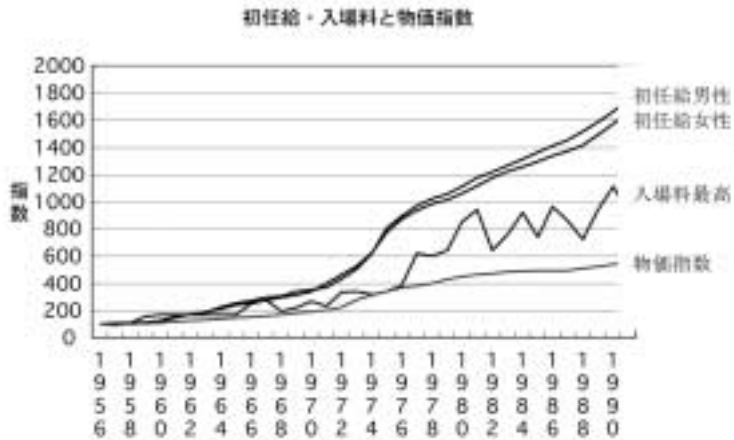
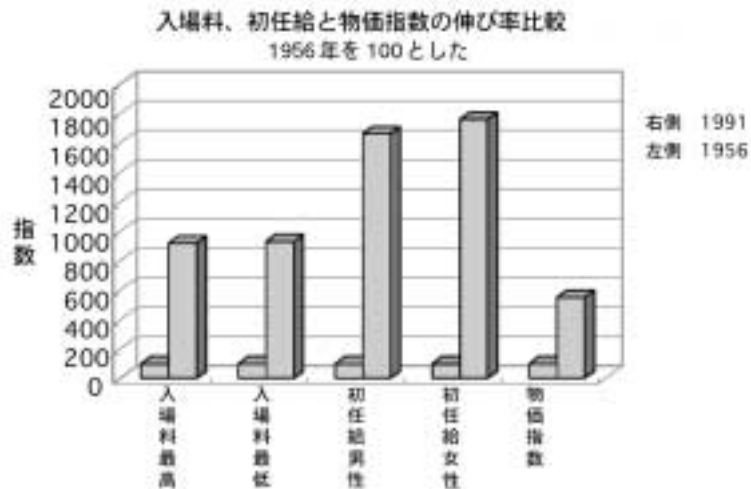


図 15 (1956 年と 1991 年の比較)



【添付図表】消費者物価総合指数（全国）総務省調査

平成12年=100

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
1970年	81.1	81.2	81.4	81.8	81.6	81.8	81.8	81.5	82.0	82.6	82.6	82.8	81.8
1971年	83.1	83.1	83.2	83.6	83.7	83.9	83.8	83.6	84.0	84.7	84.4	84.4	83.9
1972年	84.3	84.8	84.9	85.3	85.4	85.3	85.3	85.7	85.9	86.3	86.1	86.3	85.5
1973年	86.7	87.8	87.9	88.6	88.3	88.4	88.8	89.0	89.1	89.3	89.8	89.8	88.6
1974年	84.8	86.3	86.5	87.7	87.9	88.1	88.1	88.8	89.3	89.4	89.9	89.8	88.8
1975年	82.8	82.7	83.1	84.1	84.4	84.4	84.3	84.4	85.6	86.4	86.7	86.7	84.5
1976年	87.2	87.8	87.8	88.2	88.4	88.5	88.9	88.5	89.0	89.3	89.3	89.1	88.7
1977年	82.6	83.8	83.3	84.3	84.9	84.9	84.7	84.5	84.8	85.6	86.1	85.4	84.5
1978年	85.5	85.8	86.4	87.1	87.5	87.2	87.4	87.8	88.3	88.5	87.8	87.7	87.3
1979年	87.8	87.8	88.2	88.1	88.7	88.8	88.4	88.7	89.5	89.4	89.1	89.4	88.8
1980年	72.3	72.8	73.3	74.6	75.2	75.5	75.6	75.4	76.7	76.8	77.8	78.7	75.2
1981年	77.5	77.4	77.7	78.3	78.9	78.2	78.8	78.8	79.8	80.0	79.9	80.8	78.8
1982年	80.8	79.9	80.0	80.6	81.0	81.8	81.4	81.1	82.3	82.5	81.7	81.7	81.1
1983年	81.7	81.3	81.9	82.3	82.1	82.8	82.3	82.1	83.0	83.7	82.3	83.8	82.5
1984年	83.3	83.8	84.0	84.2	84.8	84.2	84.3	83.8	84.9	85.5	85.1	85.3	84.4
1985年	85.5	85.2	85.5	86.0	86.2	86.2	86.4	86.2	86.3	87.1	86.4	86.5	86.1
1986年	86.8	86.7	86.7	86.9	87.2	86.7	86.3	86.3	86.7	86.8	86.4	86.2	86.7
1987年	83.9	83.9	84.2	87.0	87.2	87.8	88.8	88.7	87.4	87.4	87.8	88.9	86.7
1988年	86.7	86.7	86.8	87.3	87.3	87.2	87.8	87.3	87.9	88.4	88.8	87.8	87.3
1989年	87.8	87.2	87.8	88.3	89.8	88.8	88.8	88.5	88.3	91.0	88.8	88.1	89.3
1990年	86.3	86.8	87.0	91.7	92.2	91.8	91.8	92.0	92.7	93.7	93.8	93.3	92.1
1991年	84.1	83.8	84.3	84.8	85.3	84.9	84.8	85.0	85.2	86.2	86.4	85.9	85.1
1992年	84.8	83.7	84.1	87.1	87.2	87.1	86.4	86.7	87.1	87.2	87.8	87.8	86.7
1993年	87.8	87.8	87.3	88.0	88.1	88.8	88.2	88.5	88.6	88.5	88.8	88.1	88.0
1994年	88.2	88.2	88.8	88.8	88.9	88.5	88.1	88.5	88.8	89.3	89.8	88.7	88.6
1995年	88.7	88.4	88.3	88.6	88.8	88.7	88.2	88.3	88.9	88.6	88.2	88.3	88.3
1996年	88.2	88.8	88.2	88.8	89.0	88.7	88.8	88.5	88.9	89.1	88.8	88.9	88.6
1997年	88.8	88.8	88.7	88.7	88.9	89.9	89.9	89.5	89.6	89.3	89.9	89.7	88.4
1998年	89.8	89.5	89.9	89.1	89.4	89.0	89.4	89.5	89.1	89.8	89.7	89.3	89.8
1999年	89.8	89.8	89.5	89.8	89.8	89.7	89.3	89.6	89.8	89.3	89.5	89.2	88.7
2000年	89.1	88.8	89.0	88.2	88.3	89.1	88.8	89.1	88.8	88.8	88.7	88.8	88.8
2001年	88.8	88.7	88.3	88.5	88.6	88.3	88.8	88.4	88.2	88.2	88.7	88.8	88.3
2002年	88.4	87.8	88.1	88.4	88.7	88.8	88.2	88.3	88.5	88.3	88.3	88.3	88.4
2003年	88.8	87.7	88.0	88.3	88.5	88.2	88.8	88.2	88.3	88.3	87.8	87.9	88.1

【参考図C】 時家の帰国客を除く消費者物価総合指数（全国）総務省調査

平成12年=100

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
1946年	-	-	-	-	-	-	-	2.81	2.65	2.40	2.28	2.71	-
1947年	3.04	3.29	3.75	3.93	4.43	3.39	6.41	6.78	7.21	6.93	6.92	7.39	5.10
1948年	7.40	8.18	8.74	8.94	8.29	3.48	10.4	11.6	11.6	11.1	11.7	12.3	10.1
1949年	12.8	13.1	12.5	13.6	12.6	13.3	13.6	13.6	13.5	13.1	12.8	12.9	12.3
1950年	13.1	12.5	12.5	12.6	12.2	11.9	12.3	12.5	12.5	12.2	12.4	12.8	12.4
1951年	13.5	14.0	14.4	14.5	14.4	14.3	14.3	14.9	15.1	15.2	15.2	15.2	14.5
1952年	15.3	15.2	15.2	15.3	15.2	15.2	15.4	15.4	15.4	15.4	15.3	15.2	15.3
1953年	15.4	15.9	15.9	15.9	15.9	16.0	16.4	16.6	16.6	17.1	16.9	16.9	16.3
1954年	17.2	17.3	17.3	17.4	17.3	17.4	17.5	17.5	17.4	17.6	17.2	17.2	17.3
1955年	17.3	17.3	17.2	17.3	17.2	17.2	17.1	17.2	17.2	17.3	17.6	16.9	17.2
1956年	17.0	17.3	17.2	17.3	17.2	17.4	17.2	17.3	17.3	17.4	17.3	17.3	17.3
1957年	17.5	17.5	17.5	17.7	17.9	17.8	18.0	18.1	18.0	18.0	17.7	17.7	17.8
1958年	17.7	17.6	17.4	17.5	17.5	17.8	17.7	17.9	17.8	18.0	17.8	17.7	17.7
1959年	17.8	17.7	17.7	17.9	17.7	17.9	17.9	18.1	18.0	18.1	18.1	18.1	17.9
1960年	18.3	18.3	18.2	18.4	18.4	18.5	18.5	18.6	18.6	18.8	18.4	18.8	18.6
1961年	19.0	19.1	19.1	19.2	19.2	19.2	19.3	19.6	19.7	20.2	20.2	20.4	19.5
1962年	20.5	20.4	20.5	20.8	20.9	20.8	21.0	21.0	20.9	21.0	21.5	21.5	20.9
1963年	22.0	22.1	22.2	22.3	22.4	22.6	22.4	22.3	22.6	22.6	22.7	22.8	22.4
1964年	22.8	22.8	22.8	23.1	23.2	23.1	23.0	23.3	23.6	24.0	23.8	23.8	23.3
1965年	24.4	24.3	24.4	24.9	24.8	24.7	24.8	24.7	25.1	25.4	25.2	25.3	24.8
1966年	25.4	25.8	25.8	26.2	26.0	26.0	26.1	25.9	26.5	26.5	26.2	26.5	26.1
1967年	26.8	26.9	27.0	27.1	26.8	26.7	26.6	26.9	27.3	27.8	27.7	28.0	27.1
1968年	28.2	28.3	28.3	28.4	28.4	28.2	28.2	28.4	29.1	29.1	29.2	29.0	28.6
1969年	29.2	29.2	29.5	29.7	29.8	29.8	30.1	30.5	30.8	30.9	30.8	30.9	30.1
1970年	31.4	31.8	32.1	32.3	32.2	32.2	32.1	32.0	32.6	33.1	33.1	33.3	32.4
1971年	33.6	33.6	33.7	34.2	34.2	34.3	34.3	34.3	35.1	35.2	34.9	34.9	34.3
1972年	35.0	35.0	35.4	35.7	35.9	35.8	35.8	36.2	36.2	36.6	36.5	36.7	35.9
1973年	37.1	37.4	38.4	38.1	38.8	38.9	40.1	40.5	41.7	41.6	42.2	43.7	40.1
1974年	45.7	47.1	47.6	48.9	49.8	49.7	50.7	50.7	51.5	52.7	53.1	53.3	49.9
1975年	53.9	53.9	54.5	55.3	55.8	55.4	55.4	55.6	56.9	57.7	57.1	57.5	54.8
1976年	58.4	59.0	59.2	60.8	60.8	60.9	61.2	60.7	62.4	62.7	62.7	63.4	61.1
1977年	64.1	64.3	64.8	65.8	66.4	66.1	66.0	66.0	67.1	67.4	68.8	68.3	66.0
1978年	66.8	67.0	67.6	68.4	68.8	68.4	68.7	68.7	69.6	69.7	69.8	69.9	68.4
1979年	68.9	68.7	69.2	70.2	70.9	70.9	71.5	70.9	71.8	72.6	72.4	72.7	70.9
1980年	73.8	74.1	74.6	76.0	76.7	77.0	77.0	76.8	78.2	78.3	78.5	78.2	76.6
1981年	78.9	78.9	79.3	79.8	80.4	80.8	80.4	80.0	81.3	81.6	81.2	81.4	80.3
1982年	81.4	81.3	81.5	82.1	82.5	82.5	81.8	82.5	83.9	84.1	83.2	83.1	82.3
1983年	83.2	82.9	83.4	83.7	84.4	84.0	83.7	83.4	84.5	85.3	84.7	84.5	84.0
1984年	84.7	85.3	85.5	85.7	86.3	85.8	85.8	85.0	86.4	87.1	86.8	86.7	85.9
1985年	87.1	86.7	87.1	87.8	87.7	87.7	87.9	87.7	87.8	88.6	87.8	87.9	87.6
1986年	88.3	88.1	88.1	88.3	88.8	88.1	87.8	87.5	88.0	88.1	87.8	87.4	88.0
1987年	87.0	86.9	87.4	88.1	88.3	88.1	87.4	87.8	88.5	88.5	88.9	87.9	87.8
1988年	87.6	87.4	87.8	88.1	88.2	88.1	87.9	88.1	88.9	89.4	88.9	88.7	88.2
1989年	88.4	88.1	88.6	88.2	88.9	89.7	89.5	89.3	91.2	92.0	91.8	91.0	90.3
1990年	91.4	91.6	91.9	92.8	93.2	92.7	92.6	93.0	93.7	94.8	94.8	94.5	93.1
1991年	95.2	94.8	95.3	95.9	96.4	95.9	95.8	96.0	96.2	97.2	97.5	97.1	96.1
1992年	96.8	96.7	97.1	98.3	98.4	98.1	97.2	97.0	98.2	98.2	97.9	97.9	97.7
1993年	97.8	97.9	98.3	98.8	98.8	98.9	99.1	99.4	99.5	99.4	98.7	98.7	98.8
1994年	98.9	98.8	99.4	99.5	99.7	99.2	98.7	99.2	99.5	99.9	99.8	99.2	99.3
1995年	99.3	98.9	98.9	99.2	99.4	99.3	98.6	98.7	99.4	99.1	98.7	98.7	99.0
1996年	98.5	98.4	98.6	99.2	99.4	99.0	98.9	98.8	99.2	99.4	99.8	99.2	99.0
1997年	98.9	98.7	98.9	101.1	101.3	101.3	100.8	100.9	101.7	102.0	101.2	101.0	100.6
1998年	100.9	100.7	101.1	101.4	101.8	101.3	100.5	100.4	101.4	102.2	102.1	101.6	101.3
1999年	101.1	100.7	100.7	101.2	101.3	100.9	100.4	100.7	101.3	101.4	100.7	100.3	100.9
2000年	100.1	99.8	100.1	100.3	100.4	100.1	99.8	100.1	100.8	99.9	99.6	99.4	100.8
2001年	99.7	99.4	99.5	99.3	99.5	99.1	98.7	99.2	99.0	99.0	98.2	98.2	99.1
2002年	98.0	97.5	97.7	98.8	98.4	98.3	97.9	98.2	98.1	98.0	98.8	97.9	98.0
2003年	97.5	97.2	97.5	98.0	98.1	97.8	97.8	97.8	97.9	97.9	97.4	97.5	97.7

3.3. 図12、13及び3.4. 図14、15が示す通り、外来オーケストラ公演の入場料金は、初任給上昇率、物価指数の上昇率と対照し比較すると、スライドする様なカーブを描くことなく鈍く、上昇率は決して高くないのである。にも拘らず、何故入場料金が高額すぎるの

声を、随所で耳にするのだろうか？ 社団法人・日本クラシック音楽事業協会発行『クラシック音楽市場拡大の為の調査・研究』による調査・記載に於いても、コンサートに行きたいに行かれない理由について、音楽団体所属者・音楽大学卒業生共に70%が「料金が高額すぎる」と答えている。(注5)

3.5. 外来オーケストラ公演入場料金に対する意識・価値観調査

ここに尚美学園大学・芸術情報学部・音楽表現学科学生56人、東海大学学生13人、及び一般人18人を対象としたアンケート調査の結果を示し、更に分析を加える。

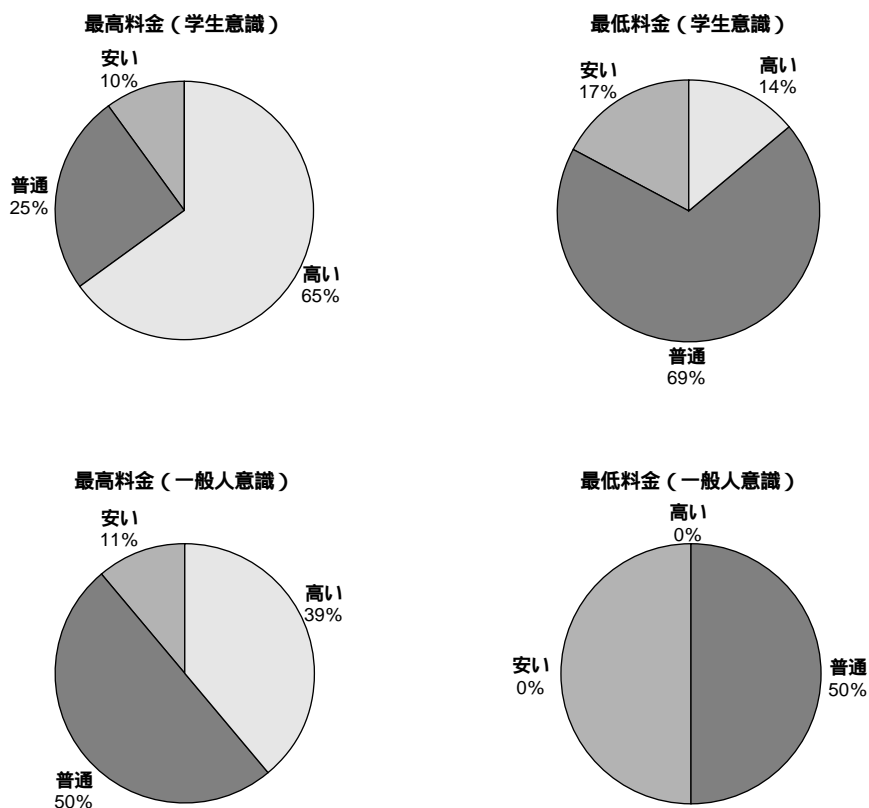
アンケート内容は2003年来日のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(クリスティアン・ティーレマン指揮)の入場料金(最高¥29000、最低¥10000)をサンプリングした。

尚、調査は各々2004年5月に実施。結果を図16に学生は男女別、一般人は職業別に区分して記載する。

図16

		最高 ¥29000			最低 ¥10000		
		高い	普通	安い	高い	普通	安い
大学生	男性26名	13	8	5	2	16	8
	女性43名	32	9	2	8	31	4
	計 69名	45	17	7	10	47	12
一般人	45歳~20代男性 2名	1	1			2	
	45歳~30~40代男性 1名		1				1
	45歳~50代以上男性 3名	1	2			2	1
	医者男女各1名 2名		1	1			2
	商店主男性 2名		1	1		1	1
	自由業フリー男性 1名		1			1	
	新聞記者男性 2名	1	1				2
	雑誌記者男性 1名		1				1
	ピアノ教師女性 2名	2				2	
	主婦 2名	2				1	1
	計 18名	7	9	2	0	9	9
合計 87名		52	26	9	10	56	21

図 17



この調査結果（図 16、17）が示す通り、最高金額（¥29000）に対し、学生は半数以上、一般人は3分の1が高いと感じ、最低金額（¥10000）に対しては、学生、一般人共に普通の金額と認識している。更に詳細に分析すると、

- A 1) 最高金額が高いと回答した学生のうち、女子学生が男子学生の2倍以上。
- A 2) 最高金額、最低金額共に安いと答えた男子学生数は女子学生の約2倍。

という結果から、啻に女子学生は男子学生より経済的観念が発達しているとも読み取れるが、一方で男子学生は女子学生より文化に対して理解があることを現しているとも判断できる。

一般人の回答を分析すると、

- A 3) 最高金額、最低金額共に回答1位は普通であり、最低金額に対し安いと回答した数と普通と答えた数が同数であった。
- A 4) 最高金額に対して安いと返答した数の全体に占める%は学生より低く、業種は医者と商店主のみ。

A 5) 最高金額に対して、ピアノ教師、主婦 4 人全員が高いに回答。

この結果は、学生と一般人の所得の違いを明確にしたものと考えられ、A 4) に見られる傾向は、一般人が学生より金額体系に対しシビアであることを示している。また、A 5) 回答では女性の経済観など、女子学生との共通点を覗うことができる。

この調査はサンプル数が少なく完全なものと言えず、従って表層を断片的に取り上げたに過ぎない。しかし本調査実施によって、ある一定の動向を読み取ることを可能としたのみに留まらず、入場料金の設定・チケット購入をめぐる様々な問題の暗示に繋がり、料金体系が生成されるに至る、その背後の諸関係を注視していく作業を、今後の課題とすべきことを啓示してくれた。

3.6. 生活水準と入場料金の連関

外来主要オーケストラの入場料を調査(3.1.)し、公演実施に関わる経費に考察を加えた(3.2.)上で、そのデータを基に外来オーケストラの入場料金と大学卒初任給の推移(3.3.)及び外来オーケストラの入場料金と消費者物価総合指数(3.4.)の上昇率を比較・対照させた結果、前述の通り、オーケストラ入場料金は初任給、物価指数に比して決して上昇していない事が判明した。

しかし、外来オーケストラ公演入場料金に対する意識・価値観調査(3.5.)によって、聴衆の入場料に対する意識は、3.3～4.で示した上昇カーブの鈍さと同期していない。

従って3.4～5の考察から以下の諸点を思料、類推することができる。

- 1) 初任給が上がり、生活水準が高くなる事が、必ずしもコンサート・チケットの購入に結びつかない。
- 2) 物価指数上昇率より入場料上昇率が低く抑えられているにも関わらず、他の消費金額との対比をすることはない。
- 3) 50年余前の1950年代の生活水準を勘案すると、家計に占める入場料の割合は現在より異常に高かった。
- 4) 入場料金の高低が生活水準に関連することはない。
- 5) 文化活動・受容に対して消費する習慣が根付いていない。
- 6) 西欧諸国の様に、入場料金の上限・下限の幅が少ない。

3.7. 今後の課題

これまでの考察から表出した諸問題についてここに提示する。

3.7.1. マネージメントに求められる課題

- 1) マネージメントの文化的意義の省察。
- 2) CD、放送等で知名度のある演奏家に集中する傾向の打破。
- 3) 邦人演奏家の育成。
- 4) 聴衆・観客層拡大の為の具体的創案。
- 5) 社員教育の徹底。
- 6) 機能的、且つ柔軟性を保有するプロジェクトの構築。
- 7) 企業メセナを始め、協賛企業ネットワークへの適応能力獲得。
- 8) 企業体組織の確立。

3.7.2. 輸入からの脱皮

- 1) 受容から自立への移行。
- 2) 海外演奏家の本質的な芸術性の精査。
- 3) 邦人演奏家との峻別による外来演奏家依存からの脱却。
- 4) 西洋文化輸入と日本文化輸出の共存・融合。

3.7.3. コンサート企画の熟考

- 1) 公演の文化的意義・今日的意義・地域的意義・必然性・目的の樹立。
- 2) 音楽の本質・精神性を追求した企画立案。
- 3) 公演の継続性を可能とする企画立案。
- 4) 演奏家の特質を徹底精査したプログラミング。
- 5) 演奏家の隠れた特質を見出すプログラミング。
- 6) 観客層別の分化した企画立案。
- 7) 視覚・聴覚障害者対象コンサートの実施具体策。
- 8) コンサートの付加価値構築案。
- 9) 入場料金設定の新たな創案(料金幅等)。
- 10) 他文化ジャンルとの融合策。
- 11) 広告・宣伝の効率的、効果的手法確立。
- 12) 演奏会場選択に於ける発想転換。

こうした提示に伴い、マネージメントの企業経営の在り方、プログラミング別による採算性の研究、延いては、大衆の文化への参加意識高揚策、等の係属する課題も浮上し、これらには更なる調査・分析を経た上での思料を要するが、今回は3.7.1～3.の課題提示に留め、それらについては稿を改めたい。

4. おわりに

本稿は、明治維新以前から現在に至る迄の西洋音楽演奏の変遷を調査したものに、筆者が所蔵する資料を加えたものを基盤としている。そして、それらを整理・統合・分析し、その主脈を概観した上で、その潮流から外来オーケストラに照準を絞り、入場料金について論じたものである。

筆者の拙いジャーナリスト、プロデューサー経験から蒐集した資料（本稿では紙数の関係でごく一部に過ぎない）、多くの演奏家の言説、一覧で示した外来演奏家公演＝時代変遷の表象を照らし合わせながら論証を施した。

本論は、外来公演の歴史を精査することによる、我国に於けるクラシック音楽文化受容の変遷を調査・分析したものであり、後段の外来オーケストラの入場料金に対する考察は、アート・マネージメント考究のための小さな一歩である。外来公演という様式のコミュニケーションを通じたクラシック音楽の単なる受容から、更に伸展させ、その本質・精神の享受を主眼としての帰結とも言うべき＜演奏会へ足を運ぶ習慣＞の成立条件としてのアート・マネージメントのあるべき姿への一つの試論でもある。

尚、執筆にあたり資料としての価値を有するように出来る限り配慮した。

注

- 1) 2) 芸団協出版部編：「芸能白書 2001」63 ページ、「ジャンル別総回数」
- 3) 同、71 ページ、「外来演奏家の公演」
- 4) 社団法人日本クラシック音楽事業協会編：「クラシック音楽市場拡大の為の調査・研究」53 ページ
「この1年間に鑑賞したジャンルと回数」
- 5) 社団法人日本クラシック音楽事業協会編：「クラシック音楽市場拡大の為の調査・研究」61、62 ページ
「今後の鑑賞意向と阻害要因」

主な参考文献

- Walter Salmen：「Das Konzert」(C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München)
- Xavier M.Frascogna, Jr. & H.Lee Hetherington：
「This Business of Artist Management」(Billboard Books)
- Krasilousky & Shemel：「This Business of Music」(Billboard Books)
- TadLathrop & Jim Pettigrew, Jr. 著、関根直樹訳：「音楽ビジネス」
＜マーケティング&プロモーション編＞(音楽之友社)
- 日本近代洋楽史研究会編：明治期「日本人と音楽」＜東京日日新聞全音楽記事内容＞
(国立音楽大学付属図書館発行 / 株式会社大空社)

日本近代洋楽史研究会編：明治期「日本人と音楽」＜東京日日新聞全音楽関係記事集成＞
（国立音楽大学付属図書館発行／株式会社大空社）
秋山龍英編：「日本の洋楽百年史」（第一法規出版株式会社）
ディック・ワイズマン著、関根直樹訳：「アメリカン・ミュージック・ビジネス」（音楽之友社）
鹿毛丈司著：「音楽ビジネス・自遊自在」（音楽之友社）
中村洪介著：「近代日本洋楽史序説」（東京書籍）
中村理平著：「洋楽導入者の軌跡」（刀水書房）
竹内 博編著：「来日西洋人名事典」（日外アソシエーツ）
伊藤裕夫・中川幾郎・片山泰輔・山崎稔恵・小林真理共著：
「アーツマネジメント概論」（水曜社）
皆川弘至著：「音楽企画制作概論 」、「音楽企画制作概論 」（音楽之友社）
野村光一著：「お雇い外国人 音楽 」（鹿島研究所出版会）
芸団協出版部編：「芸能白書 2001」
社団法人日本クラシック音楽事業協会編：「クラシック音楽市場拡大の為の調査・研究」
野村光一、中島健蔵、三善清達：「日本洋楽外史」（ラジオ技術社）

資料提供

厚生労働省
総務省
辻 修氏
雑喉 潤氏